徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第80集

徳島城下町跡
安宅２丁目地点

緊急地方道路整備事業徳島東環状線（末広～住吉）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００９

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

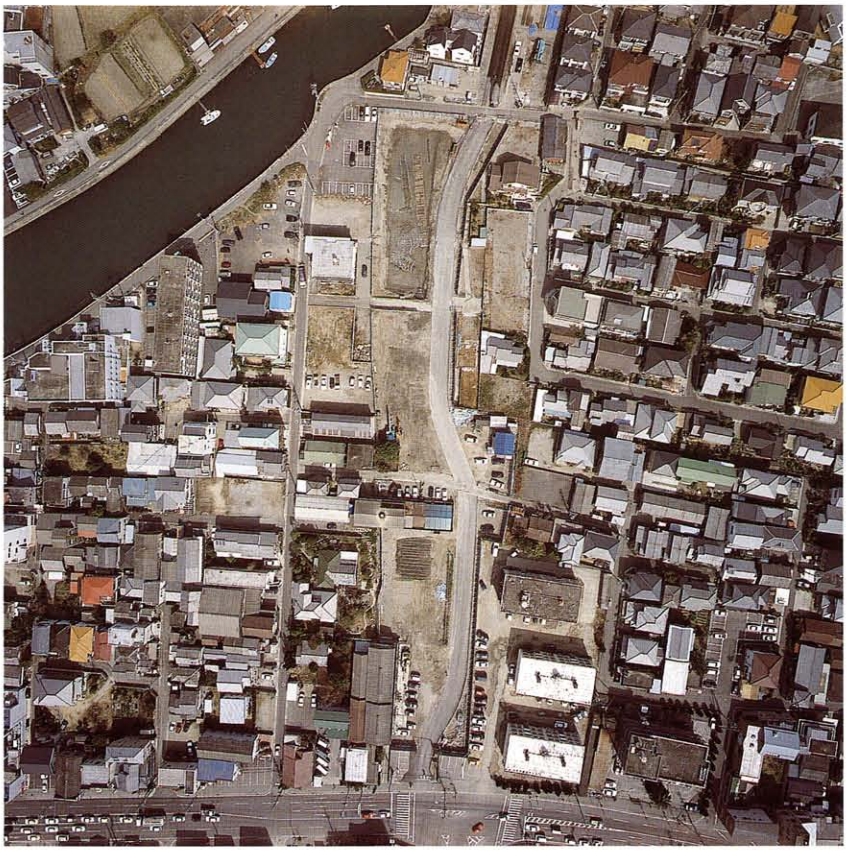
徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第80集

徳島城下町跡
安宅２丁目地点

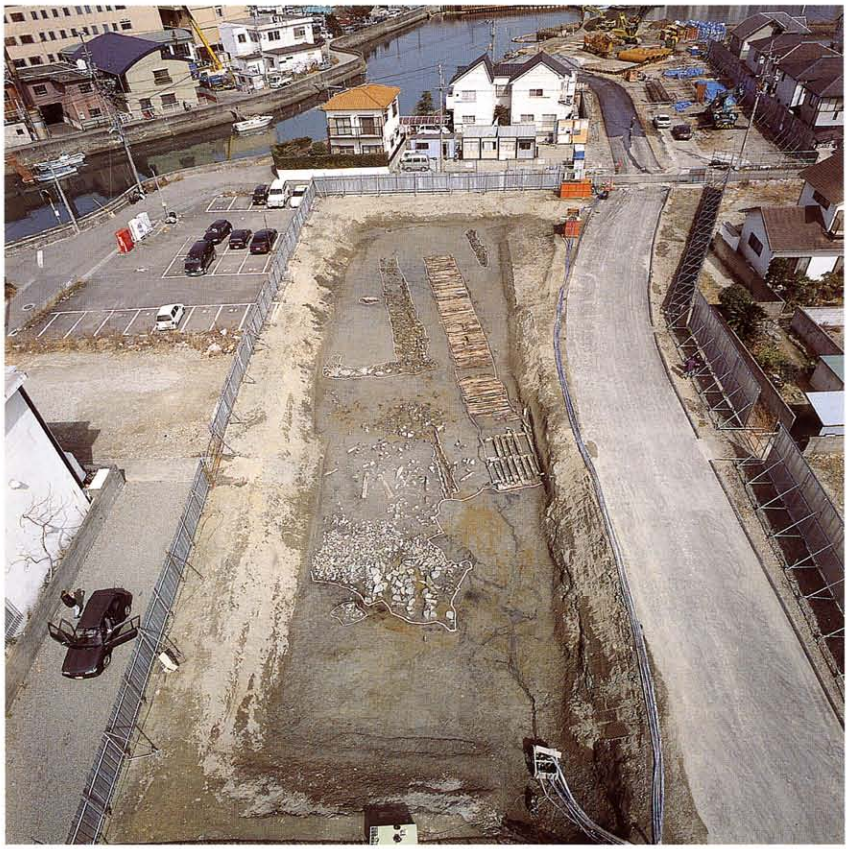
緊急地方道路整備事業徳島東環状線（末広～住吉）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００９

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

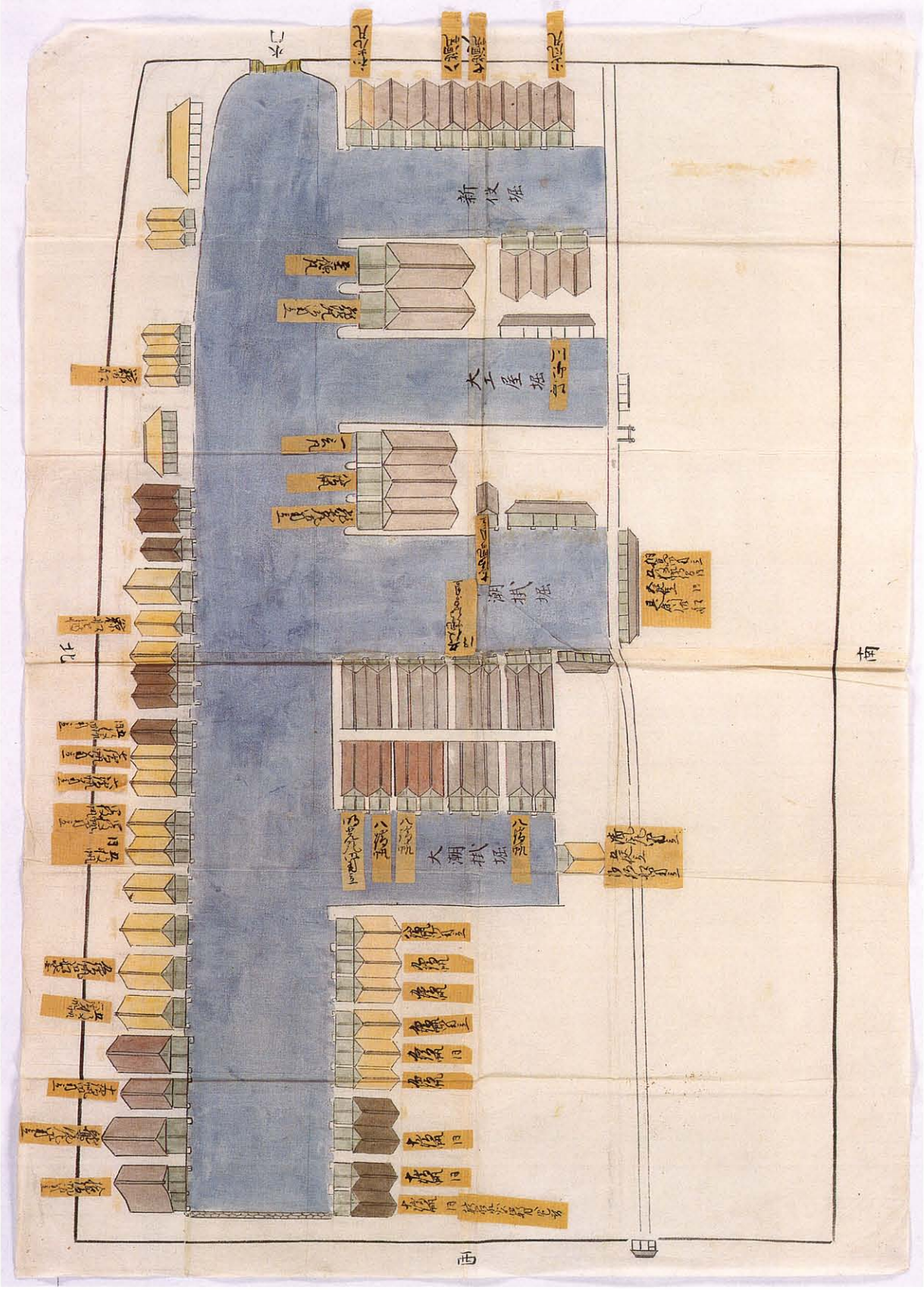


徳島城下町跡安宅２丁目地点　遠景

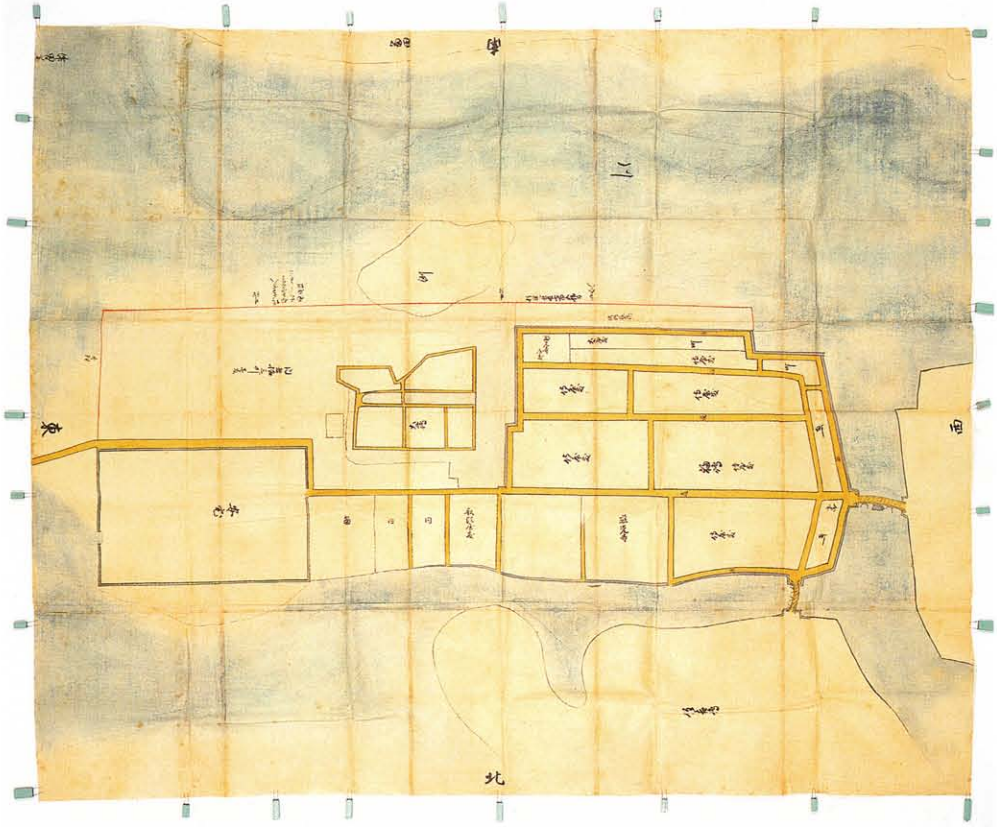


１区全景

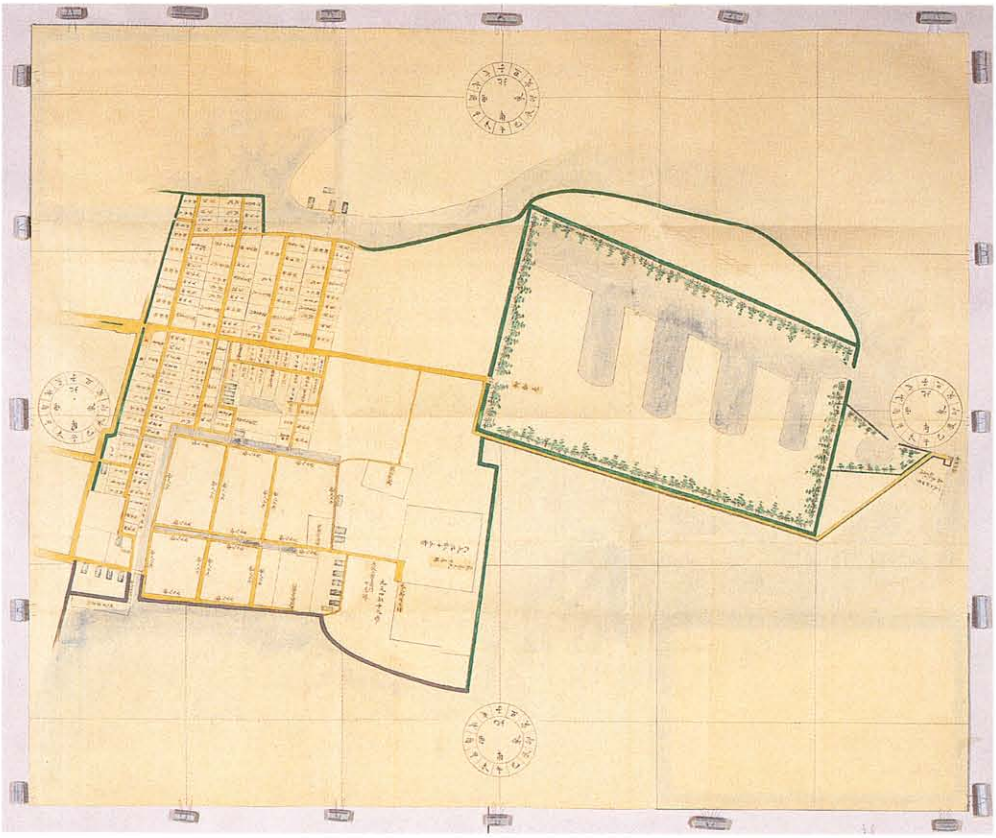
巻頭図版２



「安宅御船蔵絵図」

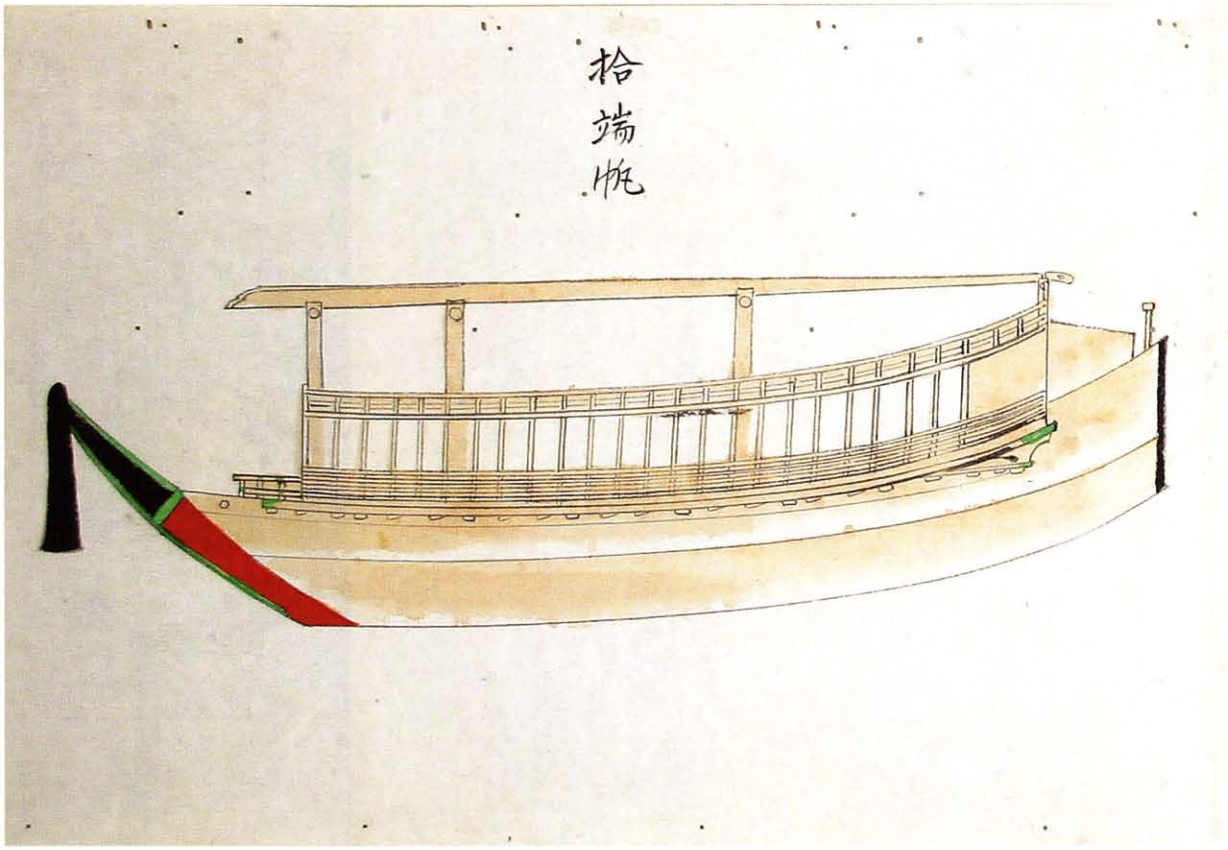


「福島安宅絵図」

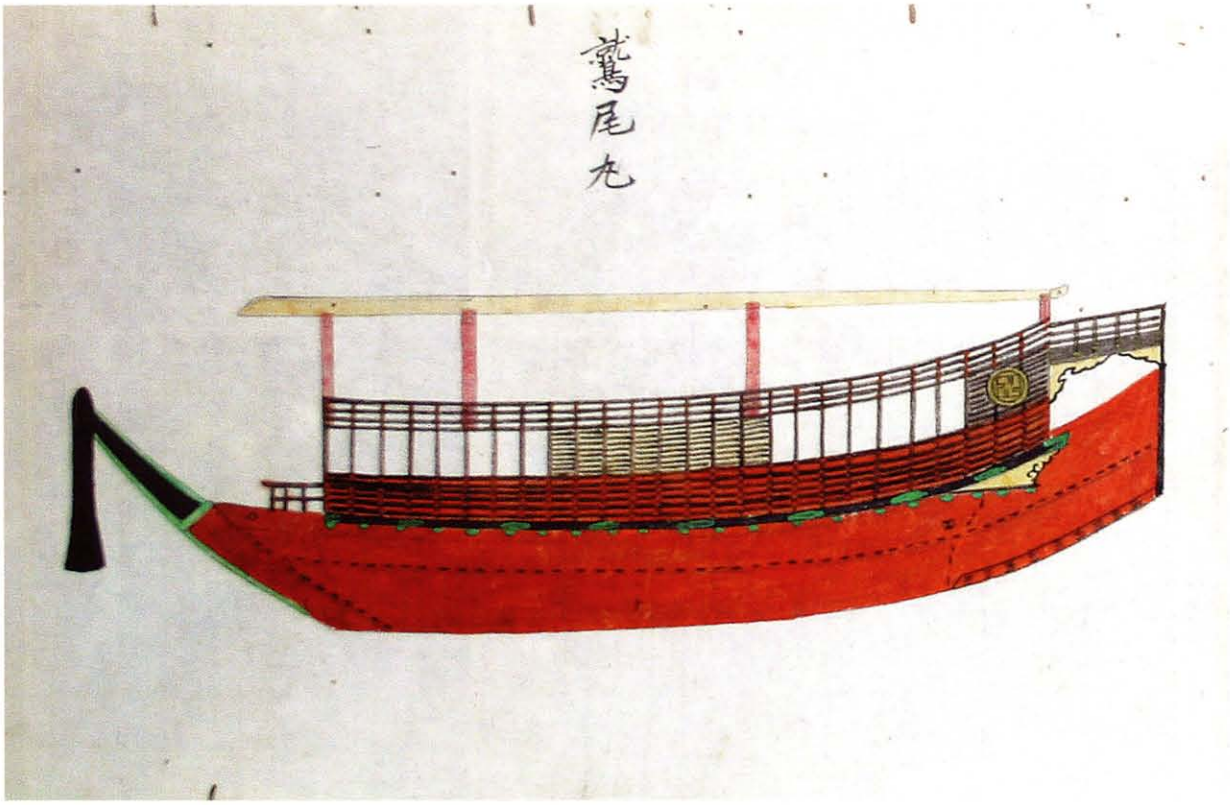


「安宅」

巻頭図版４



『徳島藩御船絵巻』部分「拾端帆」



『徳島藩御船絵巻』部分「鷲尾丸」

序文

本書は、緊急地方道路整備事業徳島東環状線（末広～住吉）の建設に伴い、平成12年度及び18年度、19年度に（財）徳島県埋蔵文化財センターが実施した徳島城下町跡安宅2丁目地点の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものであります。

当遺跡は、吉野川河口部の支流群によって形成された三角州上の徳島市東部に位置し、徳島藩政期に徳島城下町の東部に設けられ水軍の根拠地に該当します。「御船屋」は、寛永年間に常三島から安宅地区に移設され、幕末まで存続しました。幕末に描かれた「安宅御船蔵絵図」は、安宅役所に設けられた船の格納庫を示す絵図です。そこには「安宅御囲」と称された土手で区画された一帯（総面積31,460坪、東西約220間、南北23間）には、東西方向の掘1条と南北方向の掘4条や堀に直結する建物「御船屋」76軒が描かれています。今回の発掘調査では、この「御船屋」の一部や堀が確認され、規模や具体的構造を明らかにすることが出来ました。そして文献や絵図でのみ理解されてきた徳島藩水軍の実態を一部ではありますが明らかにすることが出来たことは、地域史の中で大きな成果となります。

なお、埋蔵文化財発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、多くの地元の皆様と関係機関の方々にご理解、ご協力並びにご教授をいただきましたことに深く感謝いたします。

2009年9月

財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
理事長　福　家　　清　司

例言

1．本書は平成 12 年度～ 19 年度に発掘調査を実施した緊急地方道路整備事業徳島東環状線（末広～住吉）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書は徳島城下町跡安宅 2 丁目地点の調査成果について収録した。
3．発掘調査は、徳島県県土整備部都市計画課（当時）から徳島県教育委員会が委託を受け、徳島県教育委員会文化財課からの再委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
4．発掘調査及び報告書作成についての実施期間は下記の通りである。
発掘調査
平成 12 年度　平成 12 年 10 月 1 日～平成 13 年 3 月 31 日
平成 18 年度　平成 18 年 10 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日
平成 19 年度　平成 19 年 7 月 2 日～平成 19 年 8 月 31 日
報告書作成
平成 21 年度　平成 21 年 4 月 1 日～平成 21 年 9 月 30 日
5．挿図番号・写真番号・遺物番号は通し番号とした。
巻頭図版 2「安宅御船蔵絵図」は笹尾秀登氏所蔵である。
巻頭図版 3「福島安宅絵図」は個人蔵である。
巻頭図版 4「御山下島分絵図・安宅」は個人蔵である。
PL. 203 ～ 207 は徳島市立徳島城博物館所蔵である。
6．第 4 図は国土交通省発行の『水害地形分類図』より転載したものである。
第 5 図は国土地理院登録の 1：25,000 地形図『徳島』を転載し、加筆したものである。
第 8 図の地形図は徳島市発行の 1：2,500 都市計画図を転載し、加筆したものである。
7．発掘調査、報告書作成期間を通じて次の機関の方々に御協力・ご教授を得た。
（財）高知県埋蔵文化財センター・佐賀県教育庁・徳島城博物館・徳島大学埋蔵文化財調査室・鳴門市教育委員会・萩市歴史まちづくり部・船の科学館
柏本秋生・小堀敬介・笹尾秀登・白木原宜・谷川真基・森　清治・中原　計・蜂須賀弘行・廣田佳久
（敬称略・五十音順）
8．本書の執筆は、木村哲也（第Ⅰ章第 1 節）・栗林誠治（第Ⅰ章第 2 節～第Ⅲ章、第Ⅴ章）・須藤茂樹（第Ⅵ章第 1 節）・中原　計（第Ⅳ章第 1 節）・根津寿夫（第Ⅵ章第 2 節）があたった。全体の編集は栗林が行った。
9．遺構写真は調査担当者が、遺物写真は栗林誠治が撮影した。
10．本書に収録した遺物及び写真・図面類の記録は、徳島県板野郡板野町犬伏字平山 86 － 2 に所在する徳島県立埋蔵文化財総合センターにて保管している。

凡例

1．遺構の表示は、（財）徳島県埋蔵文化財センターが定めた略記号による。
2．方位は国土座標軸世界測地系を用い、高さは東京湾標準潮位（T.P.）を表す。
3．遺構図の縮尺は下記のように統一した。
SJ・SG 平面図：1/100、SJ・SG 断面図：1/50、SD 遺構図：1/40、SK・SP 遺構図：1/30
4．本書で用いた土層の色調は、小山正忠・竹原秀夫編著 1997『新版標準土色長』日本色研事業株式会社による。
5．遺物図の縮尺は、下記のように統一した。
土器・陶磁器類・瓦・土製品：1/4、木製品：1/3、鉄器：1/2

本文目次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
1　調査に至る経緯（木村） …… 1
2　調査の経過（栗林） …… 3
（1）調査の経過 …… 3
（2）調査区の配置とグリッドの設定 …… 3
（3）調査日記抄 …… 3

Ⅱ　遺跡の立地と環境（栗林） …… 5
1　徳島城下町跡安宅２丁目地点を巡る環境 …… 5
（1）地理的環境 …… 5
（2）歴史的環境 …… 7
2　徳島城下町と調査区について …… 14
（1）城下町の建設と家臣団の屋敷地 …… 16
（2）調査対象地の変遷 …… 16
（3）徳島城関係略年表 …… 16

Ⅲ　調査成果（栗林） …… 19
1　基本層序 …… 19
（1）基本層序 …… 19
2　遺構・遺物 …… 19
（1）遺構配置 …… 19
（2）遺構と遺物 …… 28

Ⅳ　自然化学分析 …… 145
1　徳島城下町安宅船置き所跡出土木質遺物の樹種（中原） …… 145

Ⅴ　総括（栗林） …… 156
1　遺構 …… 156
（1）大堀 …… 156
（2）御船屋１：大堀北岸「拾端帆御用立」 …… 156
（3）御船屋２：大堀北岸「鷲御丸御用立」 …… 157
（4）御船屋３，４：大堀南岸「十端帆　同」 …… 157
（5）御囲 …… 157
2　遺物 …… 158
（1）安宅役所成立以前の遺物について …… 158
（2）安宅役所廃絶後の遺物について …… 158
（3）瓦について …… 158
（4）船釘について …… 163

Ⅵ　付論 …… 167
（1）「安宅御船蔵」にはどのような船が格納されていたのか（須藤） …… 167
（2）　安宅役所について（根津） …… 176

表目次

第 1 表　SG1001 出土陶磁器類観察表 …… 33
第 2 表　SG1001 出土金属製品観察表 …… 33
第 3 表　SG1002 出土陶磁器類観察表 …… 38
第 4 表　SG1002 出土瓦類観察表 …… 38
第 5 表　SG1002 出土金属製品観察表 …… 38
第 6 表　SG1003 出土陶磁器類観察表 …… 45
第 7 表　SG1003 出土瓦類観察表（1）…… 45
第 8 表　SG1003 出土瓦類観察表（2）…… 46
第 9 表　SG1003 出土金属製品観察表 …… 50
第 10 表 SG1003 出土木製品観察表 …… 50
第 11 表 SG1004 出土金属製品観察表 …… 51
第 12 表 SJ1001 出土木製品観察表 …… 67
第 13 表 SJ1001 出土金属製品観察表 …… 67
第 14 表 SJ1001 出土陶磁器類観察表 …… 67
第 15 表 SJ1002 出土陶磁器類観察表 …… 75
第 16 表 SJ1002 出土瓦類観察表 …… 75
第 17 表 SJ1002 出土金属製品観察表 …… 75
第 18 表 SJ1002 出土木製品観察表 …… 76
第 19 表 SU1001 出土陶磁器類観察表 …… 79
第 20 表 SU1001 出土金属製品観察表 …… 79
第 21 表 SU1001 出土木製品観察表 …… 80
第 22 表 SD1001 出土陶磁器類観察表 …… 86
第 23 表 SD1001 出土瓦類観察表 …… 86
第 24 表 SD1001 出土金属製品観察表 …… 87
第 25 表 SD1001 出土木製品観察表 …… 87
第 26 表 SD1002 出土陶磁器類観察表 …… 91
第 27 表 SD1002 出土瓦類観察表 …… 94
第 28 表 SD1002 出土金属製品観察表 …… 94
第 29 表 SD1002 出土木製品観察表 …… 94
第 30 表 SD1003 出土陶磁器類観察表 …… 98
第 31 表 SD1005 出土土製品観察表 …… 99
第 32 表 SD1006 出土金属製品観察表 …… 100
第 33 表 SD1008 出土陶磁器類観察表 …… 102
第 34 表 SD1009 出土金属製品観察表 …… 102
第 35 表 SD1009 出土木製品観察表 …… 102
第 36 表 SD1013 出土石製品観察表 …… 105
第 37 表 SD1013 出土陶磁器類観察表 …… 106
第 38 表 SK1007 出土陶磁器類観察表 …… 110
第 39 表 SK1007 出土石製品観察表 …… 110
第 40 表 SK1009 出土陶磁器類観察表 …… 111
第 41 表 SP1004 出土金属製品観察表 …… 114
第 42 表 SP1004 出土陶磁器類観察表 …… 115
第 43 表 SP1013 出土陶磁器類観察表 …… 115
第 44 表 SP1036 出土金属製品観察表 …… 118
第 45 表 1 区包含層出土陶磁器類観察表（1）…… 122
第 46 表 1 区包含層出土陶磁器類観察表（2）…… 124
第 47 表 1 区包含層出土陶磁器類観察表（3）…… 126
第 48 表 1 区包含層出土瓦類観察表（1）…… 126
第 49 表 1 区包含層出土瓦類観察表（2）…… 126
第 50 表 1 区包含層出土金属製品観察表 …… 132
第 51 表 1 区包含層出土木製品観察表 …… 138
第 52 表 2 区包含層出土陶磁器類観察表 …… 140
第 53 表 2 区包含層出土金属製品観察表 …… 141
第 54 表 2 区包含層出土木製品観察表 …… 141
第 55 表 3 区包含層出土陶磁器類観察表 …… 142
第 56 表 3 区包含層出土石製品観察表 …… 142
第 57 表 木質遺物分析一覧表 …… 148
第 58 表 徳島城下町出土軒丸瓦分類属性 …… 159
第 59 表 徳島城下町出土軒丸瓦分類表（1）…… 160
第 60 表 徳島城下町出土軒丸瓦分類表（2）…… 161
第 61 表 徳島城下町出土軒丸瓦分類表（3）…… 162
第 62 表 「徳島藩御船絵巻」に描かれた船一覧 …… 169
第 63 表 絵図・古文書にみる安宅役所の呼称 …… 176
第 64 表 水軍の施設 …… 180

挿図目次

第 1 図　徳島城下町跡安宅 2 丁目地点調査地点図 … 2
第 2 図　徳島城下町跡安宅 2 丁目地点グリッド配置図 (S=1/1,000) … 4
第 3 図　徳島城下町跡安宅 2 丁目地点位置図 … 5
第 4 図　徳島城下町跡安宅 2 丁目地点周辺地形帯 … 6
第 5 図　徳島城下町跡安宅 2 丁目地点周辺遺跡分布 … 8
第 6 図　近世期の街道及び旧地形 … 14
第 7 図　安宅御船蔵絵図 … 15
第 8 図　徳島城下町安宅地区町割り … 17
第 9 図　調査区土層図地点図 … 19
第 10 図　調査区土層図 1 … 20
第 11 図　調査区土層図 2 … 21
第 12 図　調査区土層図 3 … 22
第 13 図　遺構配置図（S=1/1,000） … 23
第 14 図　1 区遺構配置図（S=1/500） … 24
第 15 図　2 区遺構配置図（S=1/500） … 25
第 16 図　3，4 区遺構配置図（S=1/500） … 26
第 17 図　SG1001 遺構図（1） … 27
第 18 図　SG1001 遺構図（2） … 28
第 19 図　SG1001 遺物出土地点図 … 29
第 20 図　SG1001 出土遺物図 … 32
第 21 図　SG1002 遺構図（1） … 34
第 22 図　SG1002 遺構図（2） … 35
第 23 図　SG1002 遺構図（3） … 36
第 24 図　SG1002 出土遺物図 … 38
第 25 図　SG1003 遺構図（1） … 39
第 26 図　SG1003 遺構図（2） … 40
第 27 図　SG1003 遺構図（3） … 41
第 28 図　SG1003 出土遺物図（1） … 44
第 29 図　SG1003 出土遺物図（2） … 46
第 30 図　SG1003 出土遺物図（3） … 47
第 31 図　SG1003 出土遺物図（4） … 48
第 32 図　SG1003 出土遺物図（5） … 49
第 33 図　SG1003 出土遺物図（6） … 50
第 34 図　SG1004 遺構図、出土遺物図 … 51
第 35 図　SG1005 遺構図 … 52
第 36 図　SJ1001 遺構図（1） … 53
第 37 図　SJ1001 遺構図（2） … 54
第 38 図　SJ1001 遺構図（3） … 55
第 39 図　SJ1001 出土遺物図 … 66
第 40 図　SJ1002 遺構図（1） … 68
第 41 図　SJ1002 遺構図（2） … 69
第 42 図　SJ1002 敷板実測図（1） … 72
第 43 図　SJ1002 敷板実測図（2） … 73
第 44 図　SJ1002 出土遺物図（1） … 74
第 45 図　SJ1002 出土遺物図（2） … 76
第 46 図　SU1001 遺構図 … 77
第 47 図　SU1001 出土遺物図（1） … 78
第 48 図　SU1001 出土遺物図（2） … 80
第 49 図　SG1006 土層図（1） … 81
第 50 図　SG1006 土層図（2） … 82
第 51 図　SD1001 土層図 … 83
第 52 図　SD1001 遺物出土状況図 … 84
第 53 図　SD1001 出土遺物図（1） … 85
第 54 図　SD1001 出土遺物図（2） … 87
第 55 図　SD1002 土層図 … 88
第 56 図　SD1002 出土遺物図（1） … 89
第 57 図　SD1002 出土遺物図（2） … 90
第 58 図　SD1002 出土遺物図（3） … 92
第 59 図　SD1002 出土遺物図（4） … 93
第 60 図　SD1002 出土遺物図（5） … 95
第 61 図　SD1002 出土遺物図（6） … 96
第 62 図　SD1002 出土遺物図（7） … 97
第 63 図　SD1003 遺構図、出土遺物図 … 98
第 64 図　SD1004 遺構図 … 99
第 65 図　SD1005 遺構図、出土遺物図 … 99
第 66 図　SD1006 遺構図、出土遺物図 … 100
第 67 図　SD1007 遺構図 … 100
第 68 図　SD1008 遺構図、出土遺物図 … 101
第 69 図　SD1009 遺構図、出土遺物図 … 102
第 70 図　SD1010 遺構図 … 102
第 71 図　SD1011 遺構図 … 103
第 72 図　SD1012 遺構図 … 104
第 73 図　SD1013 遺構図、出土遺物図 … 105
第 74 図　SD1014 遺構図 … 106
第 75 図　SK1001 遺構図 … 106
第 76 図　SK1002 遺構図 … 107
第 77 図　SK1003 遺構図 … 107
第 78 図　SK1004 遺構図 … 108
第 79 図　SK1005 遺構図 … 108

第 80 図　SK1006 遺構図 …… 108
第 81 図　SK1007 遺構図 …… 109
第 82 図　SK1007 出土遺物図 …… 109
第 83 図　SK1008 遺構図 …… 111
第 84 図　SK1009 遺構図、出土遺物図 …… 111
第 85 図　SK1010 遺構図 …… 111
第 86 図　SK1011 遺構図 …… 112
第 87 図　SK1012 遺構図 …… 112
第 88 図　SK1013 遺構図 …… 112
第 89 図　SK1014 遺構図 …… 112
第 90 図　SK1015 遺構図 …… 112
第 91 図　SK1016 遺構図 …… 113
第 92 図　SK1017 遺構図 …… 113
第 93 図　SK1018 遺構図 …… 113
第 94 図　SK1019 遺構図 …… 113
第 95 図　SP1001 遺構図 …… 114
第 96 図　SP1002 遺構図 …… 114
第 97 図　SP1003 遺構図 …… 114
第 98 図　SP1004 遺構図、出土遺物図 …… 114
第 99 図　SP1005 遺構図 …… 114
第 100 図　SP1006 遺構図 …… 114
第 101 図　SP1007 遺構図 …… 115
第 102 図　SP1008 遺構図 …… 115
第 103 図　SP1009 遺構図 …… 115
第 104 図　SP1010 遺構図 …… 115
第 105 図　SP1011 遺構図 …… 115
第 106 図　SP1013 遺構図、出土遺物図 …… 115
第 107 図　SP1012 遺構図 …… 116
第 108 図　SP1014 遺構図 …… 116
第 109 図　SP1015 遺構図 …… 116
第 110 図　SP1016 遺構図 …… 116
第 111 図　SP1017 遺構図 …… 116
第 112 図　SP1018 遺構図 …… 116
第 113 図　SP1019 遺構図 …… 116
第 112 図　SP1020 遺構図 …… 116
第 113 図　SP1021 遺構図 …… 116
第 114 図　SP1022 遺構図 …… 117
第 115 図　SP1023 遺構図 …… 117
第 116 図　SP1024 遺構図 …… 117
第 117 図　SP1025 遺構図 …… 117
第 118 図　SP1026 遺構図 …… 117
第 119 図　SP1027 遺構図 …… 117
第 120 図　SP1028 遺構図 …… 117
第 121 図　SP1029 遺構図 …… 117
第 122 図　SP1030 遺構図 …… 117
第 123 図　SP1031 遺構図 …… 118
第 124 図　SP1032 遺構図 …… 118
第 125 図　SP1033 遺構図 …… 118
第 126 図　SP1034 遺構図 …… 118
第 127 図　SP1035 遺構図 …… 118
第 128 図　SP1036 遺構図、出土遺物図 …… 118
第 129 図　SP1037 遺構図 …… 119
第 130 図　SP1038 遺構図 …… 119
第 131 図　SP1039 遺構図 …… 119
第 132 図　SP1040 遺構図 …… 119
第 133 図　SP1041 遺構図 …… 119
第 134 図　SP1042 遺構図 …… 119
第 135 図　SP1043 遺構図 …… 119
第 136 図　SP1044 遺構図 …… 119
第 137 図　SX1001 遺構図 …… 120
第 138 図　1 区包含層出土遺物図（1）…… 121
第 139 図　1 区包含層出土遺物図（2）…… 123
第 140 図　1 区包含層出土遺物図（3）…… 125
第 141 図　1 区包含層出土遺物図（4）…… 127
第 142 図　1 区包含層出土遺物図（5）…… 128
第 143 図　1 区包含層出土遺物図（6）…… 129
第 144 図　1 区包含層出土遺物図（7）…… 130
第 145 図　1 区包含層出土遺物図（8）…… 131
第 146 図　1 区包含層出土遺物図（9）…… 133
第 147 図　1 区包含層出土遺物図（10）…… 134
第 148 図　1 区包含層出土遺物図（11）…… 135
第 149 図　1 区包含層出土遺物図（12）…… 136
第 150 図　1 区包含層出土遺物図（13）…… 137
第 151 図　1 区包含層出土遺物図（14）…… 138
第 152 図　2 区包含層出土遺物図（1）…… 139
第 153 図　2 区包含層出土遺物図（2）…… 141
第 154 図　2 区包含層出土遺物図（3）…… 142
第 155 図　3 区包含層出土遺物図 …… 143
第 156 図　調査対象地点遺構復元図 …… 156
第 157 図　「安宅御船蔵絵図」…… 168
第 158 図　「御山下画図（忠英様御代御山下画図）」の部分 …… 177
第 159 図　「御山下画図」の部分 …… 177

巻頭図版目次

1　徳島城下町跡安宅２丁目地点　遠景
　１区全景
2　「安宅御船蔵絵図」
3　「福島安宅絵図」
　「安宅」
4　『徳島藩御船絵巻』部分「拾端帆」
　『徳島藩御船絵巻』部分「鷲尾丸」

図版目次

ＰＬ．１　１区調査区土層堆積状況 …… 20
ＰＬ．２　２区調査区土層堆積状況 …… 21
ＰＬ．３　３区調査区土層堆積状況 …… 22
ＰＬ．４　４区調査区土層堆積状況 …… 22
ＰＬ．５　２区完掘状況（北から） …… 25
ＰＬ．６　２区完掘状況（南から） …… 25
ＰＬ．７　３区完掘状況（北から） …… 26
ＰＬ．８　４区完掘状況（北から） …… 26
ＰＬ．９　SG1001，SJ1001 検出状況 …… 28
ＰＬ．10　SG1001 検出状況１ …… 28
ＰＬ．11　SG1001 検出状況２ …… 29
ＰＬ．12　SG1001 検出状況３ …… 29
ＰＬ．13　SG1001 内礎石状平石１ …… 30
ＰＬ．14　SG1001 内礎石状平石２ …… 30
ＰＬ．15　SG1001 内礎石状平石３ …… 30
ＰＬ．16　SG1001 内礎石状平石４ …… 30
ＰＬ．17　SG1001 内礎石状平石５ …… 30
ＰＬ．18　SG1001 内礎石状平石６ …… 30
ＰＬ．19　SG1001 内礎石状平石７ …… 30
ＰＬ．20　SG1001 内礎石状平石８ …… 30
ＰＬ．21　SG1001 集石内土台木１ …… 31
ＰＬ．22　SG1001 集石内土台木２ …… 31
ＰＬ．23　SG1001 集石内土台木３ …… 31
ＰＬ．24　SG1001 集石内土台木４ …… 31
ＰＬ．25　SU1001 遺物出土状況１ …… 31
ＰＬ．26　SU1001 遺物出土状況２ …… 31
ＰＬ．27　SG1002 北側部分検出状況 …… 36
ＰＬ．28　SG1002 南側部分全景 …… 36
ＰＬ．29　SG1002 測量風景 …… 37
ＰＬ．30　SG1002 胴木検出状況 …… 37
ＰＬ．31　SG1002，SJ1002 検出状況 …… 37
ＰＬ．32　SG1002 内杭検出状況 …… 37
ＰＬ．33　SG1002 内杭打設状況 …… 37
ＰＬ．34　SG1002 集石下土台木 …… 37
ＰＬ．35　SG1003 南端 …… 42
ＰＬ．36　SG1003 完掘状況（北から） …… 42
ＰＬ．37　SG1003 南端部礎石１ …… 42
ＰＬ．38　SG1003 南端礎石２（西から） …… 42
ＰＬ．39　SG1003 南端礎石３ …… 42
ＰＬ．40　SG1003 土台木 …… 42
ＰＬ．41　SG1003 集石断ち割り …… 43
ＰＬ．42　SG1003 土台木固定状況 …… 43
ＰＬ．43　SG1003 土留板検出状況 …… 43
ＰＬ．44　SG1003 土留板土層堆積状況 …… 43
ＰＬ．45　SG1003 集石内杭１ …… 43
ＰＬ．46　SG1003 集石内杭２ …… 43
ＰＬ．47　SG1004 完掘状況１ …… 52
ＰＬ．48　SG1004 完掘状況２ …… 52
ＰＬ．49　SJ1001 完掘状況（南東から） …… 52
ＰＬ．50　SJ1001 完掘状況（東から）１ …… 52
ＰＬ．51　SG1001，SJ1001 完掘状況（南から） …… 55
ＰＬ．52　SJ1001 完掘状況（東から）２ …… 55
ＰＬ．53　SJ1001 胴木（南から） …… 56
ＰＬ．54　SJ1001 胴木（東から） …… 56
ＰＬ．55　SJ1001 敷板拡大１ …… 56
ＰＬ．56　SJ1001 敷板及び杭１ …… 56
ＰＬ．57　SJ1001 敷板及び杭２ …… 56
ＰＬ．58　SJ1001 敷板及び杭３ …… 56
ＰＬ．59　SJ1001 敷板拡大２ …… 56
ＰＬ．60　SJ1001 敷板拡大３ …… 57
ＰＬ．61　SJ1001 敷板拡大４ …… 57
ＰＬ．62　SJ1001 敷板裏面 …… 57
ＰＬ．63　SJ1001 敷板下部土層堆積状況 …… 57
ＰＬ．64　SJ1001 胴木下部構造１ …… 57

ＰＬ．65　SJ1001 胴木下部構造２…… 57
ＰＬ．66　SJ1001 胴木組合せ１…… 57
ＰＬ．67　SJ1001 胴木組合せ２…… 57
ＰＬ．68　SJ1001 胴木組合せ３…… 58
ＰＬ．69　SJ1001 胴木組合せ４…… 58
ＰＬ．70　SJ1001 胴木固定状況…… 58
ＰＬ．71　SJ1001 胴木臍…… 58
ＰＬ．72　SJ1001 胴木下部構造１…… 58
ＰＬ．73　SJ1001 胴木下部構造２…… 58
ＰＬ．74　SJ1001 胴木下部構造３…… 58
ＰＬ．75　SJ1001 胴木下部構造４…… 58
ＰＬ．76　SJ1001 出土試料 507…… 59
ＰＬ．77　SJ1001 出土試料 512…… 59
ＰＬ．78　SJ1001 出土試料 512…… 59
ＰＬ．79　SJ1001 出土試料 512…… 59
ＰＬ．80　SJ1001 出土試料 512…… 59
ＰＬ．81　SJ1001 出土試料 514…… 59
ＰＬ．82　SJ1001 出土試料 514…… 59
ＰＬ．83　SJ1001 出土試料 514…… 59
ＰＬ．84　SJ1001 出土試料 514…… 59
ＰＬ．85　SJ1001 出土試料 514…… 59
ＰＬ．86　SJ1001 出土試料 514…… 59
ＰＬ．87　SJ1001 出土試料 514…… 59
ＰＬ．88　SJ1001 出土試料 514…… 60
ＰＬ．89　SJ1001 出土試料 522…… 60
ＰＬ．90　SJ1001 出土試料 522…… 60
ＰＬ．91　SJ1001 出土試料 522…… 60
ＰＬ．92　SJ1001 出土試料 522…… 60
ＰＬ．93　SJ1001 出土試料 522…… 60
ＰＬ．94　SJ1001 出土試料 522…… 60
ＰＬ．95　SJ1001 出土試料 532…… 60
ＰＬ．96　SJ1001 出土試料 532…… 61
ＰＬ．97　SJ1001 出土試料 532…… 61
ＰＬ．98　SJ1001 出土試料 532…… 61
ＰＬ．99　SJ1001 出土試料 532…… 61
ＰＬ．100　SJ1001 出土試料 532…… 61
ＰＬ．101　SJ1001 出土試料 532…… 61
ＰＬ．102　SJ1001 出土試料 532…… 61
ＰＬ．103　SJ1001 出土試料 532…… 61
ＰＬ．104　SJ1001 出土試料 532…… 62
ＰＬ．105　SJ1001 出土試料 532…… 62
ＰＬ．106　SJ1001 出土試料 532…… 62
ＰＬ．107　SJ1001 出土試料 532…… 62
ＰＬ．108　SJ1001 出土試料 532…… 62
ＰＬ．109　SJ1001 出土試料 532…… 62
ＰＬ．110　SJ1001 出土試料 532…… 62
ＰＬ．111　SJ1001 出土試料 532…… 62
ＰＬ．112　SJ1001 出土試料 532…… 63
ＰＬ．113　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．114　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．115　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．116　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．117　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．118　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．119　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．120　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．121　SJ1001 出土試料 533…… 63
ＰＬ．122　SJ1001 出土試料 534…… 63
ＰＬ．123　SJ1001 出土試料 534…… 63
ＰＬ．124　SJ1001 出土試料 534…… 64
ＰＬ．125　SJ1001 出土試料 534…… 64
ＰＬ．126　SJ1001 出土試料 534…… 64
ＰＬ．127　SJ1001 出土試料 534…… 64
ＰＬ．128　SJ1001 出土試料 534…… 64
ＰＬ．129　SJ1001 出土試料 534…… 64
ＰＬ．130　SJ1001 出土試料 534…… 64
ＰＬ．131　SJ1001 出土試料 534…… 64
ＰＬ．132　SJ1001 出土試料 534…… 65
ＰＬ．133　SJ1001 出土試料 534…… 65
ＰＬ．134　SJ1001 出土試料 534…… 65
ＰＬ．135　SJ1001 出土試料 534…… 65
ＰＬ．136　SJ1001 出土試料 534…… 65
ＰＬ．137　SJ1001 出土試料 534…… 65
ＰＬ．138　SJ1001 出土試料 534…… 66
ＰＬ．139　SJ1001 出土試料 534…… 66
ＰＬ．140　SJ1002 完掘状況（南から）…… 70
ＰＬ．141　SJ1002 完掘状況（北から）…… 70
ＰＬ．142　SJ1002 完掘状況（南東から）…… 70
ＰＬ．143　SJ1002（南から）…… 70
ＰＬ．144　SJ1002 敷板…… 70
ＰＬ．145　SJ1002 上部土層堆積状況…… 71
ＰＬ．146　SJ1002 上部杭１…… 71
ＰＬ．147　SJ1002 上部杭２…… 71
ＰＬ．148　SJ1002 上部杭３…… 71

ＰＬ．149　SJ1002 上部杭 4 …… 71
ＰＬ．150　SJ1002 上部杭 5 …… 71
ＰＬ．151　SJ1002 南側敷板 …… 73
ＰＬ．152　SJ1002 敷板固定状況 …… 73
ＰＬ．153　SJ1002 敷板固定杭 …… 73
ＰＬ．154　SU1001 完掘状況 …… 77
ＰＬ．155　SD1001 検出状況 …… 82
ＰＬ．156　SD1001 遺物出土状況 …… 82
ＰＬ．157　SD1001 土層堆積状況 1 …… 84
ＰＬ．158　SD1001 土層堆積状況 2 …… 84
ＰＬ．159　SD1002 土層堆積状況 …… 94
ＰＬ．160　SD1003 完掘状況 …… 97
ＰＬ．161　SD1008 遺物出土状況 …… 101
ＰＬ．162　SD1009 土層堆積状況 …… 102
ＰＬ．163　SD1011 完掘状況 …… 103
ＰＬ．164　SD1011 土層堆積状況 …… 103
ＰＬ．165　SD1013 遺物出土状況 …… 105
ＰＬ．166　SK1002 遺物出土状況 …… 107
ＰＬ．167　SK1007 遺物出土状況 …… 110
ＰＬ．168　SK1007 土層堆積状況 …… 110
ＰＬ．169　SK1008 完掘状況 …… 111
ＰＬ．170　1 区包含層内船部材出土状況 …… 138
ＰＬ．171　SJ1001 出土試料 501 …… 146
ＰＬ．172　SJ1001 出土試料 502 …… 146
ＰＬ．173　SJ1001 出土試料 503 …… 146
ＰＬ．174　SJ1001 出土試料 504 …… 146
ＰＬ．175　SJ1001 出土試料 506 …… 146
ＰＬ．176　SJ1001 出土試料 507 …… 146
ＰＬ．177　SJ1001 出土試料 508 …… 146
ＰＬ．178　SJ1001 出土試料 509 …… 146
ＰＬ．179　SJ1001 出土試料 511 …… 146
ＰＬ．180　SJ1001 出土試料 512 …… 146
ＰＬ．181　SJ1001 出土試料 513 …… 146
ＰＬ．182　SJ1001 出土試料 514 …… 146
ＰＬ．183　SJ1001 出土試料 515 …… 146
ＰＬ．184　SJ1001 出土試料 516 …… 146
ＰＬ．185　SJ1001 出土試料 517 …… 146
ＰＬ．186　SJ1001 出土試料 518 …… 146
ＰＬ．187　SJ1001 出土試料 519 …… 147
ＰＬ．188　SJ1001 出土試料 520 …… 147
ＰＬ．189　SJ1001 出土試料 521 …… 147
ＰＬ．190　SJ1001 出土試料 521 …… 147
ＰＬ．191　SJ1001 出土試料 522 …… 147
ＰＬ．192　SJ1001 出土試料 523 …… 147
ＰＬ．193　SJ1001 出土試料 524 …… 147
ＰＬ．194　SJ1001 出土試料 525 …… 147
ＰＬ．195　SJ1001 出土試料 527 …… 147
ＰＬ．196　SJ1001 出土試料 529 …… 147
ＰＬ．197　SJ1001 出土試料 530 …… 147
ＰＬ．198　SJ1001 出土試料 531 …… 147
ＰＬ．199　SJ1001 出土試料 532 …… 147
ＰＬ．200　SJ1001 出土試料 532 …… 147
ＰＬ．201　SJ1001 出土試料 533 …… 148
ＰＬ．202　SJ1001 出土試料 534 …… 148
ＰＬ．203「徳島藩御船絵巻」拡大（1）…… 170
ＰＬ．204「徳島藩御船絵巻」拡大（2）…… 171
ＰＬ．205「徳島藩御船絵巻」拡大（3）…… 172
ＰＬ．206「徳島藩御船絵巻」拡大（4）…… 173
ＰＬ．207「徳島藩御船絵巻」拡大（5）…… 174

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

（1）調査に至る経緯

徳島県では明石海峡開通後の道路整備の長期的なあり方として，豊かで活力に満ちた地域づくりと，安全で快適な生活環境の実現を図るため，平成９年３月に徳島県道路整備長期計画「チャレンジロード２１」を策定し，以来，効率的な道路整備に取り組んできた。そのコンセプトの一つとして，都市機能の充実と都市部の渋滞緩和のための放射環状道路等の整備，高齢化社会に対応する「やさしいみちづくり」の実現を目指してきた。

そのような中，徳島市の幹線道路は国道１１号，５５号，１９２号が徳島本町で１点に交わる放射状道路網であるために，交通の集中が起きやすく，交通渋滞が慢性化してきた。そこで，徳島県土木部（現徳島県県土整備部）は，放射状道路を相互に連絡し，交通の分散を図ることにより，都市部の渋滞を緩和し，快適な走行を確保する目的で環状道路を計画した。

そのうち徳島東環状線は，国道１１号，５５号より東に位置する路線区間で，徳島市八万町大野から川内町大松に至る延長10．４Ｋｍの道路であり，徳島県道路整備計画に先立って，平成７年度より末広住吉工区の延長１．８Ｋｍで事業計画が打ち出された。また当区間の内，住吉島川をまたぐ箇所については平成１４年度の暫定道路共用を目指し，橋梁を架設する。

平成11年１月13日，徳島県県土整備部都市道路整備局（現東部県土整備局）より徳島東環状線事業地内（徳島市住吉６丁目135-14～末広２丁目75-1の間，面積約60，000㎡）の埋蔵文化財所在の有無と取り扱いについて照会があった。（平成11.1.13都道局第38号）徳島県教育委員会文化財課（以下文化財課）はこれを受けて，財団法人徳島県埋蔵文化財センターに委託し，平成11年２月１日～２月28日の間，精密分布調査を実施し，事業地内安宅２丁目地点付近については，近世の阿波藩水軍基地である御船屋（安宅御役所）が所在する可能性があることが判明した。

御船屋跡とは江戸時代に現在の安宅町一帯に置かれた藩の水軍の基地であり，藩主の蜂須賀氏は，当初現在の常三島（現徳島大学工学部付近）に船置場を置いたとされるが，助任川の川底が砂の堆積で高くなり，船の航行に支障が出てきたことや，城周辺での武家屋敷の造成の必要などから，寛永17～19（1640～1642）年頃に現在の福島町東部に移設された。以後この一帯は水軍を意味する「安宅」と呼称され，藩の水軍機能の中枢地区となった。

文化財課では都市道路整備局に対し，御船屋跡地を通過する路線部分については試掘調査が必要と回答し，試掘調査は，文化財課が同局の協力を得て，平成11年６月に安宅工区9，740㎡（実調査面積235㎡），同年７月に末広工区340㎡（実調査面積30㎡）についてそれぞれ実施した。その結果，安宅工区の一部で，江戸時代（17世紀半ば）の御船屋に伴う遺構・遺物を確認した。江戸時代の水軍基地の調査事例は全国でも数が少なく，試掘調査の結果を受けた文化財課と都市道路整備局と協議を重ね，当該工事区間で工事着手前に発掘調査を実施し，遺跡の記録保存を図ることに合意した。

発掘調査は徳島県県土整備部都市計画課より配当替えを受け，徳島県が財団法人徳島県埋蔵文化財センターに委託して実施することとし，平成１２年度には暫定道路共用に向けての工事関連の調査を１，９９２㎡（調査期間６ヶ月），また，暫定道路を供用した後，完成形施工前の平成１８年度に２，１００㎡（調査期間６ヶ月），平成１９年度に６６８㎡（調査期間３ヶ月）を対象とし，総面積４，７６０㎡の発掘調査が実施されることとなった。

調査は，近世水軍基地の存在をにらみ，関連遺構の現地保存の可能性を視野に入れて行われ，実際に，調査

が開始された平成１２年度には，広範囲に御船屋基礎遺構を検出し，都市道路整備局との協議の結果，元位置での砂による埋め戻し保存を実施した。以後，平成１８～１９年度についても，御船屋遺構の拡がりを確認し，同様の取り扱いを行った。

尚，遺跡名については徳島県遺跡地図（№ 201-20）に記載されている徳島城下町跡安宅２丁目地点と呼称することとした。

これらの発掘調査の終了に伴い、発掘調査報告書を刊行する運びとなり、(財) 徳島県埋蔵文化財センターが、平成 21 年 4 月 1 日より同年 9 月 30 日にかけて遺物整理及び報告書作成に当たることとなった。

（２）調査体制及び報告書作成体制

調査体制及び報告書作成体制は以下の通りである。

発掘調査

平成 12 年度　理事長　青木武久
専務理事兼所長　寒川光明
常務理事兼事務局長　伊丹康裕
次長兼総務課長　高野　明
調査課長　菅原康夫
調査第一係長　光山忠幸
調査担当　前川直江・谷　恒二

平成 18 年度　理事長　佐藤　勉
専務理事兼所長　村山一行
常務理事兼事務局長　河野幸一
次長兼総務課長　一宮一郎
調査課長　中妻敬二
調査係長　濱　徹
調査担当　北尾秀昭・谷川真基

平成 19 年度　理事長　佐藤　勉
専務理事兼所長　伊川政文
常務理事兼事務局長　多田升二
次長兼総務課長　一宮一郎
調査課長　湯浅利彦
調査係長　藤川智之
調査担当　松家義人・谷川真基

報告書作成

平成 21 年度　理事長　福家清司
専務理事兼所長　阿部修三
常務理事兼事務局長　近松克仁
次長兼総務課長　三好修碁
事業課長　石井伸夫
整理係長・整理担当　栗林誠治

第１図　徳島城下町跡安宅２丁目地点調査地点図

2　調査の経過

（1）調査の経過

発掘調査は、平成12年度に徳島城下町跡安宅２丁目地点の北西隅から着手され、以降、南側と東側に新たに調査区を設定する形で進行した。調査地の遺跡は、徳島城下町の東端に該当し、徳島藩の水軍拠点である安宅御船役所に位置する。３カ年にわたる発掘調査と文化財課による立会調査の結果、調査対象地からは、通常の城下町関連遺構は確認されず、安宅御船役所関連遺構が検出された。

発掘調査対象地は、東環状道路予定地内で付帯工事が並行して行われたり、現行道路が隣接するなどの状況から、現地説明会を開催することは出来なかった。しかし、平成19年度には徳島市立福島小学校の見学会を開催したり、各調査年度には徳島県立埋蔵文化財総合センターにて開催された「発掘とくしま」において調査成果の紹介に努めた。

（2）調査区の配置とグリッドの設定

発掘調査は総計３ヶ年度を費やし、合計７ヶ所の調査区を設定している。平成12年度は１～３区、平成18年度は１～３区、平成19年度は１区に調査区が設定された。これらを総括して、北側より１，２，３区の名称を与えることとする。

先述の如く、発掘調査が数回にわたり、この間、測量基準が第Ⅳ系国土座標軸から世界測地系座標軸へと変更され、平成12年度発掘調査は第Ⅳ系、平成18，19年度は世界測地系をそれぞれ測量基準に用いた。本報告では、全て世界測地系座標軸に統一して記載する。

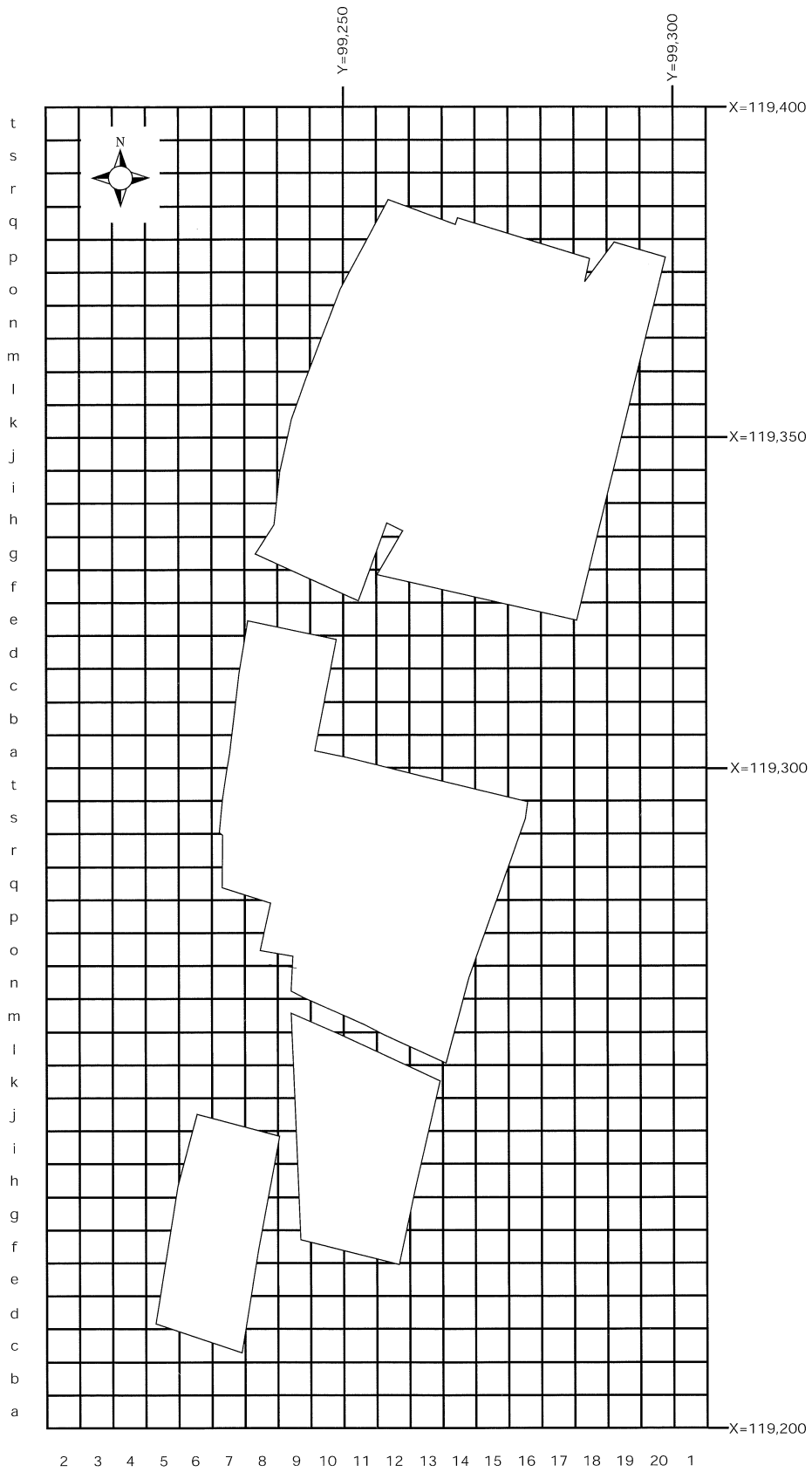
各グリッドの設定に当たっては、本体工事用基準点NO.１（X=119,404.0862、Y＝99,290.3030）、ＹＡ－１（X＝119,383.0060、Y＝99,248.8427）、ＹＡ－２（X＝119,338.4372，Y＝99,238.1246）の３点を、発掘調査測量基準点とした。この３点を基準にグリッドを設定した。グリッドは１００m四方の大グリッドと５m四方の小グリッドを設定した。大グリッドは、東西方向に西からⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ…、南北方向に南からα，β，γ，δ，εの名称を与え、αⅠ，β１等の表記とした。さらに小グリッドは、東西方向に西から１，２，３，４，…20、南北方向に南からａ，ｂ，ｃ，ｄ，ｅ…ｔの名称を与え、ａ１，ｂ１，ｃ１等の表記とした。

（3）調査日誌抄

平成12年度
10月１日　調査準備
３月31日　調査終了
平成18年度
10月２日　調査準備
10月16日　測量
10月17日　機械掘削開始
10月23日　１区包含層掘削開始
10月30日　１区遺構検出
11月１日　１区遺構内掘削
11月７日　１区遺構測量
11月８日　２区機械掘削
11月９日　２区包含層掘削

11月10日　1区完掘状況写真撮影
11月13日　1区埋め戻し
11月16日　2区遺構検出、写真撮影
11月17日　2区遺構内掘削、測量
12月15日　2区完掘状況写真撮影、埋め戻し
12月22日　3区機械掘削
12月27日　3区包含層掘削
1月12日　3区遺構検出、遺構内掘削、測量
3月6日　3区遺構完掘状況写真撮影
3月9日　徳島市立沖州小学校遺跡見学
3月19日　3区埋め戻し
3月28日　3区埋め戻し完了
3月31日　調査終了

平成19年度
7月2日　調査準備
7月3日　機械掘削、測量
7月5日　包含層掘削
7月24日　遺構検出状況写真撮影
7月25日　遺構内掘削、測量
8月9日　遺構完掘状況写真撮影
8月17日　埋め戻し
8月24日　埋め戻し完了
8月31日　調査終了



第2図　徳島城下町跡安宅2丁目地点グリッド配置図（S=1/1,000）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　徳島城下町跡安宅２丁目地点を巡る環境

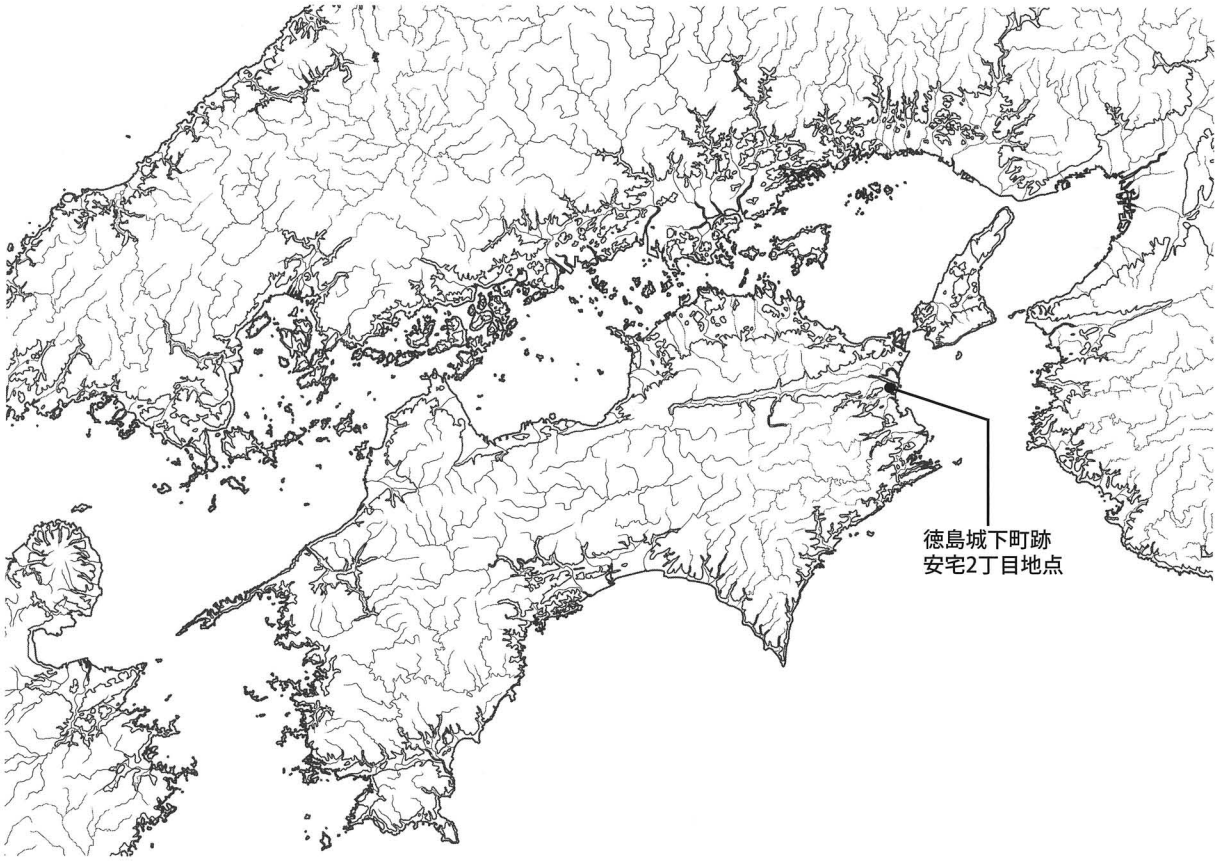
（1）地理的環境

徳島城下町跡安宅２丁目地点は、徳島県の最東部、徳島市安宅２丁目に所在する。調査地点は四国最大の河川、別名「四国三郎」と称される吉野川によって形成された沖積平野である、徳島平野上の河口域デルタ地帯に位置する。

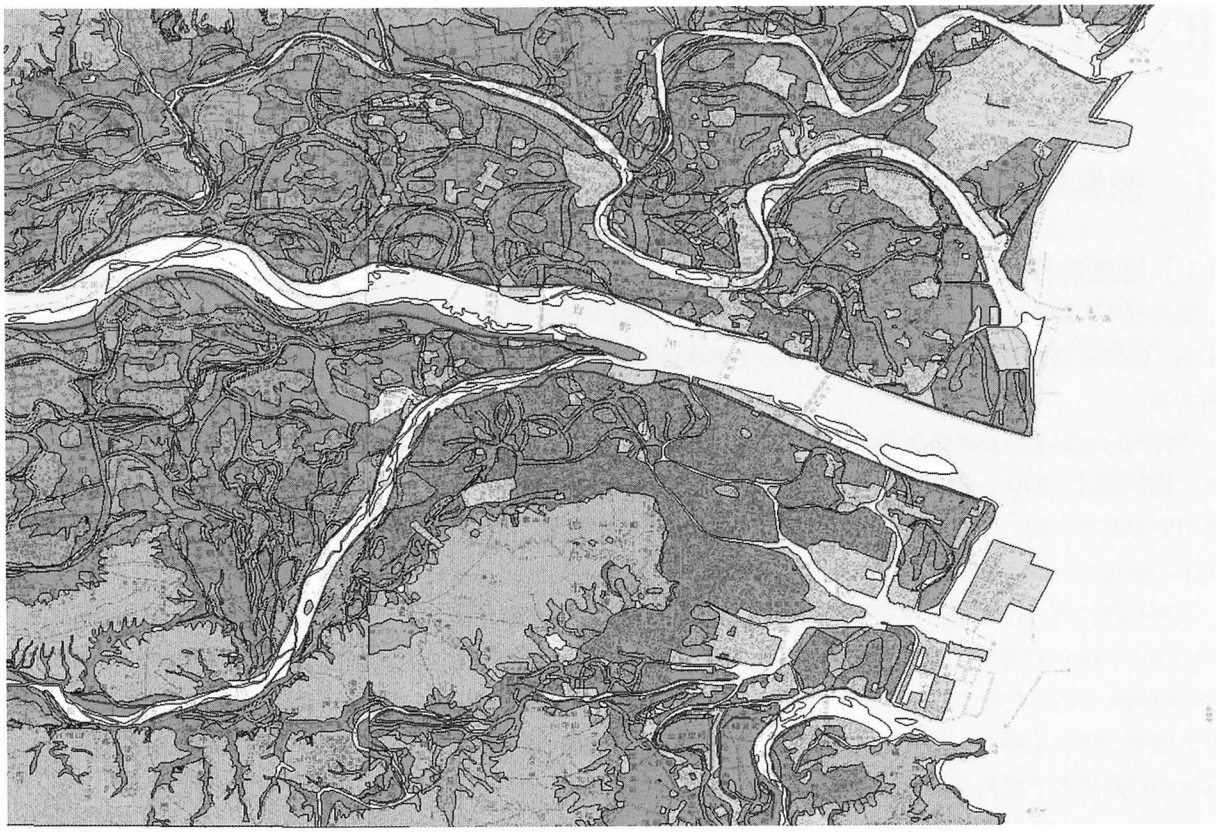
吉野川は水源を高知県瓶ケ森山南方に発し、四国山地から中央構造線に沿って東流し、紀伊水道に注いでおり、総延長は 194㎞、流域面積は 3,750 ｋ㎡に及ぶ。その吉野川下流域に楔形に細長く広がる沖積平野が徳島平野であり、河口付近は網目状に発達した三角州と自然堤防、海浜ラグーンからなる。徳島市は、この吉野川河口付近の右（南）岸に市街地を形成してきた。

吉野川河口部の汀線は、海面変動により歴史的に大きく変動してきた。ヴュルム氷河期最末期にあたる約 28,000 ～ 18,000 年前には、海面の高さは現在よりも 100m 前後低かったと想定され、当時の四国島は本州島と陸続きであったばかりでなく、日本列島自体が大陸と陸続きであったと考えられる。その後の温暖化により海面が次第に上昇し、縄文海進のピークにあたる約 6,000 年前には、吉野川河口部の汀線は現地標高５ｍ付近の内陸部まで進入していたと推定されている。

その後、弥生時代以降の寒冷化により、海面の低下と吉野川により運ばれる土砂の堆積によって、デルタが発達した。吉野川河口部には近世初頭までラグーン状の入り江がみられたが、以後の新田開発によって次第に



第３図　徳島城下町跡安宅２丁目地点位置図



第４図　徳島城下町跡安宅２丁目地点周辺地形帯

陸地化され、今日の徳島平野が形成された。

吉野川の流路は、元禄期以降における「新川掘抜」と称される旧河道を利用した直流化と、明治になってオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケらによる近代技術の導入によって、安定化する。吉野川中流から下流域にかけて、島・洲・須・須賀・塚などのつく地名が数多く残るが、こうした場所に旧来は集落が形成されてきた。これは自然堤防が発達隆起したもので、集落は自然堤防の形にそって東西方向のものが多い。

徳島は面積の約80％が山地であり、北から讃岐山脈、四国山地、海部山地等が東西方向に連なっている。吉野川北岸に沿って東西に延びる中央構造線により、北側の西南日本内帯と南側の西南日本外帯とに分けられる。北側（内帯）は中生代の和泉層群を主体とする讃岐山脈が、南側（外帯）は北から順に三波川変成帯、御荷鉾変成帯、古生代の砂岩泥岩互層の秩父帯、中生代から古第三紀にかけて堆積した砂岩泥岩互層の四万十帯が配列し、四国山地、海部山地を形成している。このうち、三波川帯は緑色片岩（慣用名「青石」）や黒色片岩等の結晶片岩で占められている。

本遺跡は、江戸時代には徳島城がおかれた城山の東側に位置する安宅地区にある。この地区は吉野川河口南岸のデルタのひとつに位置し、地質学上は北側及び東側を助任川、南側を新町川に囲まれた三角州状に立地する地域にあたる。徳島城下町は渭山（城山）を中心に、徳島（渭津）、出来島、福島、寺島、常三島、住吉島の各島や新町、富田、助任、前川、佐古の各地区とともに御山下と呼ばれ、さらに「物構」と呼ばれる徳島城の外郭を形成した。

調査区の現状は、宅地となっており、標高は0.8～1.2ｍ前後を測る。

（参考文献）

福井好行 1964「吉野川下流域に於ける流勢の変遷」『阿波の歴史地理　第一』

寺戸恒夫 1994「徳島県の地形」『阿波の絵図』徳島建設文化研究会

平井正午 1995「城下町起源の都市徳島」寺戸恒夫著『徳島の地理』徳島地理学会
古田　昇 1996「徳島県吉野・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程」『立命館地理学』８号

（２）歴史的環境

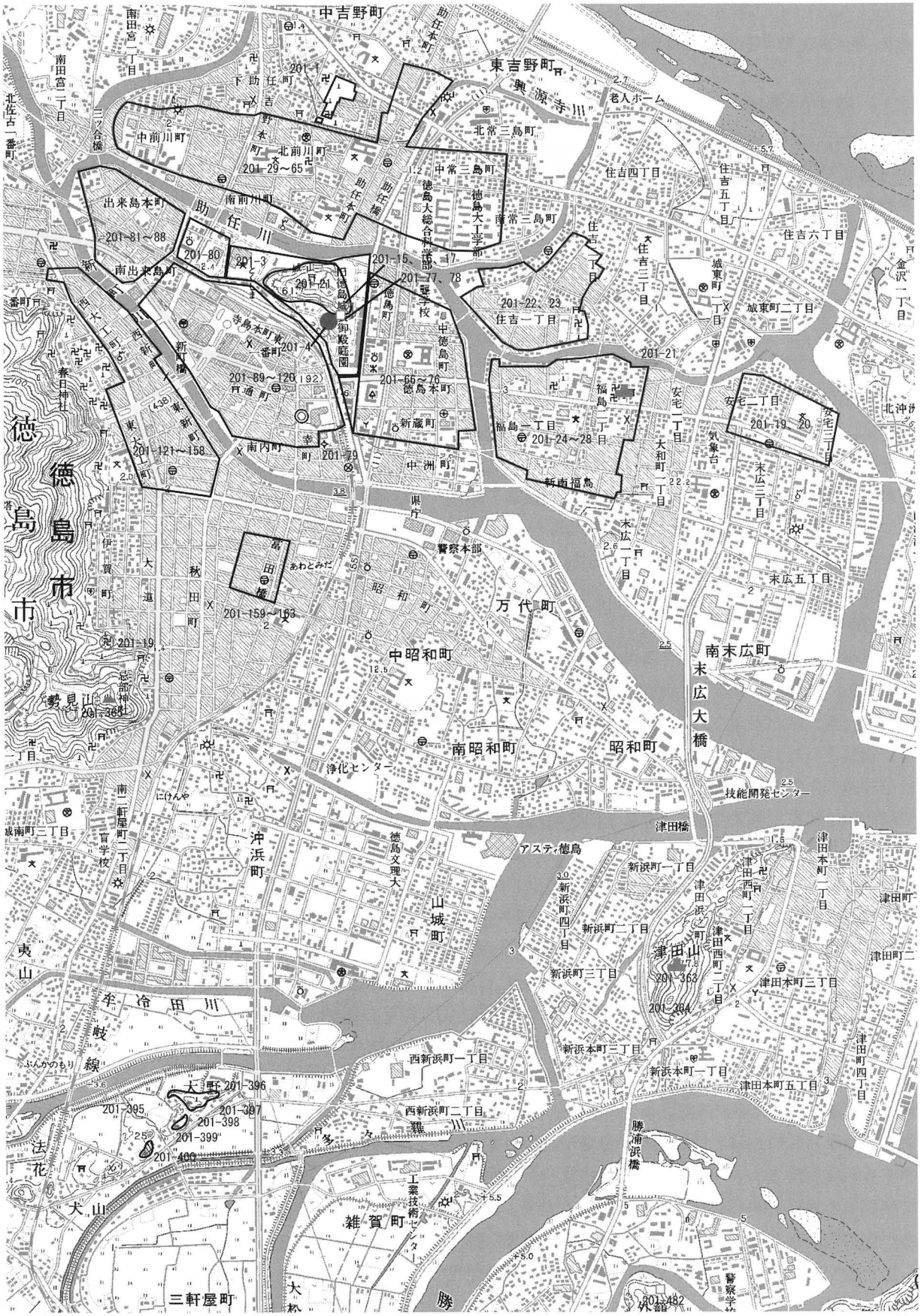
ここでは、本遺跡が所在する吉野川とその支流の鮎喰川、さらに剣山系の雲早山と高丸山を水源とし、徳島市南東部で紀伊水道に注ぐ勝浦川が形成する沖積平野と、その周辺部に立地する遺跡を取り上げ、歴史的環境を概観する。

縄文時代

縄文時代の遺跡として知られるものに、城山貝塚、三谷遺跡、庄遺跡、名東遺跡などがある。城山貝塚は、城ノ内の城山のふもとの洞窟や岩陰に残る貝塚であり、縄文時代後期の土器の他、３体の屈葬人骨も出土している (1)。また、眉山北麓の旧河道の後背湿地上にあたる佐古六番町の三谷遺跡からは、貝塚より出土した７体の犬の埋葬遺体が注目されるほか、晩期の突帯文土器が出土している。さらに北陸系の注口土器に類似する形態文様をもつ鉢や三叉文をもつ椀形土器、舟形土器など広範囲にわたる交流を示す遺物が出土している (2)。ほかに、鮎喰川右（東）岸の微高地に位置する庄遺跡（日赤血液センター地点）からは、晩期前半の貝殻条痕文をもつ探鉢が、同じく庄・蔵本遺跡（蔵本団地地点）の自然流路からは晩期の浅鉢や石鏃が (3)、鮎喰川右岸の名東遺跡（天理教会地点）からは晩期の浅鉢・深鉢、石器類がそれぞれ出土している (4)。一方、鮎喰川左（西）岸の矢野遺跡からは、縄文時代後期から晩期にかけての土器・石器が多量に出土している。ことに赤彩土器や土製仮面は祭祀の様相をうかがわせ、水銀朱の精製に使用された石杵・石臼の出土とともに注目される (5)。

弥生時代

弥生時代には鮎喰川が形成する沖積地、すなわち東は庄町から西は国府町にかけての広い範囲内で遺跡が確認される。右（東）岸の眉山北西麓に展開する蔵本遺跡・南蔵本遺跡・庄遺跡・南庄遺跡・鮎喰遺跡・名東遺跡、左（西）岸の観音寺遺跡・矢野遺跡・延命遺跡がそれである。庄遺跡群（蔵本遺跡、南蔵本遺跡、庄遺跡等で構成される）・南庄遺跡は眉山裾に展開した県内最大級の弥生時代の集落・生産遺跡であるが、地形的には小規模の自然波路が錯綜しており、微高地上を中心に大規模な集落が営まれた。まず、南蔵本遺跡や庄遺跡では前期に属する灌漑用水路と共に水田や畠及び苗代が確認されている (6)。前期の住居跡群は生産域の南側、眉山山裾の南庄遺跡において確認された。庄・蔵本遺跡（徳島大学医学部構内）からは、総数 20 基以上の土壙墓をはじめ箱式石棺・配石墓・甕棺墓が検出されている (7)。南庄遺跡では中期後半から後期前半にかけての竪穴住居跡群が検出されたほか、微高地縁辺部では環濠も確認されている (8)。遺物として注目されるものに、弥生時代後半の土器を含む流路内より出土した鉄剣がある。切先から茎までほぼ完全に遺存しており、長さ 28㎝を測る。同遺跡は、緑色岩や片岩を素材とした石斧の製作地として評価されている。庄遺跡群内で注目される遺物としては、朱塗りのミニチュア杵、平鍬、臼、梯子、椅子、人物像を刻んだ板状木製品などの祭祀具から農耕具にわたる木製品が出土している (9)。隣接する庄遺跡（兵営西内地区）からも長柄鋤・田舟などの木製品が出土している (10)。なお、同群内では後期に属する鍛冶遺構や鍛冶関連遺物が検出されており、鉄器製作が行われた事が確認されている。さらに後期後半から古墳時代初頭にかけては、遺跡の消長や鍛冶遺構の構造から矢野遺跡と鉄器製作の分業が行われていた可能性も指摘されている (11)。庄遺跡群の西方に展開する名東遺跡では中期前半の円形周溝墓や、中期後半に属する方形周溝墓群が確認されている (12)。さらに中期末の銅鐸埋納遺構も確認されている (13)。鮎喰川左（西）岸の矢野遺跡は、木製容器に埋納された銅鐸が集落内から出土したことで注目される大規模な弥生時代の集落遺跡である (14)。銅鐸のほか、朱の付着した土器や石杵、蛇紋岩製勾玉の工房や鍛冶遺構の発見でも重要である (15)。この庄遺跡や矢野遺跡が所在する鮎喰川沿岸は、多くの銅鐸が出土していることでも注目される。前述の矢野銅鐸や名東銅鐸の他、安部真銅鐸 (16) や源田銅鐸 (17) が知られる。なお、源田遺跡からは銅鐸とならんで銅剣も伴出している。



第５図　徳島城下町跡安宅２丁目地点周辺遺跡分布

201-19 徳島城下町跡　安宅 3 丁目地点
201-20 徳島城下町跡　安宅 2 丁目地点
201-21 福島城跡
201-22 徳島城下町跡　住吉 2 丁目地点
201-23 徳島城下町跡　住吉 1 丁目地点
201-24 徳島城下町跡　福島 1 丁目地点
201-25 徳島城下町跡　安宅 1 丁目地点
201-26 徳島城下町跡　福島 2 丁目地点
201-27 徳島城下町跡　新南福島 2 丁目地点
201-28 徳島城下町跡　新南福島 1 丁目地点
201-29 徳島城下町跡　北常三島町 3 丁目地点
201-30 徳島城下町跡　中常三島町 3 丁目地点
201-31 徳島城下町跡　南常三島町 3 丁目地点
201-32 徳島城下町跡　北常三島町 2 丁目地点
201-33 徳島城下町跡　中常三島町 2 丁目地点
201-34 徳島城下町跡　南常三島町 2 丁目地点
201-35 徳島城下町跡　北常三島町 1 丁目地点
201-36 徳島城下町跡　中常三島町 1 丁目地点
201-37 徳島城下町跡　南常三島町 1 丁目地点
201-38 徳島城下町跡　助任橋 3 丁目地点
201-39 徳島城下町跡　助任橋 2 丁目地点
201-40 徳島城下町跡　助任本町 5 丁目地点
201-41 徳島城下町跡　助任本町 4 丁目地点
201-42 徳島城下町跡　助任本町 3 丁目地点
201-43 徳島城下町跡　助任本町 2 丁目地点
201-44 徳島城下町跡　下助任町 1 丁目地点
201-45 徳島城下町跡　中前川町 1 丁目地点
201-46 徳島城下町跡　南前川町 1 丁目地点
201-47 徳島城下町跡　下助任町 2 丁目地点
201-48 徳島城下町跡　北前川町 1 丁目地点
201-49 徳島城下町跡　北前川町 2 丁目地点
201-50 徳島城下町跡　中前川町 2 丁目地点
201-51 徳島城下町跡　南前川町 2 丁目地点
201-52 徳島城下町跡　下助任町 3 丁目地点
201-53 徳島城下町跡　北前川町 3 丁目地点
201-54 徳島城下町跡　中前川町 3 丁目地点
201-55 徳島城下町跡　南前川町 3 丁目地点
201-56 徳島城下町跡　吉野本町 3 丁目地点
201-57 徳島城下町跡　吉野本町 2 丁目地点
201-58 徳島城下町跡　吉野本町 1 丁目地点
201-59 徳島城下町跡　下助任町 4 丁目地点
201-60 徳島城下町跡　北前川町 4 丁目地点
201-61 徳島城下町跡　中前川町 4 丁目地点
201-62 徳島城下町跡　南前川町 4 丁目地点
201-63 徳島城下町跡　下助任町 5 丁目地点
201-64 徳島城下町跡　北前川町 5 丁目地点
201-65 徳島城下町跡　中前川町 5 丁目地点
201-66 徳島城下町跡　中徳島町 2 丁目地点
201-67 徳島城下町跡　中徳島町 1 丁目地点
201-68 徳島城下町跡　徳島本町 3 丁目地点
201-69 徳島城下町跡　徳島本町 2 丁目地点
201-70 徳島城下町跡　新蔵町 3 丁目地点
201-71 徳島城下町跡　新蔵町 2 丁目地点
201-72 徳島城下町跡　新蔵町 1 丁目地点
201-73 徳島城下町跡　徳島町 3 丁目地点
201-74 徳島城下町跡　徳島町 2 丁目地点
201-75 徳島城下町跡　徳島本町 1 丁目地点
201-76 徳島城下町跡　徳島町 1 丁目地点
201-77 城山貝塚 4 号
201-78 城山貝塚 5 号
201-79 徳島城跡 徳島町城内地点
201-80 徳島城跡　西の丸御殿地点
201-81 徳島城下町跡　東出来島町地点
201-82 徳島城下町跡　北出来島町 1 丁目地点
201-83 徳島城下町跡　出来島本町 1 丁目地点
201-84 徳島城下町跡　南出来島町 1 丁目地点
201-85 徳島城下町跡　北出来島町 2 丁目地点
201-86 徳島城下町跡　出来島本町 2 丁目地点
201-87 徳島城下町跡　出来島本町 3 丁目地点
201-88 徳島城下町跡　南出来島町 2 丁目地点
201-89 徳島城跡　徳島町城内地点
201-90 徳島城下町跡　寺島本町東 1 丁目地点
201-91 徳島城下町跡　幸町 1 丁目地点
201-92 徳島城下町跡　幸町 2 丁目地点
201-93 徳島城下町跡　幸町 3 丁目地点
201-94 徳島城下町跡　一番町 1 丁目地点
201-95 徳島城下町跡　八百屋町 1 丁目地点
201-96 徳島城下町跡　通町 1 丁目地点
201-97 徳島城下町跡　中通町 1 丁目地点
201-98 徳島城下町跡　新内町 1 丁目地点
201-99 徳島城下町跡　南内町 1 丁目地点
201-100 徳島城下町跡　寺島本町東 2 丁目地点
201-101 徳島城下町跡　一番町 2 丁目地点
201-102 徳島城下町跡　八百屋町 2 丁目地点
201-103 徳島城下町跡　両国本町 1 丁目地点
201-104 徳島城下町跡　両国本町 2 丁目地点
201-105 徳島城下町跡　通町 2 丁目地点
201-106 徳島城下町跡　中通町 2 丁目地点
201-107 徳島城下町跡　新内町 2 丁目地点
201-108 徳島城下町跡　南内町 2 丁目地点
201-109 徳島城下町跡　寺島本町東 3 丁目地点
201-110 徳島城下町跡　一番町 3 丁目地点
201-111 徳島城下町跡　八百屋町 3 丁目地点
201-112 徳島城下町跡　通町 3 丁目地点
201-113 徳島城下町跡　中通町 3 丁目地点
201-114 徳島城下町跡　南内町 3 丁目地点
201-115 徳島城下町跡　寺島本町西 1 丁目地点
201-116 徳島城下町跡　元町 1 丁目地点
201-117 徳島城下町跡　元町 2 丁目地点
201-118 徳島城下町跡　藍場町 1 丁目地点
201-119 徳島城下町跡　藍場町 2 丁目地点
201-120 徳島城下町跡　寺島本町西 2 丁目地点
201-121 徳島城下町跡　東船場町 2 丁目地点
201-122 徳島城下町跡　東新町 2 丁目地点
201-123 徳島城下町跡　銀座地点
201-124 徳島城下町跡　両国橋地点
201-125 徳島城下町跡　富田町 1 丁目地点
201-126 徳島城下町跡　富田町 2 丁目地点
201-127 徳島城下町跡　紺屋町地点
201-128 徳島城下町跡　籠屋町 1 丁目地点
201-129 徳島城下町跡　南新町 2 丁目地点
201-130 徳島城下町跡　東大工町 2 丁目地点
201-131 徳島城下町跡　東山手町 2 丁目地点
201-132 徳島城下町跡　籠屋町 2 丁目地点
201-133 徳島城下町跡　東大工町 3 丁目地点
201-134 徳島城下町跡　東山手町 3 丁目地点
201-135 徳島城下町跡　西船場町 1 丁目地点
201-136 徳島城下町跡　西新町 1 丁目地点
201-137 徳島城下町跡　西大工町 1 丁目地点
201-138 徳島城下町跡　西山手町地点
201-139 徳島城下町跡　新町橋 1 丁目地点
201-140 徳島城下町跡　新町橋 2 丁目地点
201-141 徳島城下町跡　東船場町 1 丁目地点
201-142 徳島城下町跡　東新町 1 丁目地点
201-143 徳島城下町跡　南新町 1 丁目地点
201-144 徳島城下町跡　東大工町 1 丁目地点
201-145 徳島城下町跡　東山手町 1 丁目地点
201-146 徳島城下町跡　佐古一番町地点
201-147 徳島城下町跡　西船場町 5 丁目地点
201-148 徳島城下町跡　西新町 5 丁目地点
201-149 徳島城下町跡　西大工町 5 丁目地点
201-150 徳島城下町跡　西船場町 4 丁目地点
201-151 徳島城下町跡　西新町 4 丁目地点
201-152 徳島城下町跡　西大工町 4 丁目地点
201-153 徳島城下町跡　西船場町 3 丁目地点
201-154 徳島城下町跡　西新町 3 丁目地点
201-155 徳島城下町跡　西大工町 3 丁目地点
201-156 徳島城下町跡　西船場町 2 丁目地点
201-157 徳島城下町跡　西新町 2 丁目地点
201-158 徳島城下町跡　西大工町 2 丁目地点
201-159 徳島城下町跡　富田橋 1 丁目地点
201-160 徳島城下町跡　伊月町 1 丁目地点
201-161 徳島城下町跡　富田橋 2 丁目地点
201-162 徳島城下町跡　伊月町 2 丁目地点
201-163 徳島城下町跡　中央通 2 丁目地点
201-363 津田城跡
201-364 散布地
201-365 勢見山古墳
201-395 犬山古墳群
201-396 散布地
201-397 散布地
201-398 犬山天神山古墳
201-399 散布地
201-400 天神山古墳
201-482 外籠貝塚

古墳時代

古墳時代になると、眉山山麓や徳島市国府町から石井町に延びる気延山に古墳が数多く築かれる。眉山東南東部の尾根上には、前期後半に属する勢見山古墳が築造される (18)。吉野川河口域から南に延びる海上交通の要衝を見渡す位置に立地する古墳である。勢見山古墳の南西に位置する眉山南麓の八万町福万谷に面した尾根上には中期中葉に属する恵解山古墳群が築造される (19)。「阿波式石棺」と呼称される結晶片岩を用いた箱形石棺に矩形の竪穴式石室が伴う。後期後半には横穴式石室を埋葬主体部とする恵解山４～８号墳が築造される。眉山の園瀬川を挟んで対岸となる向寺山には、中期後半に属する向寺山古墳群が築造される (20)。周辺からは製塩土器や滑石製模造品・須恵器が出土しており祭祀遺構が存在した可能性も指摘されている。名東遺跡に隣接する眉山山塊の北西麓には、石蓋土壙墓を埋葬主体部に持つ節句山古墳群 (21) や、前期後半の積石墳丘の前方後円墳である八人塚古墳 (22) が築造される。この時期の集落が庄・蔵本遺跡（徳島大学蔵本キャンパス地点）で確認されている (23)。後期後半には県内最大級の巨石を用いた横穴式石室を埋葬主体部とする穴不動古墳が築造される (24)。

古代

律令制時代に推移すると、矢野遺跡の所在する現国府町域に国府が営まれる。政庁跡の確認は現段階では明確でないものの、徳島市教育委員会の数次にわたる調査によって、観音寺付近が有力となってきている (25)。さらに（財）徳島県埋蔵文化財センターが実施した観音寺遺跡、敷地遺跡では国衙に関連する遺構や遺物が確認されており、その実態が判明してきた。そのほか、この時期に該当する遺跡としては、延命遺跡 (26)、阿波国分寺跡 (27)・阿波国分尼寺跡 (28)・石井廃寺 (29)・高畑遺跡や、国分寺等に瓦を供給していたと考えられる内ノ御田瓦窯跡 (30) 等が周辺に分布する。『和名抄』に記載される名東郡の一郷には「賀茂」があり、庄・蔵本遺跡付近に名東郡衙が置かれた可能性がある。庄遺跡（徳島大学蔵本団地地点）からは名東郡衙に係わると考えられる大規模な掘立柱建物跡や墨書土器、斉串一刀形・鳥形・舟形などの木製祭祀具がにおいて検出されている (31)。また、庄遺跡（加茂名中学校体育館地点）においても奈良時代の赤色顔料塗彩土器が出土している (32)。なお、鮎喰川が眉山山塊西側を通り抜け、沖積平野に流れ出ようとする名東町３丁目の眉山西麓に位置する大浦遺跡から、平安時代末期の密教法具・僧具・梵音具・梵鐘等の仏具の土製鋳型や鞴羽□・坩堝などが出土している (33)。

文献史料からは、８世紀中頃には、造東大寺司の新島庄が名方郡内に成立している。東大寺に伝えられた絵図類を通してその所在地が検討されるとともに、吉野川河口付近での低湿地の開発のあり様をうかがわせる、総面積 80 余町の荘園である (34)。その後、平安時代後期には、安楽寿院（京都府伏見区）領名東庄が作られ、鮎喰川流域の耕地開発と鮎喰川を通じての名西郡山分（大粟山）との交易活動が展開する。

中世

中世になると、安楽寿院領名東荘・春日神社領富田荘・石清水八幡宮領萱島荘などの所領が文献史料より確髭できる (35)。遺構・遺物で注目されるのが、中島田町２丁目に所在する中島田遺跡の成果である。中島田遺跡は、旧河川の「中州」に立地した都市的様相をもった鎌倉時代後期の遺跡で、青磁・白磁や東播系須恵質土器・備前焼・吉備系土師資椀などの国内外からの搬入土器が多量に出土し、広範な海上交易を具体的に示している (36)。また、中島田遺跡の酉に位置する南島田遺跡では14～15世紀の遺構・遺物が発見されている (37)。しかしながら、中島田遺跡も中世後期にかけては存続せず、近世にかけては水田として土地利用された模様である。ほかに、名東遺跡（天神地区）でも中世段階の溝などが検出されている。近年の徳島市川内町大松遺跡の発掘調査では、15 世紀前半の方形区画屋敷地が確認された。この遺跡は、出土した土錘や大量に廃棄されたマシジミなどの二枚貝から、農業集落の性格だけではなく、これらを採取した海浜集落である性格を合わせもつ特徴を持つことも想定される。また、中徳島町２丁目旧徳島動物園跡の調査では、蜂須賀氏の城下町建設以前と想定できる大溝等の遺構が検出された。これまでの常三島、新蔵町１丁目、新蔵町３丁目、福島２丁目、

南前川１丁目、出来島本町１丁目地点等の徳島城下町跡の調査からは、近世以前の遺構面が確認されていなかった。このことから、中徳島町２丁目遺跡が城山東麓に位置し、吉野川支流の沖積低地に位置しながらも、局部的に安定した土砂の堆積が進行していた例外的な地域であったと考えられる。

近世

1585 年、豊臣秀吉は四国討伐に従い功績のあった蜂須賀氏に、阿波国 17 万５千石を与えた。父正勝に変わり蜂須賀家政が領有することになり、当初は長宗我部氏の旧城である一宮城を居城に掘えていたが、すぐに徳島城に移転した。徳島城は現在の城山付近に位置し、その前身である猪山城の起源及び蜂須賀氏入城の正確な時期は不明であるが、蜂須賀氏阿波入部の数年前には徳島城に移転していたと考えられる。

蜂須賀氏の徳島入部に伴い、城下町の建設も平行して進められた。城下町は吉野川分流の新町川、寺島川、助任川、福島川、沖州川等の網状河川を利用した「島普請」により建設され、これらの河川により形成された三角州上に、城郭の置かれた徳島をはじめ、出来島、寺島、福島、営三島、住吉島の６つの島と、それらの島を取り囲むように配置された新町地区、富田地区、佐古地区、前川・助任地区が建設された。中心部の徳島、寺島地区には上級藩士屋敷、城下の入口にあたる周辺の富田、佐古、助任地区には、町屋を並存した下級武士屋敷が配置されて、城下町の防御線とされた。その中で徳島に位置する新蔵町は、藩の新御蔵（米倉）があったので、御新蔵丁と呼ぱれた。1640 年代にはおおむね城下建設が完成し、急速に人口も増加した。急速な城下町建設を促進させた背景には、蜂須賀氏による大規模な土木建設資本注入のほかに、近世初頒の海退も多分に影響したものと考えられる。

徳島藩の水軍拠点は、藩政当初は常三島（徳島城下町跡常三島地点徳島大学工学部調査地点）に船置所「御船屋」が、水夫達の屋敷などは住吉島に設置された。しかし、城下町の拡大による屋敷地の不足や、助任川の土砂堆積及び川底上昇による大型船の出入りが困難になるなどの諸事情により、寛永 17 ～ 19（1640 ～ 1642）年頃に現在の安宅地区へ移設された。以後、同地区に安宅御船役所、鍛冶屋敷、御船頭や水夫の屋敷地、船大工の屋敷地が置かれ、徳島藩の水軍機能は集約された。「安宅御船蔵絵図」や『阿波蜂須賀藩之水軍』等によれば、いわゆる「安宅役所」は東西 228 間、西側辺南北 126 間、東側辺南北 150 間、面積は 31,460 坪を測る台形を呈する敷地を有し、周囲を土手で区画していた。内部には、御水夫方として御役所 14 棟、御門会所御番、御船屋 90 棟、御蔵 18 棟、御番所６箇所が、作事方として、御役所７棟、御門番、御番所１箇所、御蔵 23 棟、塗御蔵１棟が設けられた。さらに中央部には東西 220 間、南北 23 間の「大川」と呼称される堀と御船屋が並んでいたことが分かる。

その後、徳島藩は国替えもなく暮末まで蜂須賀氏 25 万石による支配が連綿と続いた。

（注）

(1) 鳥居龍蔵 1922「徳島城山の岩窟」『考古学雑誌』12 巻９号

1923「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育画報』16 巻５号

(2) 森　敬介 1926「徳島市水道三谷濾適地に於ける原始独木舟発見の顛末（上）」『歴史と地理』18 巻１号

1926「徳島市水道三谷濾適地に於ける原始独木舟発見の顛末（下）」『歴史と地理』18 巻５号

勝健康守 1994「徳島市三谷遺跡一徳島の縄文晩期突帯文土器の終焉」『文化財学論集』文化財学論集刊行会

1995「第 15 回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る」徳島市教育委員会

1977「三谷遺跡一徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査－」徳島市教育委員会

(3)（財）徳島県埋蔵文化財センター 1996『縄文の彩り』（財）徳島県埋蔵文化財センター

(4) 徳島市教育委員会 1988『第９回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』徳島市教育委員会

1990「名東遺跡発掘調査概要一名東町２丁目・天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査－」

(5) 前掲注 (3)

(6) 滝山雄一 1985「徳島県庄遺跡」「日本考古学年報 37（1984 年度版）』日本考古学協会

1986『第7回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』徳島市教育委員会

(7) 岡内三眞・河野雄次 1988「徳島県庄遺跡－徳島大学医学部同窓会館建設に伴う調査－」『日本考古学年報 39（1986 年度版）』日本考古学協会

(8) 菅原康夫 1988『日本の古代遺跡 37　徳島』保育社

(9) 徳島市教育委員会 1985『第6回埋蔵文化財資料展　庄遺跡の人々のくらしと文化』徳島市教育委員会

一山　典・滝山雄一 1985「徳島庄遺跡出土の弥生時代木製品」『考古学ジャーナル』252 号

滝山雄一 1986「徳島県庄遺跡」「日本考古学年報 37（1984 年度版）』日本考古学協会

(10) 北條芳隆 1998「吉野川下流域における初期潅漑施設と条里地割」『デルタにおける古代の開発に関する地図的情報の収集と解析　科研費報告書（代表丸山幸彦）』徳島大学

(11) 徳島市教育委員会 1985『庄・鮎喰遺跡－一般国道 192 号拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島市教育委員会

(12) 前掲注 (4)

徳島市教育委員会 1990『名東遺跡発掘調査概要』徳島市教育委員会

徳島県教育委員会 1990『名東遺跡（天神地区）一県営名東町団地建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県教育委員会

藤川智之・氏家敏之ほか 1996『名東遺跡』（財）徳島県埋蔵文化財センター

(13) 藤川智之ほか 1993「矢野遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』 4 号 1993

（財）徳島県埋蔵文化財センター 1993『矢野銅鐸』（財）徳島県埋蔵文化財センター

(14) 栗林誠治 1994「矢野遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』 5 号（財）徳島県埋蔵文化財センター

北條芳隆 1995「徳島県における弥生の朱」『考古学ジャーナル』394 号

(15) 前掲注 (4)

(16) 三木文雄 1965「阿波国阿都真出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』50 巻 4 号

魚島純一 1994「銅鐸の自然科学的調査－徳島市出土安都真銅鐸に見られる鋳掛けについて－」『文化財学論集』奈良大学文化財学論集刊行会

(17) 三木文雄 1950「阿波国源田出土の銅剣銅鐸とその遺蹟」『考古学雑誌』36 巻 2 号

(18) 徳島県教育委員会 1981『埋蔵文化財資料展　古墳時代の徳島市』徳島市教育委員会

(19) 徳島市教育委員会 1990『徳島市文化財だより』No.23・24 徳島市教育委員会

1991『第 12 回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』徳島市教育委員会

一山　典・三宅良明 1991「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報（1989 年度版）』日本考古学協会

1992「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報（1990 年度版）』日本考古学協会

(20) 石井町教育委員会 1969『清成・尼寺古墳発掘調査概報』石井町教育委員会

(21) 結城孝典 1986『ひびき岩 16 号墳発掘調査報告書』石井町教育委員会

(22) 天羽利夫 1968「石井町清成一号墳の調査」「徳島県博物館報」 8 号

前掲注 20）

(23) 天羽利夫ほか 1982「曽我氏神社古墳群発掘調査報告」『徳島県博物館紀要』13 集

岡山真知子 1983「曽我氏神社古墳群」『考古学ジャーナル』225 号

(24) 元興寺文化財研究所 1979『徳島市鶴島山古墳群の調査－発掘調査報告書』徳島市教育委員会

(25) 北條芳隆ほか 1998『庄・蔵本遺跡 1 －徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学

(26) 徳島市教育委員会 1983 ～ 1992『阿波国府跡第 1 次調査概報』～『阿波国府跡第 10 次調査概報』徳島市教育委員会

徳島市教育委員会 1996「第 16 回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る」徳島市教育委員会

(27) 徳島市教育委員会 1979 ～ 1981『阿波国分寺跡第 1 次調査概報』～『阿波国分寺跡第 3 次調査概報』徳島市教育委員会

(28) 徳島市教育委員会・石井町教育委員会 1971『阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報』徳島市教育委員会・石井町教育委員会

徳島市教育委員会・石井町教育委員会 1972『阿波国分尼寺跡第 2 次緊急発掘調査概報』」徳島県教育委員会・石井町教育委

員会

(29) 斎藤忠・三木文雄 1958『石井廃寺址第一次調査概報－徳島県文化財報告書二』徳島県

斎藤忠ほか 1959『石井廃寺址第二次調査概報－徳島県文化財報告書三』徳島県

(30) 島巡賢二ほか 1990『高畑遺跡一県立国府養護学校プール建設工事に伴う発掘調査概要報告書－』徳島県教育委員会

(31) 立花　博・天羽利夫 1970『徳島市入田町内ノ御田瓦窯跡調査概報・徳島県那賀郡古屋岩陰遺跡調査概報』徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会

徳島市教育委員会 1981『内ノ御田須恵窯跡発掘調査中間報告』徳島市教育委員会

(32) 福家清司 1984「庄遺跡出土の墨書土器銘『賀専当』について」『高校地歴』20 号徳島県高校地理学会

福家清司・久保脇美朗 1986「徳島県庄遺跡－徳島大学蔵本団地地区体育館地点の調査－」『日本考古学年報 36(1983 年度版)』日本考古学協会

なお、庄遺跡（兵営西内線地点）からも斉串・人形等の木製祭祀具が出土している。（前掲注 6）

(33) 勝浦康守 1996「庄遺跡（学校施設建設工事）」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 6』徳島市教育委員会

(34) 一山　典・竜山雄一 1987「徳島県大浦遺跡」『日本考古学年報 38（1985 年度版）』日本考古学協会

(35) 丸山幸彦 1989「古代の大河川下流域における開発と交易の進展－阿波国新島庄をめぐって－」『徳島大学総合科学部紀要』2 徳島大学

丸山幸彦 1992「瀬戸内型の庄園」『新版古代の日本 4　中国・四国』角川書店

丸山幸彦 1995「低湿地開発の進展と庄園返還運動－九世紀の阿波国新島庄－」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』2

丸山幸彦 1996「南海道交遊と庄園－新島庄勝浦他の位置づけをめぐって－」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』3

福家清司 1993「阿波国新島荘の所在地と条里の復原」『新版古代の日本 10　古代資料研究の方法』角川書店

福家清司 1996「阿波国名方郡新島荘図・大豆処図」金田章裕ほか編『日本古代荘園図』東京大学出版会

金田章裕 1995「阿波国東大寺領荘園図の成立とその機能」虎尾俊哉編『律令国家の地方支配』吉川弘文館

特に、丸山氏は東大寺による低湿地の開発には、摂津国（難波）で低湿地の開発に関わっていた日下部忌寸氏を中心に視点を据え、金田氏は絵図に描かれた堤が海水の進入による塩害を防ぐためのものであったと指摘されており、注目される。

(36) 福家清司 1990「阿波国中世所領研究ノート」『四国中世史研究』1 号

また、富田荘については、福家清司 1981「阿波国富田荘の成立と開発」『徳島地方史研究会創立 10 周年記念論集阿波・歴史と民衆』南海ブックス、福家清司 1990「阿波富田荘の成立と変遷」『史窓』21 号徳島地方史研究会、阿部猛 1994「悪党大江秦兼－阿波国富田荘史断片－」『日本社会史研究』35 号などがある。

萱島荘については、福家清司 1997「吉野川水運と荘園の成立」『学会誌　吉野川』創刊号がある。

(37) 福家清司ほか 1989『中島田遺跡・南島田遺跡－県道徳島鴨島線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県教育委員会

山下知之・小林一枝・石尾和仁 1996『中島田遺跡Ⅱ－都市計画道路常三島中島田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（財）徳島県埋蔵文化財センター

福家清司 1993「中世土器の流通をめぐって－徳島市中島田遺跡出土遺物を通して－」『中世土器の基礎研究』Ⅸ

福家清司 1989「阿波中世水運史小考」『三好昭一郎先生還暦記念論集　歴史と文化・阿波からの視点』同論集刊行会

福家清司 1993「遺跡が語る阿波中世の流通」『鳴門史学』7 集

福家清司 1999「徳島市中島田遺跡の歴史的位置－特に『名東庄倉本下市』との関係をめぐって－」『社会と信仰・阿波からの視点』三好昭一郎先生古希記念論集刊行会

(38) 前掲注 (37)「中島田遺跡・南島田遺跡」

(39) 前掲注 (11)

2　徳島城下町と調査区について

（1）城下町の建設と家臣団の屋敷地

天正13(1585)年豊臣秀吉により蜂須賀家政が阿波国17万国を与えられた。一旦、一宮城に入城するものの、同年、当時渭津と呼ぱれた地に徳島城の建設が着手される。同時に城下町建設を急いだ蜂須賀氏は町屋については、「御城下市中の町割りにつき屋敷望ものこれあれば申し出に任せ相応の地面を下さるべし」との御触書を出し、町人を優遇するとともに、蜂須賀氏の旧領であった尾張や龍野からも町人を誘致し町割りが進められる。

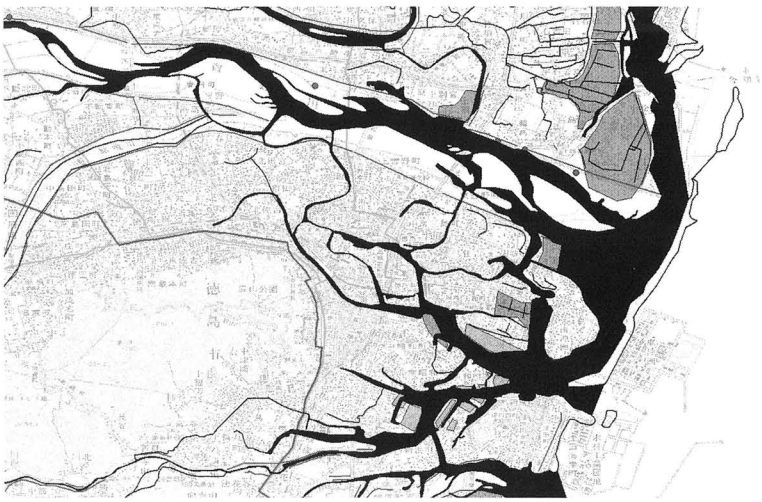
蜂須賀氏が徳島に居城を構えた理由として、次のことが挙げられる。弟一に、徳島は吉野川流域の「北方」と、勝浦、那賀、海部郡を中心とした「南方」の交会点にあたる交通の要衝であり、領国支配の中心として最適の地理的条件を備えていた。山地が多い阿波の中で、平地は吉野川下流域の徳島平野と、鳴門海峡から那賀川流域まで南北海岸線に沿って延びる地域に限られる。当然、陸上交通路もこれら平地部を中心として発達した。すなわち、吉野川両岸の県北部を東西方向に走る伊予街道、川北街道、海岸線に沿って県東部を南北方向に延びる土佐街道、淡路街道、讃岐街道の５街道であり、川北街道を除く４街道の起点が徳島で、その中でも徳島地区であった。

第二に、眉山から紀伊水道を見渡せる徳島は、海上防備に好都合でありただけでなく、島国阿波に不可欠な海上交通の便に恵まれた土地であった。徳島城下町に網目のように広がる吉野川の支流がそのまま紀伊水道に流れ込み、もちろん県西部にも吉野川を通じての水運が開けるわけである。

第三に、徳島は吉野川の分流に囲まれた要塞の地であった。しかし洪水のたぴに「河成地」となるような低湿地に城下町を建設できた理由のひとつとして、近世初頭の小氷期に海退現象により吉野川河口付近の三角州が発達したことも有力である。

徳島城築城（改築）と同時に城下町の建設も平行して始められた。蜂須賀家政は、旧領である播磨国龍野や尾張から豪商を誘致して城下町の建設を進めた。当初、太閤検地の実施の妨げとなった山間部の土豪勢力に対処するため、阿波国内の９ケ城に重臣と兵士300人を駐屯させた領国支配体制（阿波九城制）がとられていた。この支城駐屯制は土豪一揆への備えの他に、周辺地域の郡代的役割も担っていた。また、主要街道に位置した真言宗８ケ寺を駅路寺に指定し、旅行者用宿泊施設としての性格の他に、周辺農民に対する警備も義務付けた。

1615年の一国一城令により徳島城以外の所持は禁止され、1638年までの間に阿波九城制は順次廃棄され



第６図　近世期の街道及び旧地形

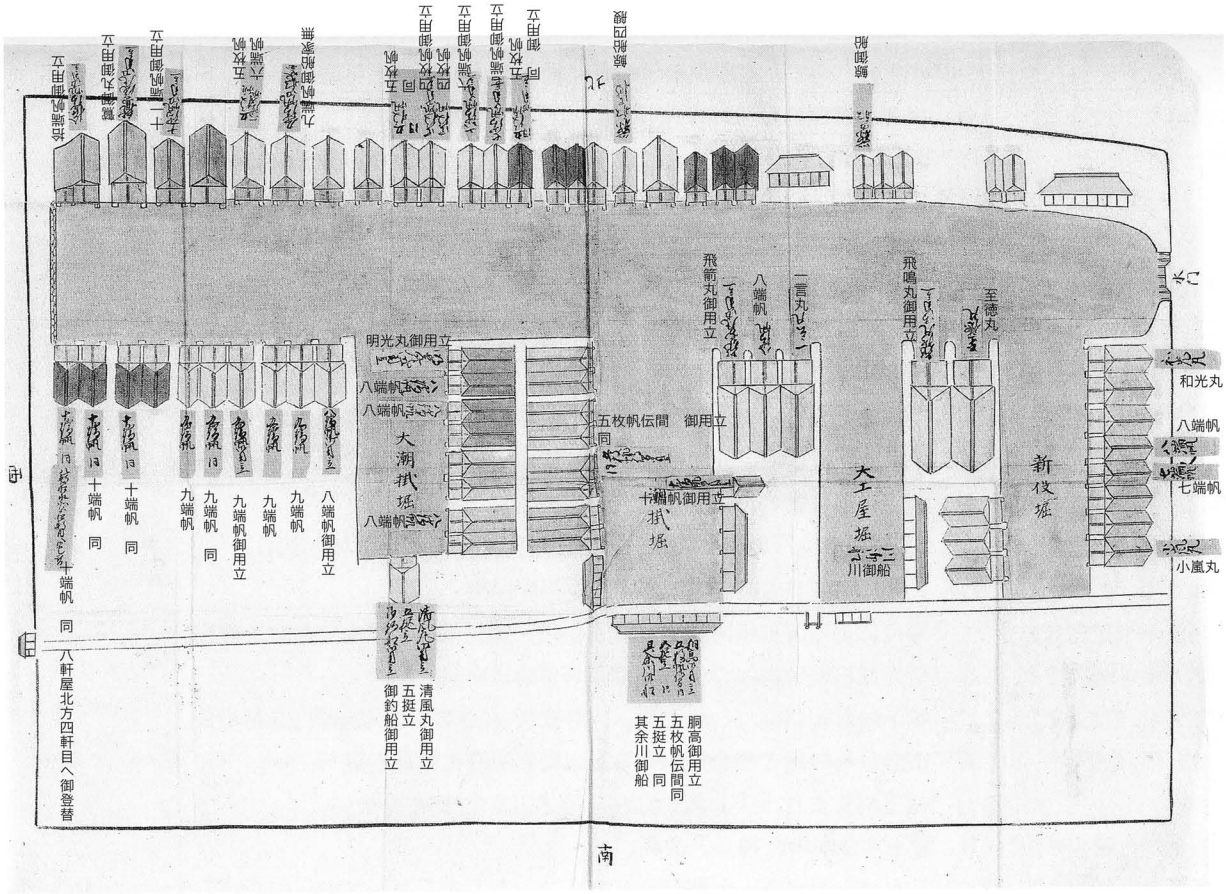
ていった。それにともない諸誠へ出向していた重臣・兵士が徳島城下町へ集中し、武士の城下集住が貫徹し侍屋敷の整備が進展する。

城下の建設は、吉野川下流域で吉野川の支流である新町川、勅任川、寺島川、福島川等の大小河川が形成するデルタ地帯である徳島、寺島、福島、住吉島、常三島、出来島の６島とその周囲に隣接する助任、大岡、富田、内町、新町、佐古の６地区を中心として行われた。天然の区画を利用した、いわゆる「島普請」である。町人・寺社・下級武士が比較的地盤面の高い隣接６地区を中心として住まわされたのに対し、中上級武家屋敷は天然の要塵ともいえる６島の中州低湿地、特に徳島・寺島地区に集中する軍事的配置をとった。

その中で徳島地区は城郭・御陵と西側に接する中心地区であることから、家老・中老邸宅の集中する最上級藩士地区である。中老と物頭が約半数を占め、それ以外も全て 200 石以上である。また周囲を石垣で囲まれたことは、他の島が土塁であるのとは異なり、城郭の三の丸としての機能も果たしている。徳島地区に架かる橋は徳島橋、福島橋、助任橋の３橋のみであり、その内側には番所（門台）が置かれ厳重に警備されるとともに、前後には重臣の屋敷が配置された。

寛永年間（1624 ～ 1644）後半には、船頭と水主・船大工等の屋敷は水軍の船置所のある安宅福島の臨海地区に集められ、また佐古には町屋が建設された。

正保３年（1646）に幕府に提出するためにつくられた「阿波国徳島誠之図」によれば、徳島城を中心として侍屋敷・足軽町・町屋・寺町が揃い、整然とした町割が確認できる。寛永期に大規模な城下町建設が進められたが、ここに町割の完成をみたものであり、徳島地区を中心に福島・住吉島・常三島・助任・出来島・寺島・新町・富田に武家屋敷を、佐古・富田・助任に足軽屋敷を配置し、町屋は寺島内部に形成された内町と新町・福島・助任・佐古に置かれた。また、以前は寺島にあった寺院を眉山山麓に移転集中させ、寺町を編成した。



第７図　安宅御船蔵絵図

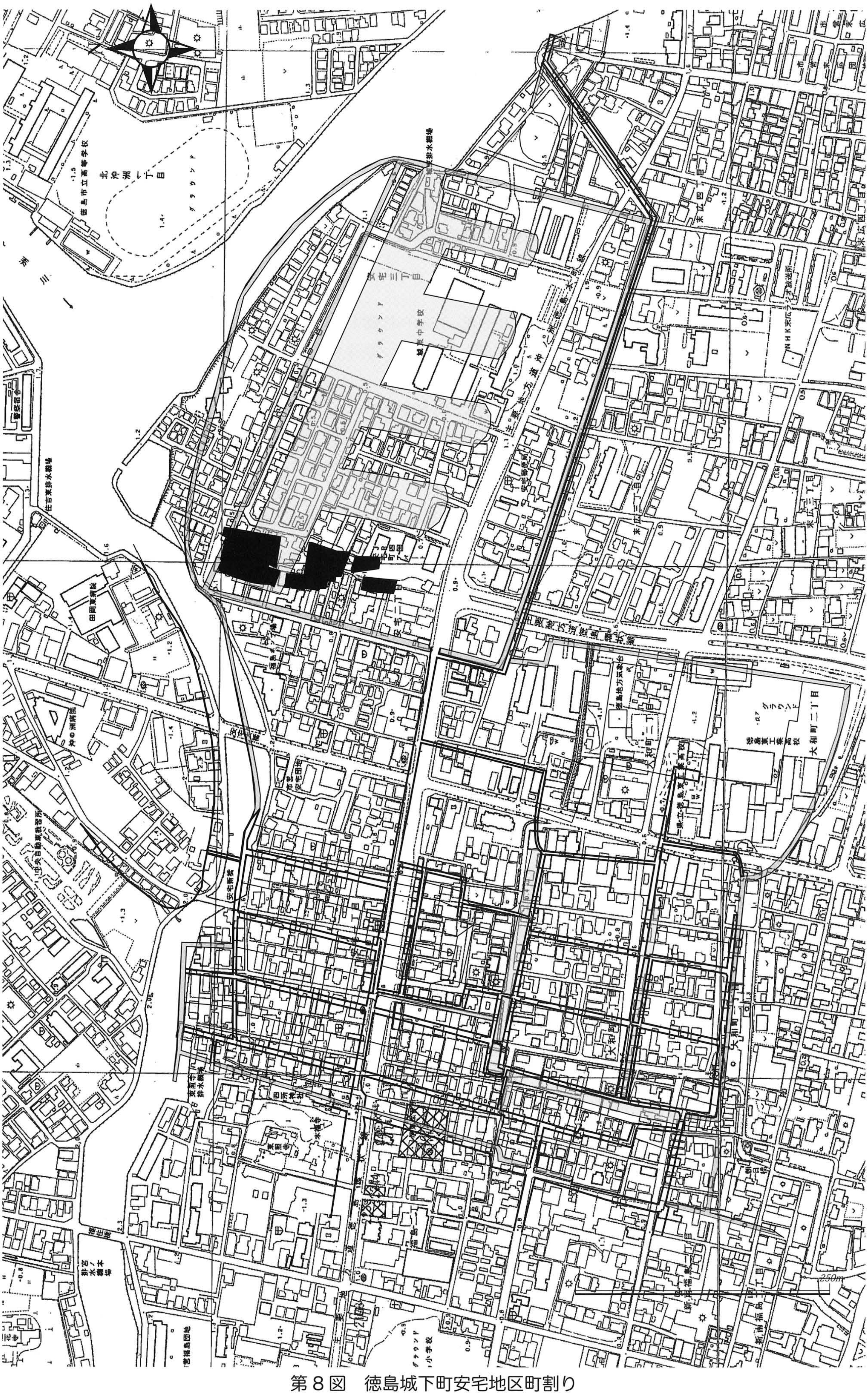
城下町の四至（範囲）は東が福島安宅、西が佐古五丁目二本松、南が富田金毘羅大岩鼻、北が助任万福寺であり、この範囲が「御山下」と呼称された。

（2）調査対象地の変遷

調査対象地を、絵地図において確認する。調査対象地は、徳島藩水軍の拠点である安宅役所の北西隅に位置する。安宅役所は、寛永18，19年頃に常三島南東部の安宅島より助任川の河床上昇等の理由により、福島東部に移転した。安宅役所の規模は東西230間、南北150間を測り、沖州川より安宅役所内への進入路は、敷地北東側に設けられている。入口には潮の流れを調節する捨て石が施されていた。東西方向の船の進入路は、船入堀川もしくは大川と呼称され、敷地内のやや北側に位置する。船入堀川より南側へ直交する状態で4条の堀が設けられている。東側より「新役堀」、「大工屋堀」、「小潮掛堀」、「大潮掛堀」と記載されている。御船屋は、船入堀川の北側に26棟、新役堀の東側に8棟、同堀西側に2棟、新役堀と大工屋堀の間で船入堀川に面して2棟、大工屋堀と小潮掛堀の間で船入堀川に面して3棟、小潮掛堀東側に1棟、同堀西側に8棟、大潮掛堀東側に8棟、船入堀川南側に10棟描かれている。調査地点は、船入堀川の最深部（西側奥）附近に位置し、西側から2棟分の御船屋に該当する。

（3）徳島城関係略年表

1585年（天正13）6月　蜂須賀家政、阿波国を拝領し一宮城に入城。すぐに猪山に城地を定めて、渭津を徳島と改める。
12月　名東郡矢野村百姓中に「検地条々」を出し検地に着手。領内枢要の九城に重臣層を配置し、支城駐屯制による領国経営を開始。
1586年（天正14）12月　呉服又五郎に紺屋司を任じ、紺屋役銭の徴収を命じる。またこの年、城下市中の町割を定めて、町屋敷を望む者に地面を下付する旨を通達。
1600年（慶長5）　7月　家政、豊臣方からの参戦要請を拒否し、大坂方との「手切れ」を決意。
8月　家政、阿波国を豊臣秀頼に返上。剃髪して蓬庵と号し高野山に隠居。至鎮は徳川方に参戦。
9月　至鎮、徳川家康から阿波国を拝領。
1603年（慶長8）8月　至鎮、板野郡内の赤松則房の旧領・置塩領（1万石）及び毛利兵橘の旧領・兵橘領（1万石）を夫人化粧領として拝領。ここに阿波国一円支配がなる。
1614年（慶長19）11月　至鎮、大坂冬の陣に参戦。
1615年（元和1）　5月　至鎮、大坂夏の陣に参戦。戦功により淡路国を加増される。
1616年（元和2）11月　徳島城下紙屋町以外での紙商売の禁止。
1625年（寛永2）　7月　城下寺島に藍方役所を置く。
1638年（寛永15）　幕府の一国一城令により、領内には徳島・洲本の2城となる。
1641年（寛永18）7月　公儀御用につき国絵図・御山下絵図を提出。
1646年（正保3）　幕命により阿波両国絵図・城下絵図・郷村絵図・家中分限帳を提出。
1657年（明暦3）　5月　徳島城石垣破損につき修復普請を幕府に申請。
1667年（寛文7）　7月　城下内町紀伊国町から出火、内町家数420軒・武家屋敷25軒焼失。
1675年（延宝3）　1月　市中在々の担ぎ商を規制するために担ぎ商に鑑札を発行。
3月　城下内町より出火。新シ町から魚ノ店まで154軒焼失。
1678年（延宝6）10月　城下渭津を再び徳島と改称。
1680年（延宝8）　徳島城下の豪商・魚屋（ととや）と寺沢を座元として銀札を発行。
1685年（貞享2）　1月　城下・在々において飼犬を禁止。



第８図　徳島城下町安宅地区町割り

3月　城下新町免許町から出火、家数467軒焼失。
1686年（貞享3）　11月　城下商人保護のため佐古・富田・助任口など郷分での商売禁止。
1688年（元禄1）　1月　城下大工町から出火、西船場全焼。家数216軒焼失。
1690年（元禄3）　4月　幕府、徳島城石垣修復普請を許可。
1700年（元禄13）2月　幕府、徳島城外曲輪その他の石垣修復工事を許可。
1721年（享保6）　7月　城下瓢箪島より出火、御花畑御殿・長屋など焼失。
1722年（享保7）　3月　富田御屋敷焼失。
12月　城下徳島会所より出火。
1724年（享保9）　4月　城下内町3丁目より出火、左右へ片側1丁焼失。
1727年（享保12）10月　城下内町より出火、新シ町から魚ノ店まで焼失。
12月　城下福島会所焼失。
1767年（明和4）　2月　城下藍場町において藍大市が始まる。
1782年（天明2）　1月　徳島城下紙屋町から出火、内町地区も類焼。
1785年（天明5）　2月　徳島城下新町横筋から出火、籠屋町まで類焼。
1811年（文化8）　「阿波名所図絵」刊行される。
1824年（文政7）　12月　城下東新町より出火、富田町・新魚町・桶屋町・籠屋町・古物町・大工町二丁目・西大工町・西新町一丁目・南大工町まで類焼。家数932軒焼失。
1835年（天保6）　5月　徳島城下富田浦に社蔵が設置される。
1869年（明治2）　6月　版籍奉還。蜂須賀茂詔、知藩事に任命。
1871年（明治4）　7月　徳島藩を廃し、徳島県設置。
11月　徳島県を名東県と改称。
1876年（明治9）　8月　名東県が廃止され、阿波は高知県に、淡路は兵庫県に合併。
1880年（明治13）3月　徳島県再設置。
1945年（昭和20）　7月　空襲により徳島城跡公園内の建物焼失。

（参考文献）

石尾和仁 1999「徳島城下町の考古学的研究」「史窓」29号　徳島地方史研究会
根津寿夫 1994「城下町億島の再編について－下屋敷を中心に－」『史窓』24号　徳島地方史研究会
服部昌之 1975「城下町徳島における都市構造の変容過程」三好昭一郎編『徳島藩の史的構造』名著出版
平井松午 1995「城下町起源の都市徳島」寺戸恒夫編著『徳島の地理』徳島地理学会
三好昭一郎 1970「徳島城下町の成立について」『総合学術調査報告　徳島』阿波学会・徳島県立図書館
三好昭一郎・高橋　啓監修 1994『図説　徳島県の歴史』
『徳島城』編集委員会編 1994『徳島城』徳島市立図書館 1994

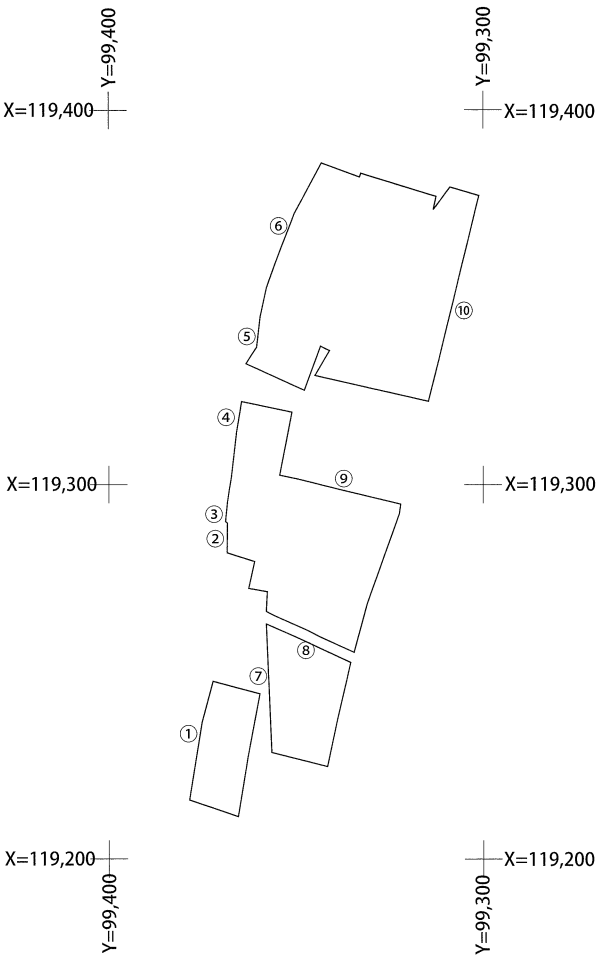
Ⅲ　調査成果

1　基本層序

（1）基本層序

調査区全体の土層は、総じて近現代の撹乱層や客土層が表土下約１m前後まで堆積し、洪水砂（海砂？）の互層堆積がその下に層序をなす。また、平成 18，19 年度の調査では、先行して行われた道路建設のための土壌改良により、連続する調査区においても土層に大きな差異や遺構面の削平などが確認された。調査対象遺構面は、互層堆積砂層の内、最下層に堆積するオリーブ黒色砂層や黒色シルト質土層の直下に確認することが出来た。

調査対象地北側に位置する１区の遺構確認面は、灰オリーブ色砂質土層である。２区西側や４区の遺構確認面は、黄褐色砂質土層である。３区の遺構確認面は灰オリーブ色砂質土層である。1，２区における遺構確認面は堀に向かって北から南に向かって緩やかに傾斜しており、北側は標高約 0.05 m付近、南側は標高約－ 0.1 m付近で検出・調査した。06 －２区の遺構確認面は、灰オリーブ色砂質土層である。遺構確認面は標高約－ 0.25 ～－ 0.3 mである。06 －３区の遺構確認面は、灰オリーブ色砂質土層である。遺構確認面は堀に向かって北から南に向かって傾斜しており、北側は標高約－ 0.3 m付近、中央部は標高約－ 0.35 m付近、南側は標高約－ 0.4 m付近で検出・調査した。07 －１区の遺構確認面は灰オリーブ色砂質土層である。遺構確認面は堀に向かって北から南に向かって傾斜しており、北側は標高約－ 0.45 ～ 0.5 m付近、中央部は標高約－ 0.6 m付近、南側は標高約－ 1.0 m付近で検出・調査した。なお、調査対象地最南端に位置する 00 －３区は、近現代構造物の土台であるコンクリート塊や柱による撹乱のため土層を確認することが出来なかった。

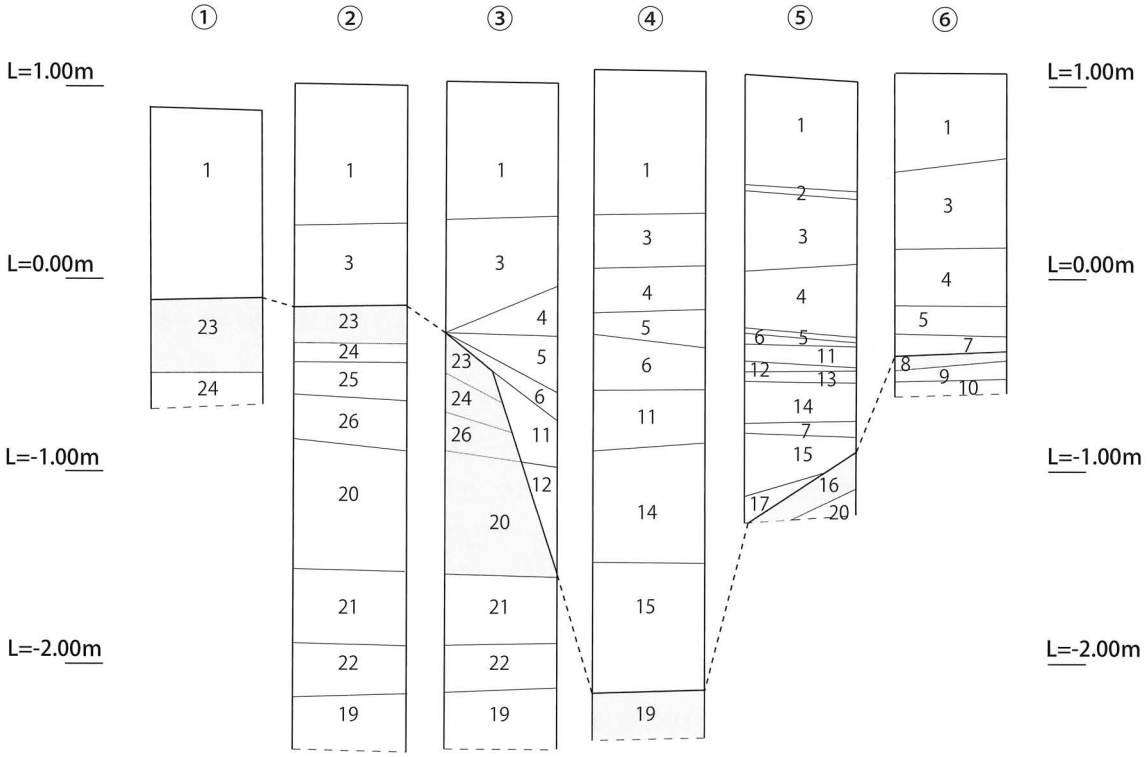


第９図　調査区土層図地点図

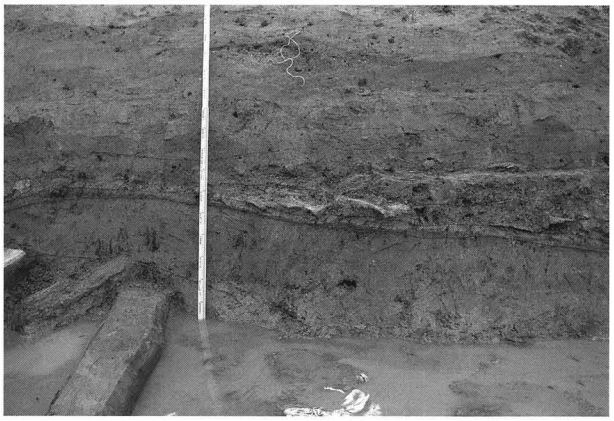
２遺構・遺物

（1）遺構配置

１区は調査対象地の北側に位置し、２条の板敷遺構と５基の石積基礎遺構が確認された。石積基礎遺構と板敷遺構は連動するものであり、２条の並行する石積基礎遺構とそれに挟まれる１条の板敷遺構で１つの単位が構成されている。SG1001，1002，1005 と SJ1001 が１単位となり、SG1003，1004 と SJ1002 が１単位となり、いわゆる「御船屋」を構成している。「御船屋」は、船を繋留・揚陸・格納する場と覆い屋から構成されている。石積基礎遺構の南側は遺構は検

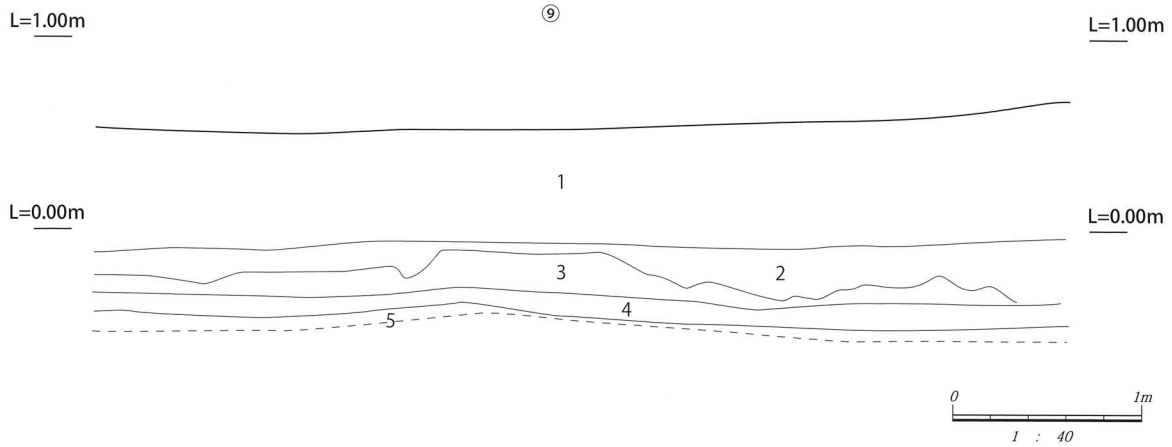


1：暗オリーブ褐色砂質土層（客土層）
2：黒褐色砂質土層（徳島空襲時の焼土層？）
3：オリーブ黒色砂層
4：灰色砂層
5：オリーブ黒色砂層
6：灰色砂性シルト質土層
7：オリーブ黒色砂層
8：灰オリーブ色砂質土層
9：灰色砂層
10：灰オリーブ色砂性シルト質土層
11：オリーブ灰色砂性シルト質土層
12：暗オリーブ色砂性シルト質土層
13：灰オリーブ砂質土層
14：暗オリーブ灰色砂質土層
15：暗オリーブ灰砂性シルト質土層
16：オリーブ黒細砂層
17：黒色シルト質土層
18：灰色細砂層
19：オリーブ黒色細砂層
20：オリーブ黒色細砂層
21：暗オリーブ灰(2.5GY3/1)色砂層、灰色砂層が混入し、炭化物や木片を若干含む
22：灰(7.5Y4/1)色細砂層、炭化物や木片を若干含む
23：黄褐(2.5Y5/4)色砂質土層、オリーブ色砂質土層が混入
24：灰オリーブ(7.5Y4/2)色細砂層
25：暗灰黄(2.5Y4/2)色細砂層、植物遺存体や炭化物を含む
26：暗オリーブ灰(5GY4/1)色細砂層、砂性シルト質土層を含む

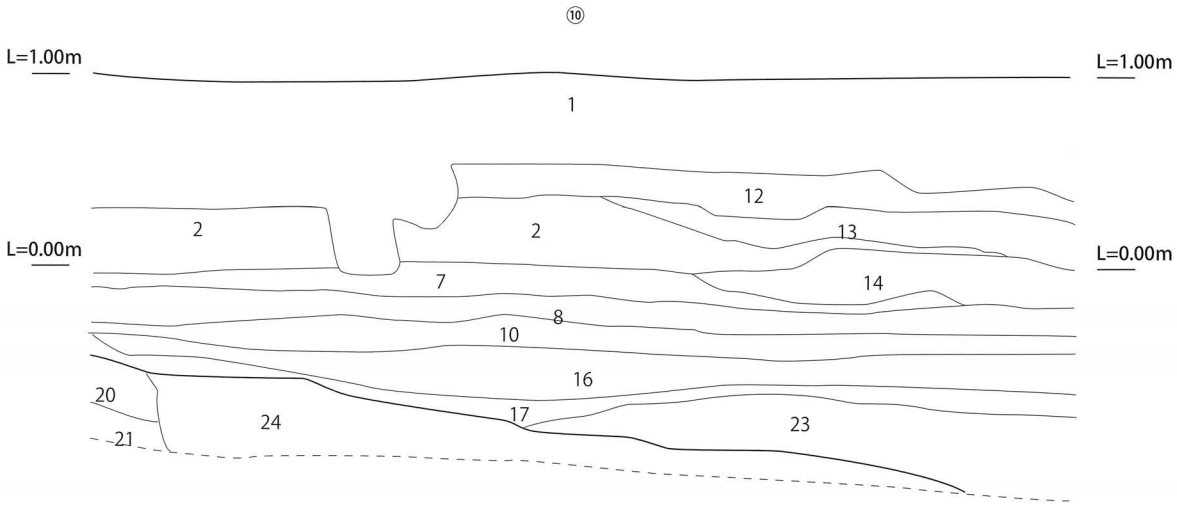


ＰＬ．１　１区調査区土層堆積状況

第 10 図　調査区土層図 1



1：灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 砂質土層　攪乱
2：オリーブ灰色 (10Y5/2) 砂質土層
3：黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土層
4：灰色 (7.5Y5/1) 砂質土層
5：灰色 (10Y5/1) 砂質土層

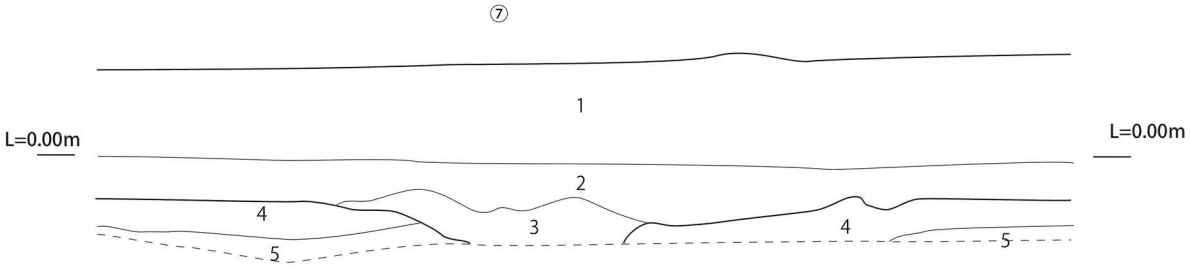


第 11 図　調査区土層図 2

0　1m
1 : 40

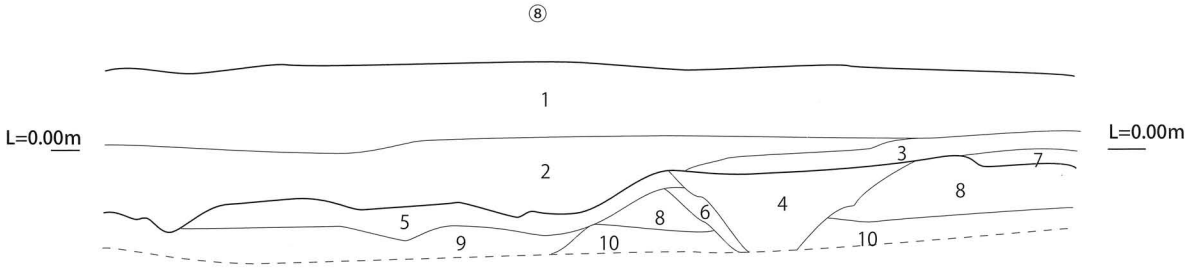
1：盛り土
2：黄灰色 (2.5Y6/1) 粗砂層
7：灰色 (10Y5/1) 細砂層
8：オリーブ灰色 (10Y5/2) 細砂層
10：灰色 (7.5Y4/1) 砂質土層
12：灰色 (7.5Y4/1) 砂質土層
13：オリーブ灰色 (5GY5/1) 砂質土層
14：オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 砂質土層
16：オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト質土層
17：灰色 (10Y4/1) シルト質土層
20：灰色 (10Y5/1) 細砂層
21：灰色 (10Y5/1) 細砂層
23：オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 砂質土層
24：灰色 (7.5Y5/1) 砂質土層

ＰＬ．２　２区調査区土層堆積状況



1：攪乱
2：オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂質土層　攪乱
3：オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土層
4：オリーブ灰色 (5GY5/1) 砂質土層
5：灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 砂質土層

0　1m
1 : 40



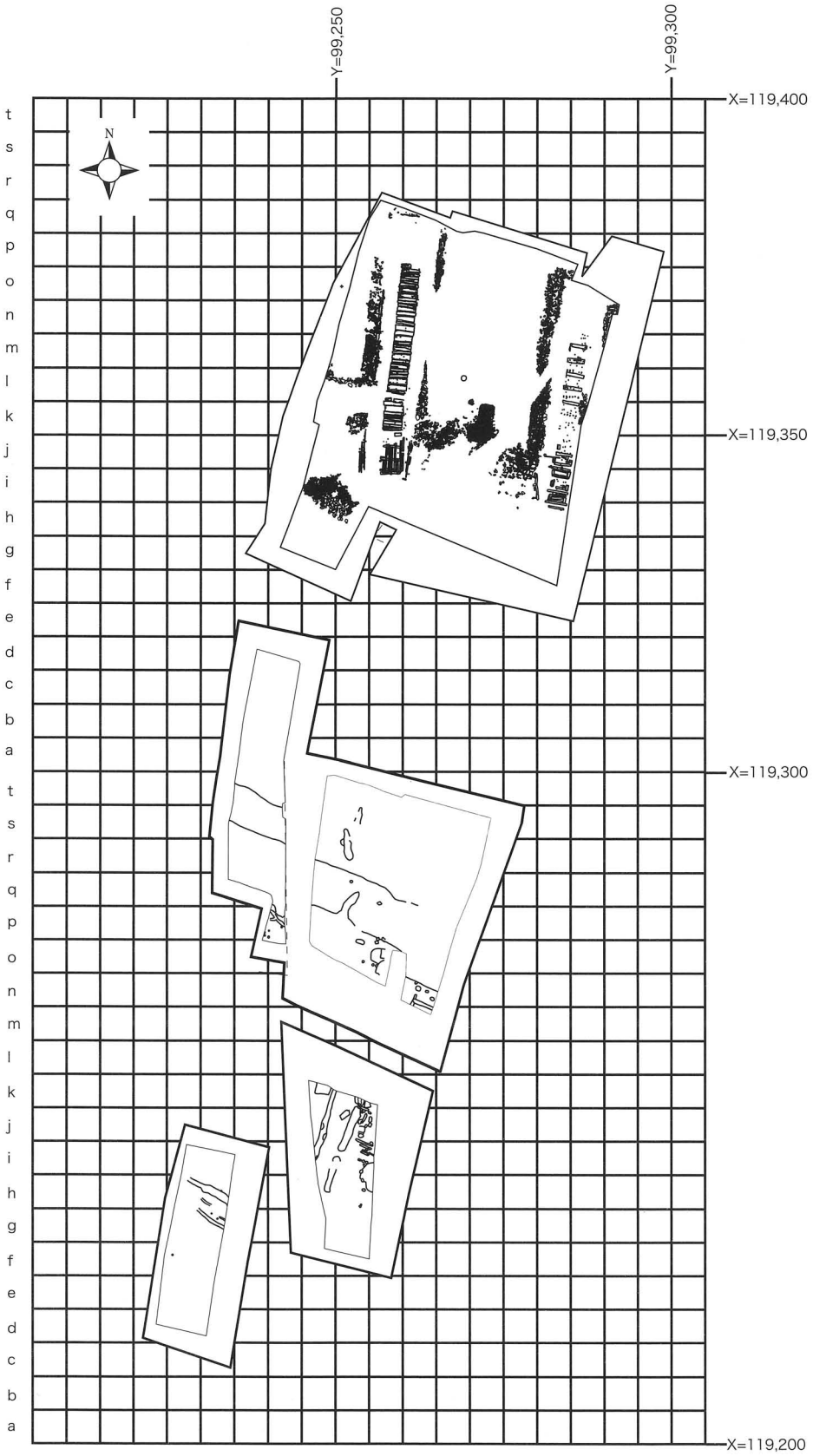
第12図　調査区土層図3

0　1m
1 : 40

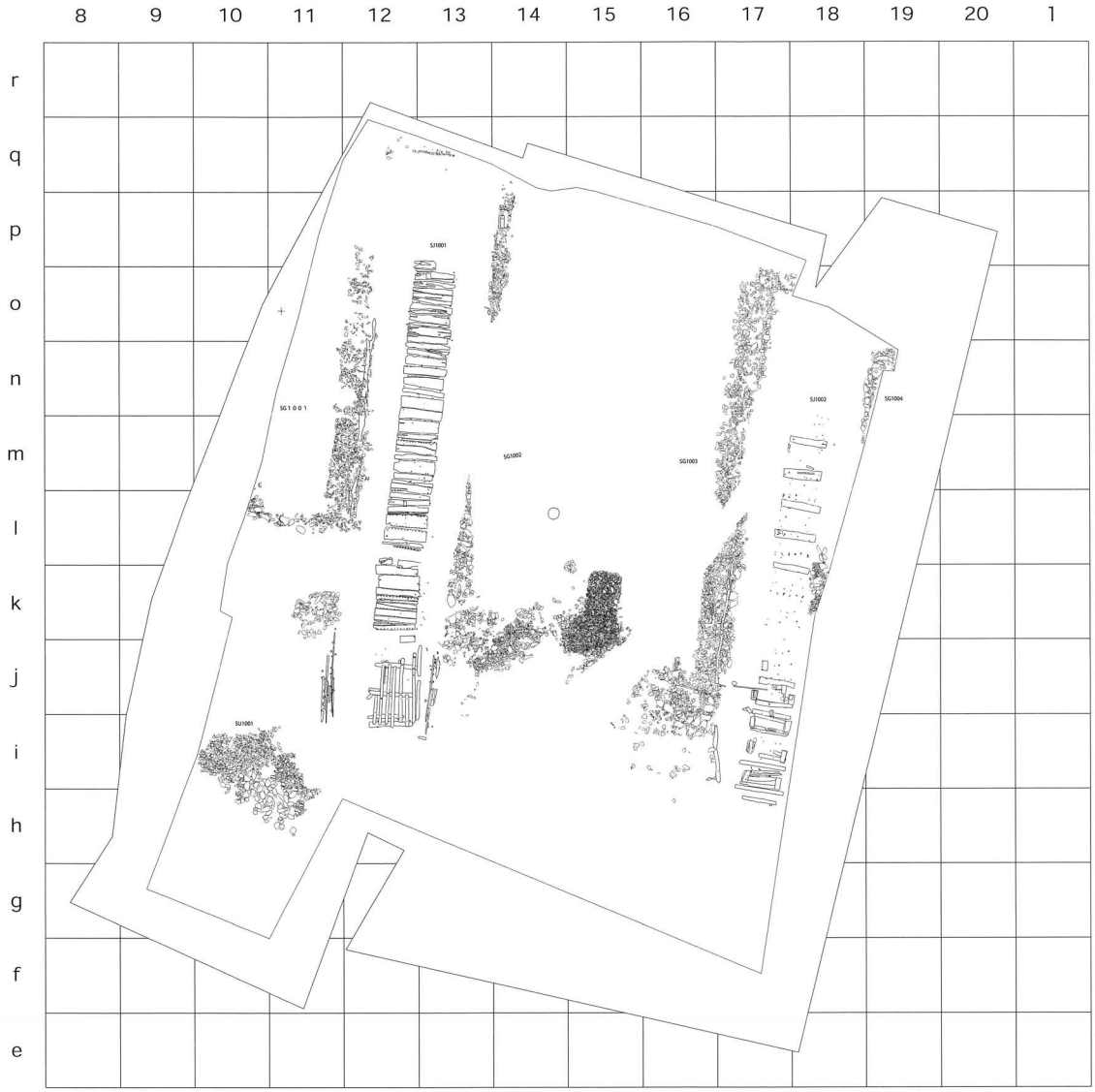
1：攪乱
2：オリーブ黄色 (5Y6/3) 砂質土層　攪乱
3：灰色 (7.5Y4/1) シルト質土層
4：オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト質土層
5：オリーブ灰色 (5GY5/1) 砂質土層
6：灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土層
7：灰色 (7.5Y4/1) シルト質土層
8：灰オリーブ色 (5Y5/3) 砂質土層
9：オリーブ灰色 (5GY5/1) 細砂層
10：灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質土層
11：灰オリーブ色 (5Y5/3) 砂質土層

ＰＬ．３　３区調査区土層堆積状況

ＰＬ．４　４区調査区土層堆積状況



第 13 図　遺構配置図（S=1/1,000）



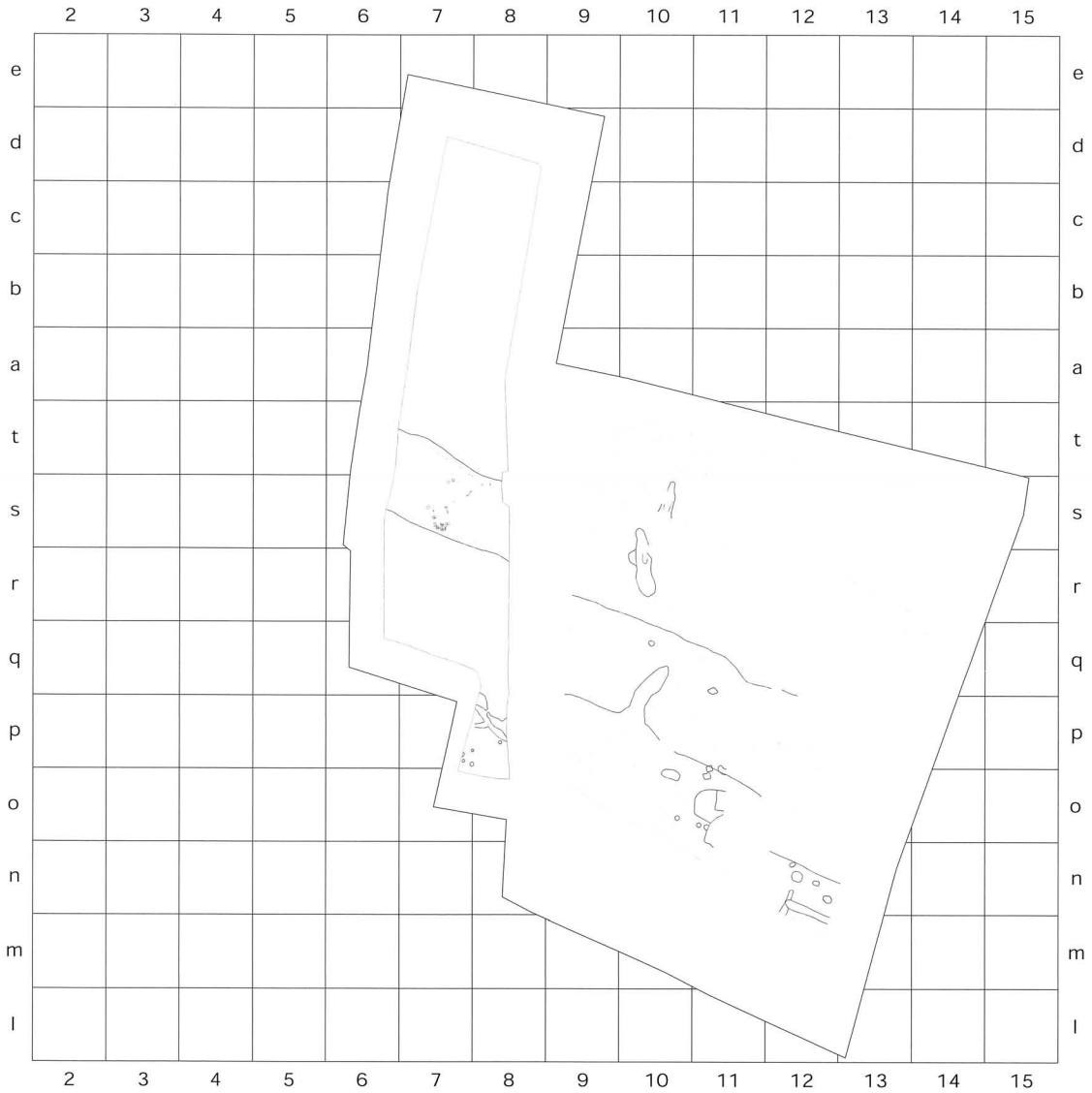
第 14 図　1 区遺構配置図（S=1/500）

出されていない。石積基礎遺構南側ラインが 2 区で検出された SD1002 の北側立ち上がりに該当する。

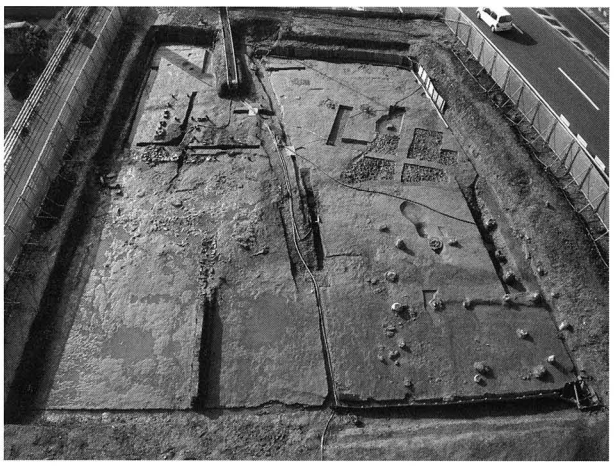
2 区は調査対象地の中央に位置し、2 条の大型溝状遺構と数条の小型溝状遺構、土坑、小穴が検出された。調査区のほとんどは、SD1002 が占めるが、中央部は埋没完了が近代と推定され、現代の撹乱が多い。調査区南側にのみ遺構構築面が展開する。

3 区は調査対象地の南東側に位置し、溝状遺構や土坑、柱穴が構築されている。南北方向に掘削されて 2 条の溝が検出されている。ただし、撹乱により遺構の残存状況は良好とは言い難い。また、調査区東側において土坑や柱穴が集中して検出された。

4 区は調査対象地の南西側に位置する。調査対象地内では最高所に該当し、安定した遺構構築面が確認されたが、構築された遺構数は少なく、東西方向の溝状遺構が 4 条と柱穴が数基検出されたのみである。

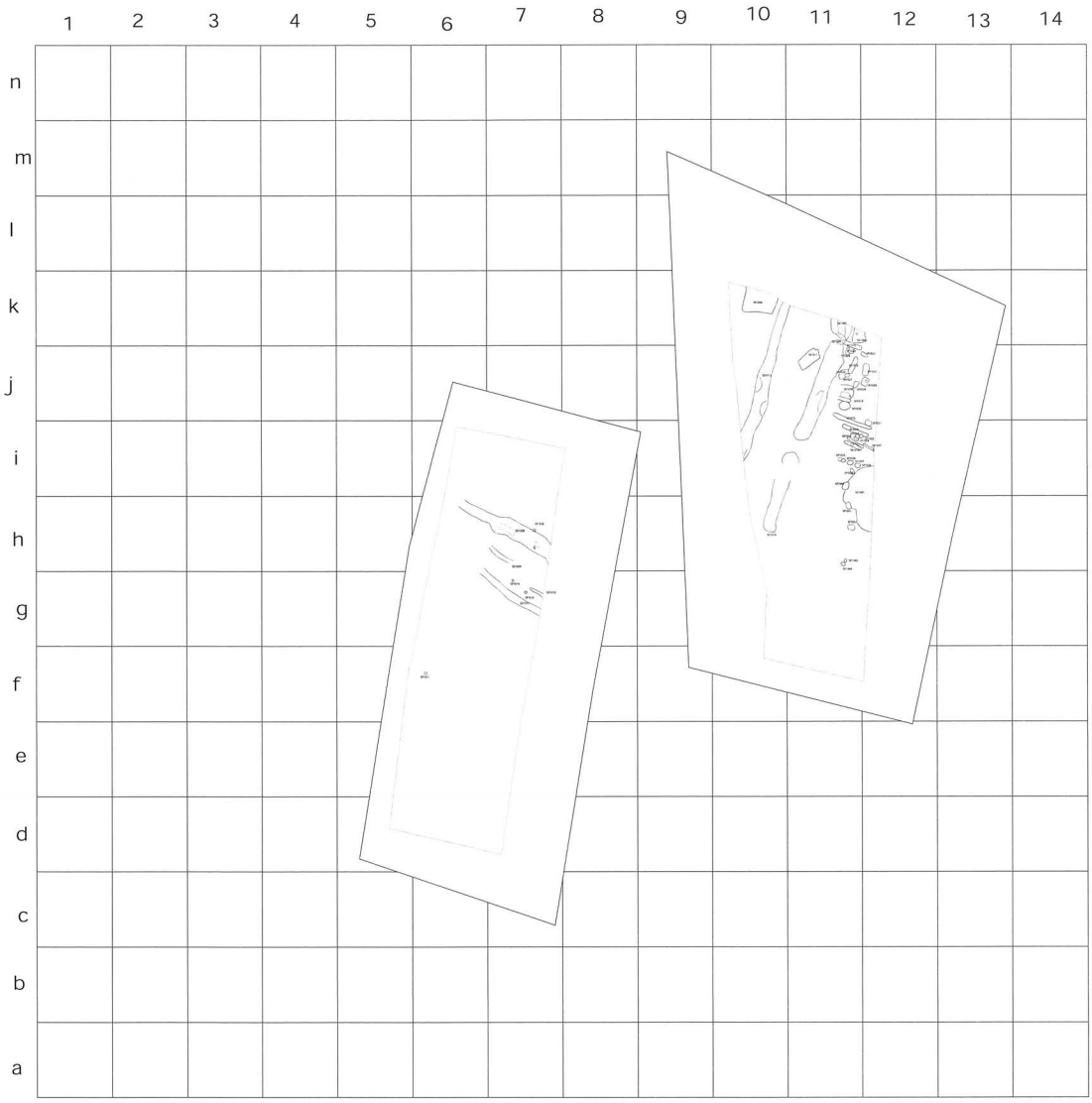


第15図　2区遺構配置図（S=1/500）



ＰＬ．５　２区完掘状況（北から）

ＰＬ．６　２区完掘状況（南から）



第16図　3，4区遺構配置図（S=1/500）

ＰＬ．７　３区完掘状況（北から）

ＰＬ．８　４区完掘状況（北から）

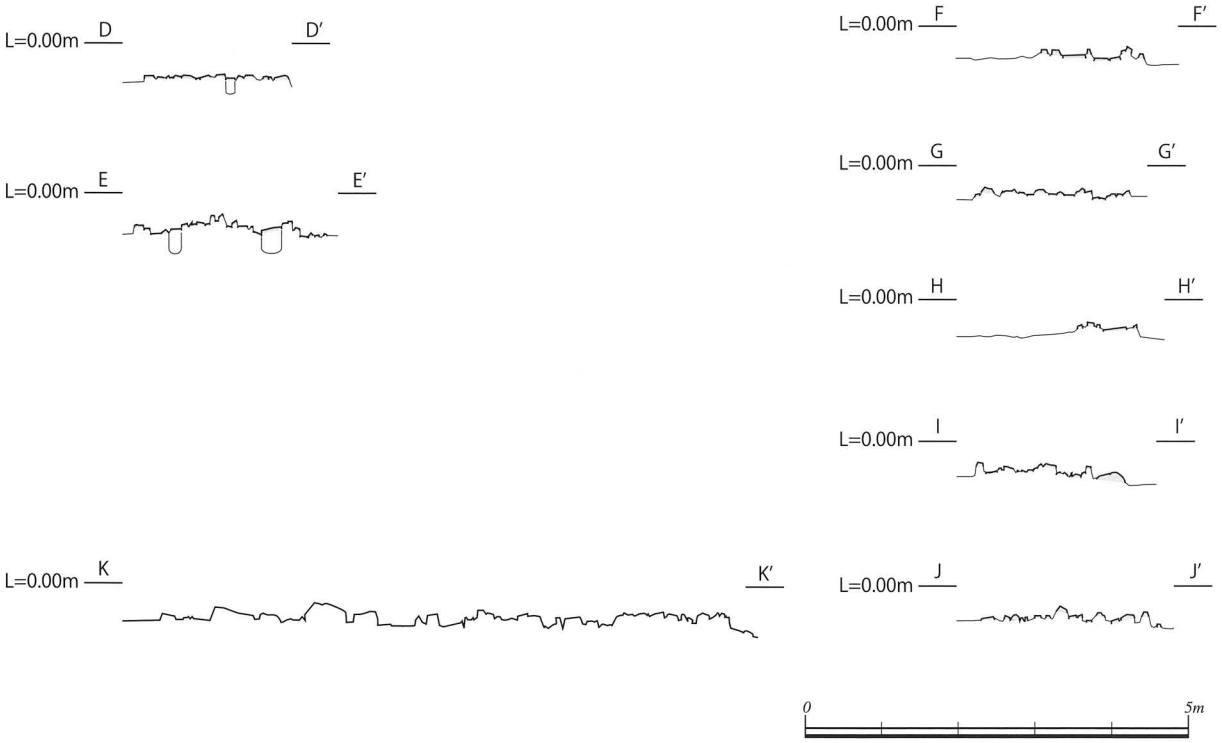
第 17 図　SG1001 遺構図（1）

（2）遺構と遺物

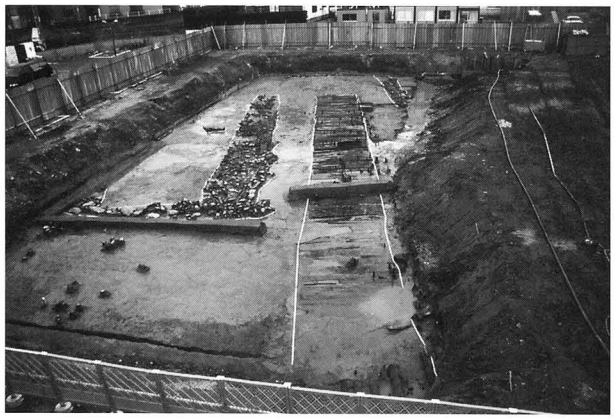
1号石積基礎遺構 SG1001（第17～20図）

1区、ｉ11～ｐ12グリッド付近にて検出。平面形態は南北方向に長い部分と、それに直交する短く東西方向に延びる部分から構成される「L」字状を呈する石敷である。南北方向石敷の範囲は南北長18.9 m、東西幅2.3 mを測る。東西方向石敷の範囲は南北長7.5 m、東西幅1.5 mを測る。石積基礎北端部で標高－0.65 mを、南端部で－1 mを測る。

南北方向石敷は、主に約10～20㎝程度の結晶片岩割石で構成されている。結晶片岩は石面を揃えて敷き詰めたのではなく、乱雑に置かれた状態である。ただし、一部に周辺の割石より大きな30㎝大の結晶片岩板石を平坦面を上にして礎石状に置いている（PL.13～20）。東側縁沿いの石の並びには規則性や石面の揃いなどは認められず、石垣に該当する石積みは認めらない。石積みは裏込石に該当するものと推定される。また石敷東側縁のやや内側には、2本の木材が石敷の下に置かれている（PL.21～24）。石敷を行う前に胴木として



第18図　SG1001 遺構図（2）



ＰＬ．９　SG1001，SJ1001 検出状況

ＰＬ．10　SG1001 検出状況１

ＰＬ．11　SG1001 検出状況２

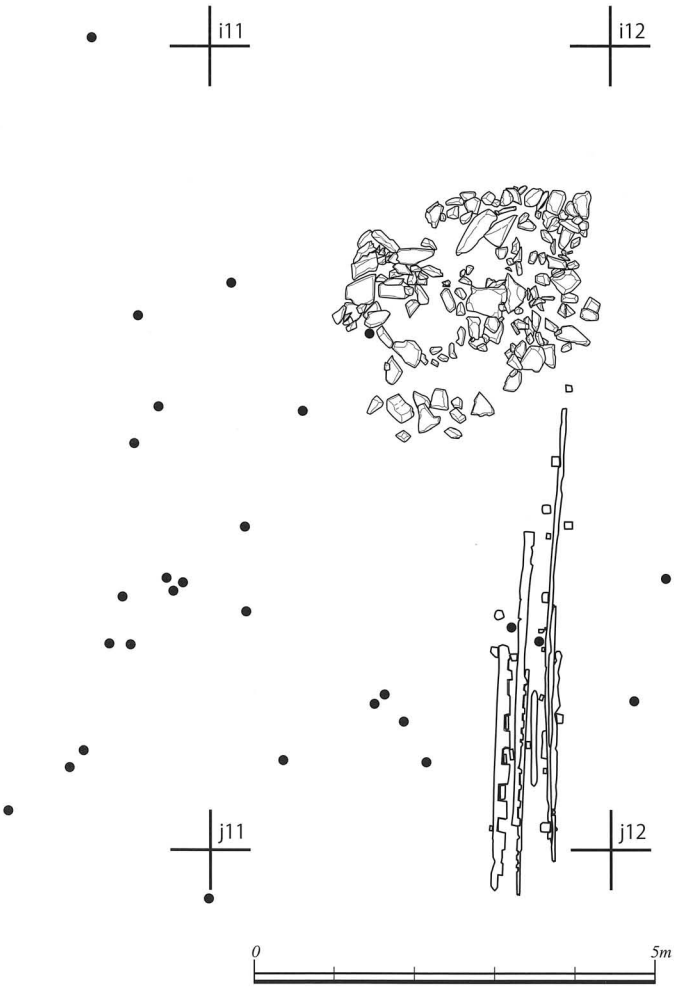
ＰＬ．12　SG1001 検出状況３

敷かれたものと推定される。北側胴木は残存長９ｍ、残存幅 50㎝を測り、南側胴木は残存長 3.5 ｍ、残存幅 40㎝を測る。

一方、南側で直交する東西方向の石敷は、主に約 10 ～ 20㎝程度の結晶片岩割石と約 50 ～ 70㎝程度の砂岩川原石で構成されている。結晶片岩割石の石敷の状況は同じである。しかし、砂岩川原石は南側縁の中央部から西側にかけて、南側に石の面を揃えるように配置されている。なお、胴木は未検出である。

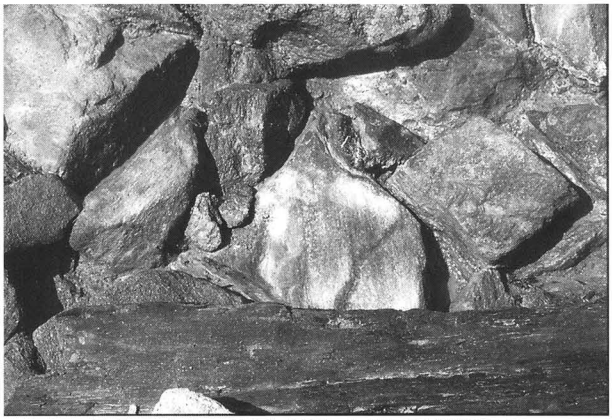
この「Ｌ」字状の石積基礎から南に約４ｍの地点に、東西３ｍ、南北 3.3 ｍを測る範囲の石積基礎が検出された。北東隅から西側には 30㎝程度の結晶片岩割石が約１ｍの範囲に渡って、小口を揃えて置かれている。一方、北東隅から南側の石列は、面を揃えていないが、本来は西側同様の石列が存在したと推定される。この北東隅の角度は約 90 度を測る。西側縁には２～３段に渡って、約 50㎝弱の大きさの結晶片岩割石が小口積されている。これら石列の内側には、約 20 ～ 60㎝程度の結晶片岩割石や砂岩川原石が乱雑に敷かれている。本来は東西３ｍ、南北 3.3 ｍ程度の方形区画の石敷が存在したと推定される。

この方形区画石敷の東側ラインに連続して６本の部材が杭で固定された状態で検出された。周辺には原位置を保つ石は無く、本来は南北方向の部材とそれを固定する杭でのみ構成されていたと推定される。東西幅約 18.1 ～ 60.6㎝、南北長 6.27 ｍを測り、底部には板を敷いてお

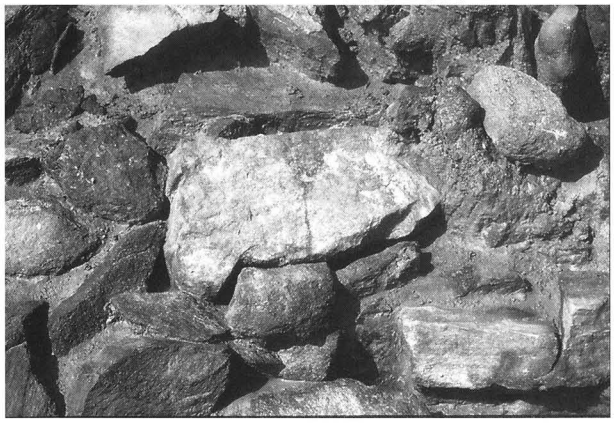


第 19 図　SG1001 遺物出土地点図

ＰＬ．13　SG1001 内礎石状平石１



ＰＬ．14　SG1001 内礎石状平石２



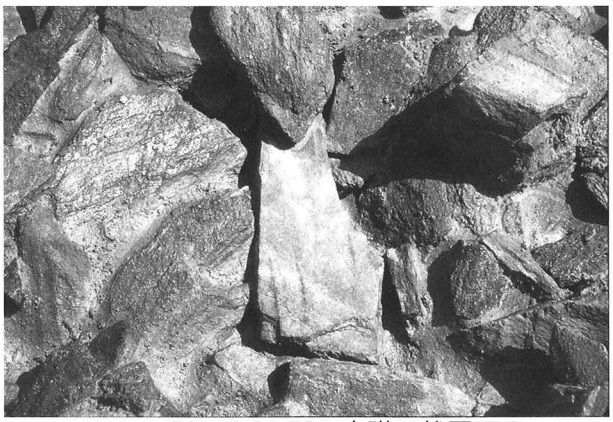
ＰＬ．15　SG1001 内礎石状平石３

ＰＬ．16　SG1001 内礎石状平石４

ＰＬ．17　SG1001 内礎石状平石５

ＰＬ．18　SG1001 内礎石状平石６

ＰＬ．19　SG1001 内礎石状平石７



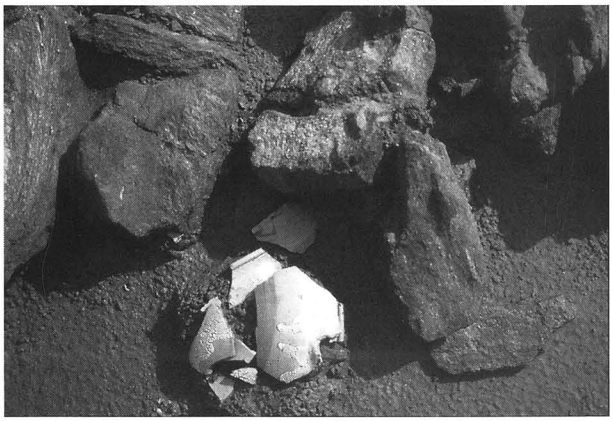
ＰＬ．20　SG1001 内礎石状平石８

ＰＬ．21　SG1001 集石内土台木１

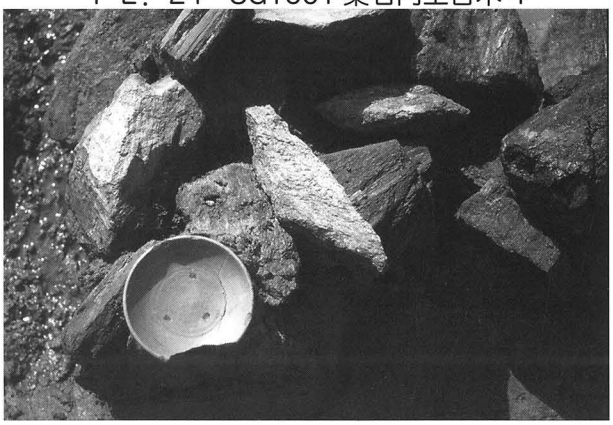
ＰＬ．22　SG1001 集石内土台木２

ＰＬ．23　SG1001 集石内土台木３

ＰＬ．24　SG1001 集石内土台木４



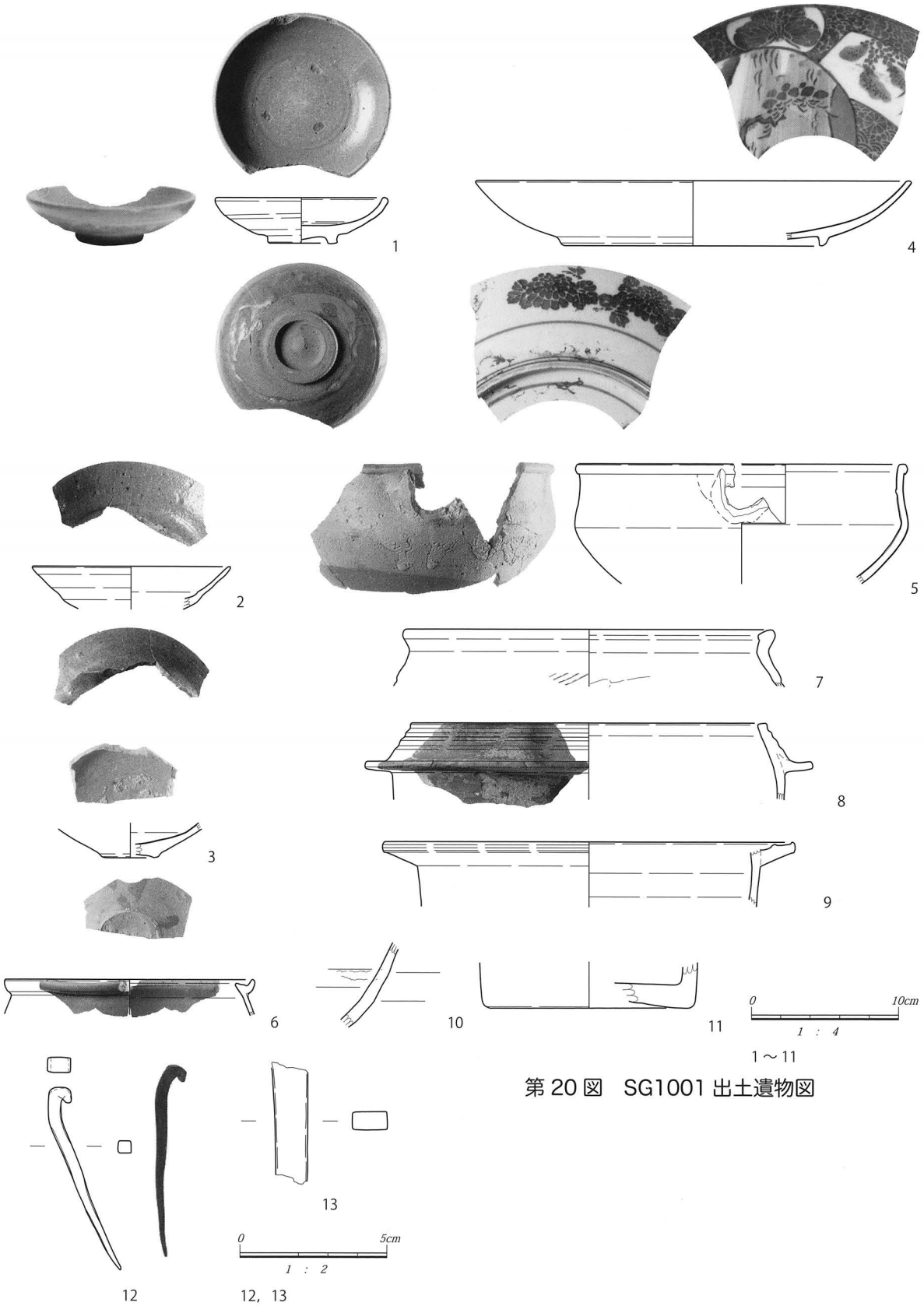
ＰＬ．25　SU1001 遺物出土状況１



ＰＬ．26　SU1001 遺物出土状況２

り、断面形帯は凹状を呈する。部材を固定する杭は、直径 4.5 ～ 7.2㎝を測る。御船屋内の海水を大堀に向かって排出する暗渠と推定される。暗渠内にはオリーブ灰色砂質シルト層が堆積していた。なお、この暗渠に相対する位置にあるのが SG1002 南側でも検出されている。

１は肥前系陶器の皿である。底部から体部下半にかけては釉がかかっておらず、見込みに３箇所の砂目痕が残る。２は肥前系陶器の皿である。いわゆる砂目唐津である。釉薬は表面に細かな気泡が多数あり、貫入も認められ、部分的には厚いが全体的には薄い。17 世紀初頭から前半。３は磁器の皿である。底部外面に４方向の砂目痕が残る。４は肥前系磁器の皿である。５は陶器の片口である。体部上半にのみ釉薬がかかる。６は磁器の水指である。７は土師質土器の甕である。外面には煤が付着する。８は瓦質の羽釜である。鍔下面には煤付着や被熱赤変が観察される。９は瓦質羽釜である。10 は土師質土器の甕である。内面に焦げが付着。11 は土師質土器の焜炉である。底部外面に黒斑がある。讃岐系と推定される。12，13 は船釘である。



第 20 図　SG1001 出土遺物図

遺物番号	遺構	材質	器種	口径	器高	最大径	底径	胎土色	絵付・釉薬	外面文様	内面文様	印・銘等	製作地	備考	実測番号
1	SG1001	陶器	皿	11.2	3.1		4.2	内：8Y,3s,6.5 グレイみの黄 外：8Y,3s,6.5 グレイみの黄 断：7.5YR6/4 にぶい橙	施釉				肥前系	内面 3 方向砂目あり	366
2	SG1001	灰釉陶器	皿	(13.4)	(2.9)			内：5Y7/1 灰白 外：5Y7/1 灰白 断：2.5Y7/1 灰白	施釉	轆轤ナデ	轆轤ナデ		唐津	貫入あり 17 c 初～前半	346
3	SG1001	磁器	皿				(3.8)	内：5Y6/3 オリーブ黄 外：5Y7/2 灰白 断：5Y7/2 灰白	施釉					外面 4 方向砂目あり	360
4	SG1001	磁器	皿	(29.3)	4.4		(17.4)	内：18B,1s,8.5 青みの白 外：18B,7s,2.4 こい青 断：16gB,1s,8.5 青みの白	絵付・施釉	轆轤ナデ 風景	轆轤ナデ		肥前系	近代	347
5	SG1001	陶器	片口	(22.0)	(8.1)	(22.6)		内：10YR6/3 にぶい黄橙 外：5Y7/2 灰白 断：7.5 Y R 6/6 橙	施釉						390
6	SG1001	磁器	水指	(16.8)	(2.4)			内：5Y6/3 オリーブ黄 外：5Y7/2 灰白 断：5Y7/1 灰白	施釉	轆轤ナデ	轆轤ナデ				342
7	SG1001	土師質土器		(24.8)	(4.0)			内：5YR6/6 橙 外：10YR7/4 にぶい黄橙		口縁ヨコナデ 体部タタキ 3 条 /cm	口縁ヨコナデ 体部ヨコナデ→ナデ			体部外面煤付着	343
8	SG1001	瓦質土器？	羽釜	(24.0)	(5.2)	(30.4)		内：N4/0 灰 外：N4/0 灰 断：2.5Y7/2 灰黄		ヨコナデ	ヨコナデ			外面鍔下側に被熱赤変、煤付着	344
9	SG1001		羽釜	(27.6)		(28.0)		内：N3/0 暗灰 外：N4/0 灰 断：N6/0 灰		ヨコナデ	ヨコナデ				345
10	SG1001	土師質土器	甕		(5.7)			内：10YR4/1 褐灰 外：2.5Y7/1 灰白 断：2.5Y7/1 灰白		ユビナデ	ユビナデ			内面に煤付着 石英、結晶片岩、長石をむ	341
11	SG1001	土師質土器	焜炉		(3.1)		(14.0)	内：10YR5/3 にぶい黄褐 外：10YR5/3 にぶい黄褐		摩滅のため調整不明	体部ヨコナデ 底部板ナデ		讃岐？	底部外面黒斑 石英、長石、角閃石を含む	348

第 1 表　SG1001 出土陶磁器類観察表

遺物番号	遺構	器種	全長	幅	厚み	頭部 1	頭部 2	重量	備考	実測番号
12	SG1001	船釘	6.8		0.4	0.6	0.5	6.7		442
13	SG1001	船釘	4.2	1.2	0.6			7.5		429

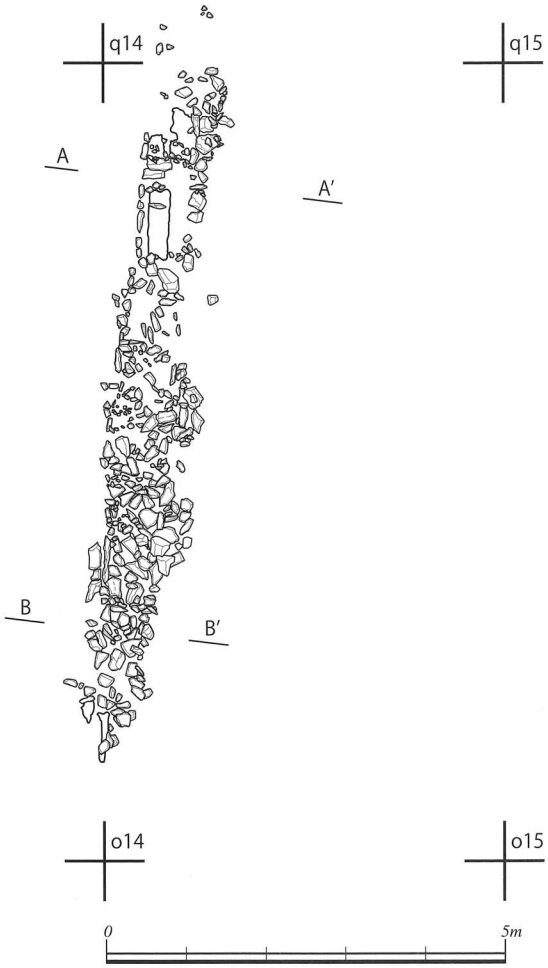
第 2 表　SG1001 出土金属製品観察表

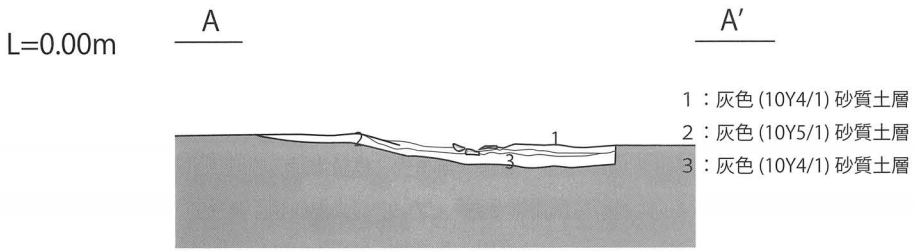
2 号石積基礎遺構 SG1002（第 21 ～ 24 図）

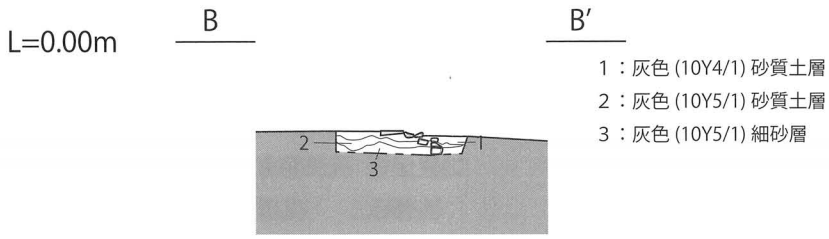
1 区、ｊ 13 ～ｐ 14 グリッド付近にて検出。南北長約 31 m、東西長約 8 mの範囲に「L」字状を呈する石敷である。SG1001 に平行して構築されている。南北方向の石積基礎は、撹乱等により途中で途切れているが、本来は連続するものである。北側の石積基礎は南北長 9.6 m、東西幅 1.2 mに渡る。約 20 ～ 30㎝の結晶片岩割石を乱雑に敷き詰めている。西側縁の北側付近には、30㎝程度の結晶片岩割石による小口積が認められる。SG1001 同様に結晶片岩割石を敷く前に胴木が据え置かれている。胴木は 2 箇所確認される。北側の胴木は残存長 1.8 m、残存幅 70㎝を測る板材である。南側の胴木は残存長 3 m、残存幅 30㎝を測る。

南側の石敷基礎は、南北長 13 m、東西幅 2 mを測り、南側で東に向かって直交方向に曲がる。約 20 ～ 30㎝の結晶片岩割石を乱雑に敷き詰めている。西側縁と南側縁には約 40 ～ 80㎝の砂岩川原石が面を揃えて置かれている。一部は崩落によりラインからはずれる。

ｋ 15 グリッド付近には東西約 2.5 m、南北約 6 mの範囲に方形を呈する石敷基礎が検出された。この石敷基礎は、約 5 ～ 20㎝程度の結晶片岩割石が、厚さ約 50㎝に渡って乱雑に積まれている。石敷の下部には約

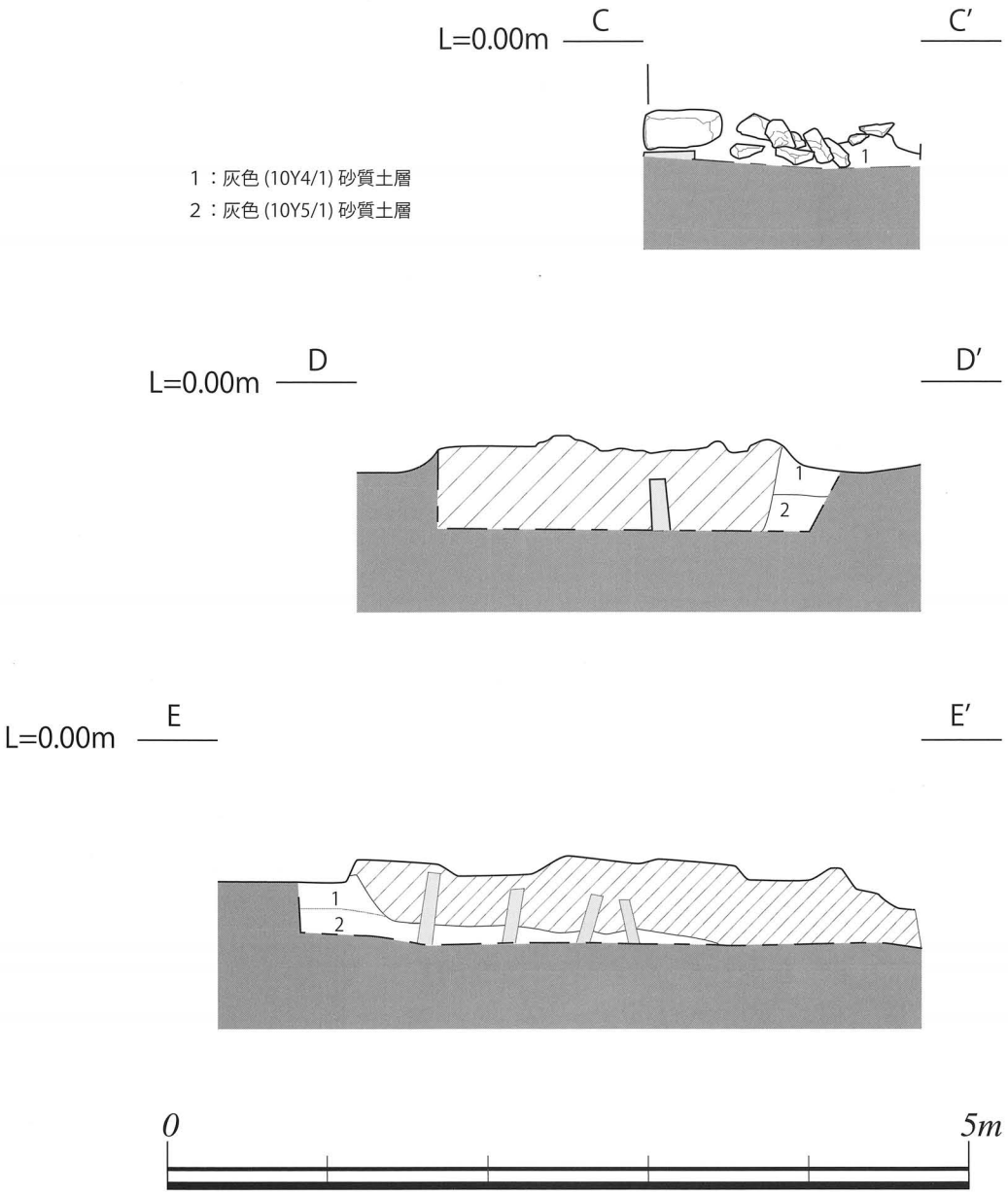






第 21 図　SG1002 遺構図（1）

第 22 図　SG1002 遺構図（2）



第 23 図　SG1002 遺構図（3）

ＰＬ．27　SG1002 北側部分検出状況

ＰＬ．28　SG1002 南側部分全景

ＰＬ．29　SG1002 測量風景

ＰＬ．30　SG1002 胴木検出状況

ＰＬ．31　SG1002，SJ1002 検出状況

ＰＬ．32　SG1002 内杭検出状況

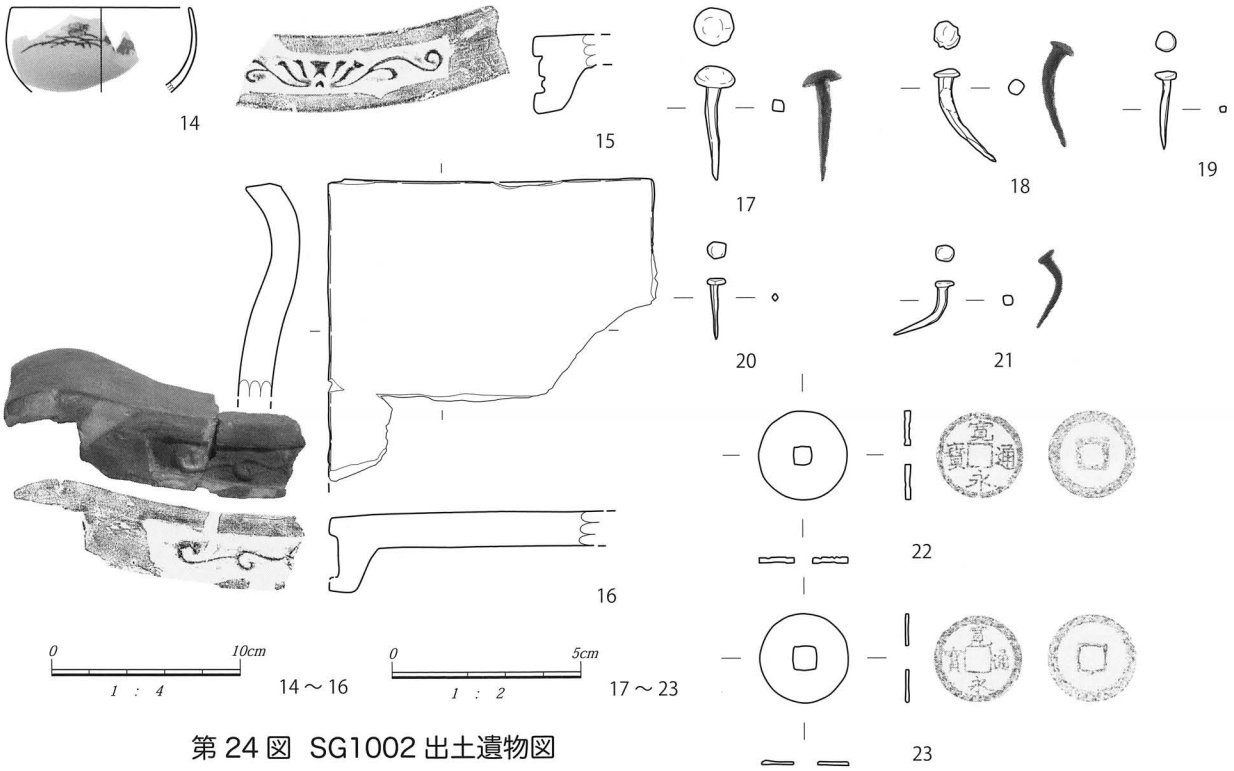
ＰＬ．33　SG1002 内杭打設状況

ＰＬ．34　SG1002 集石下土台木

80㎝間隔で杭が打設されている。これらの杭は、胴木を固定する細い杭ではなく、石敷中層まで延びる長さのある杭と推定されることから、石積みをする際に用いられた木製枠の一部と推定される。

14 は磁器の碗である。外面には草と不明から構成される風景が描かれている。

17 ～ 21 は船釘である。22，23 は寛永通宝である。



第 24 図　SG1002 出土遺物図

遺物番号	遺構	材質	器種	口径	器高	最大径	底径	胎土色	絵付・釉薬	外面文様	内面文様	印・銘等	製作地	備考	実測番号
14	SG1002	磁器	碗	9.4				内：7.5Y7/1 灰白 外：7.5Y7/1 灰白	染付、施釉	風景（草＋?）			瀬戸系		70

第 3 表　SG1002 出土陶磁器類観察表

実測番号	遺構	器種	長	上弦幅	弦深	垂れ長	文様区幅	文様区高	平瓦厚部	表器面色調	裏器面色調	断面色調	文様	焼成	雲母粉	備考	遺物番号
49	SG1002	軒平瓦	(17.4)			3.9		2.2	1.9	N5/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白	唐草文	良	有		16
83	SG1002	軒平瓦	(3.3)			4.1		2.0		N4/0 灰	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	唐草文	良	有		15

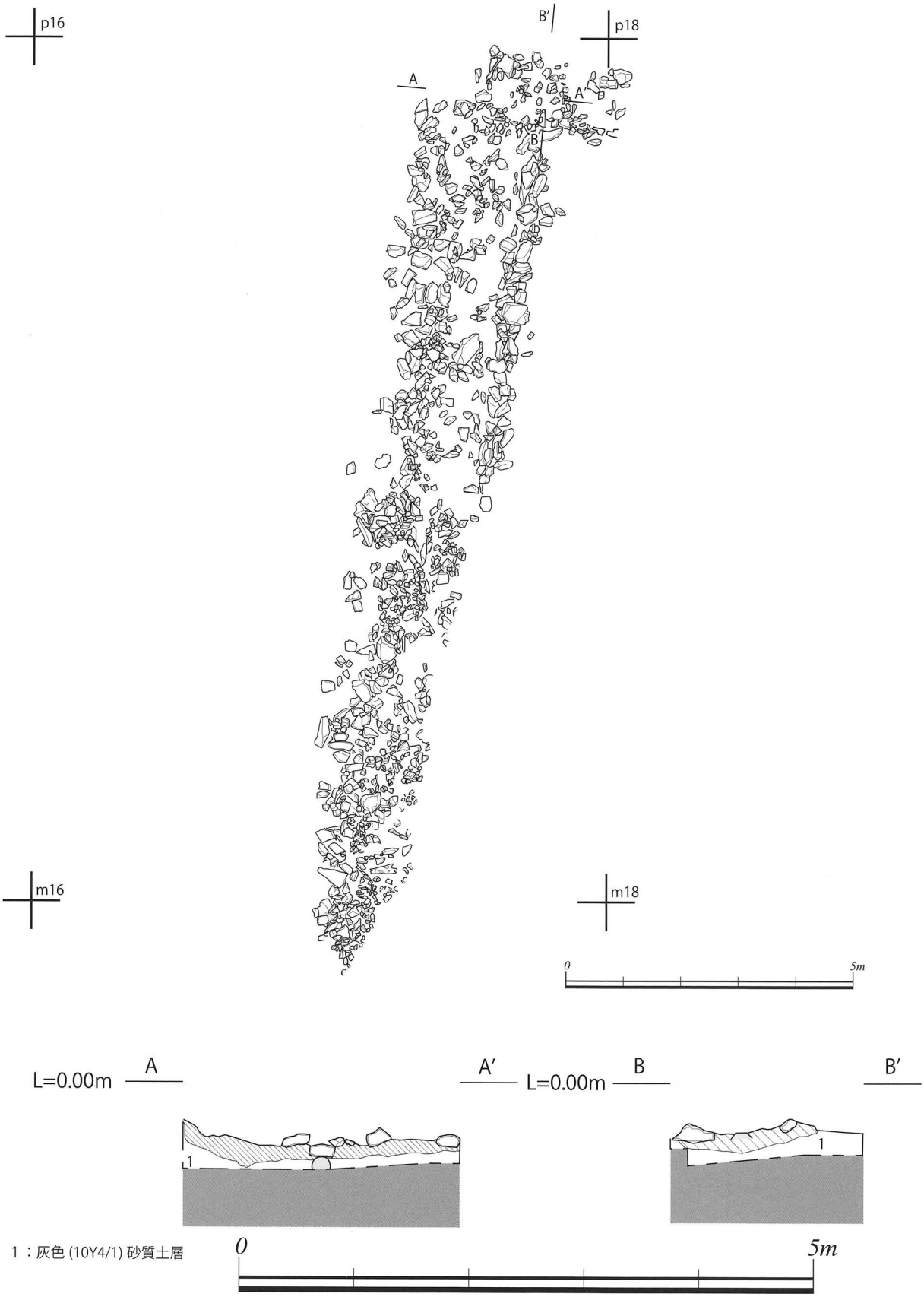
第 4 表　SG1002 出土瓦類観察表

遺物番号	遺構	器種	全長	幅	厚み	頭部1	頭部2	重量	備考	実測番号
17	SG1002	船釘	3.0		0.3	1.1	1.0	2.3		76
18	SG1002	船釘	3.1		0.4	0.8	0.7	1.8		75
19	SG1002	船釘	2.1		0.2	0.6	0.6	0.5		72
20	SG1002	船釘	1.6		0.2	0.5	0.5	0.3		73
21	SG1002	船釘	2.3		0.3	0.5	0.5	0.7		77
22	SG1002	寛永通宝	2.4	2.4	0.1			3.0	寛永通宝	71
23	SG1002	船釘	2.4	2.4	0.1			1.8	寛永通宝	86

第 5 表　SG1002 出土金属製品観察表

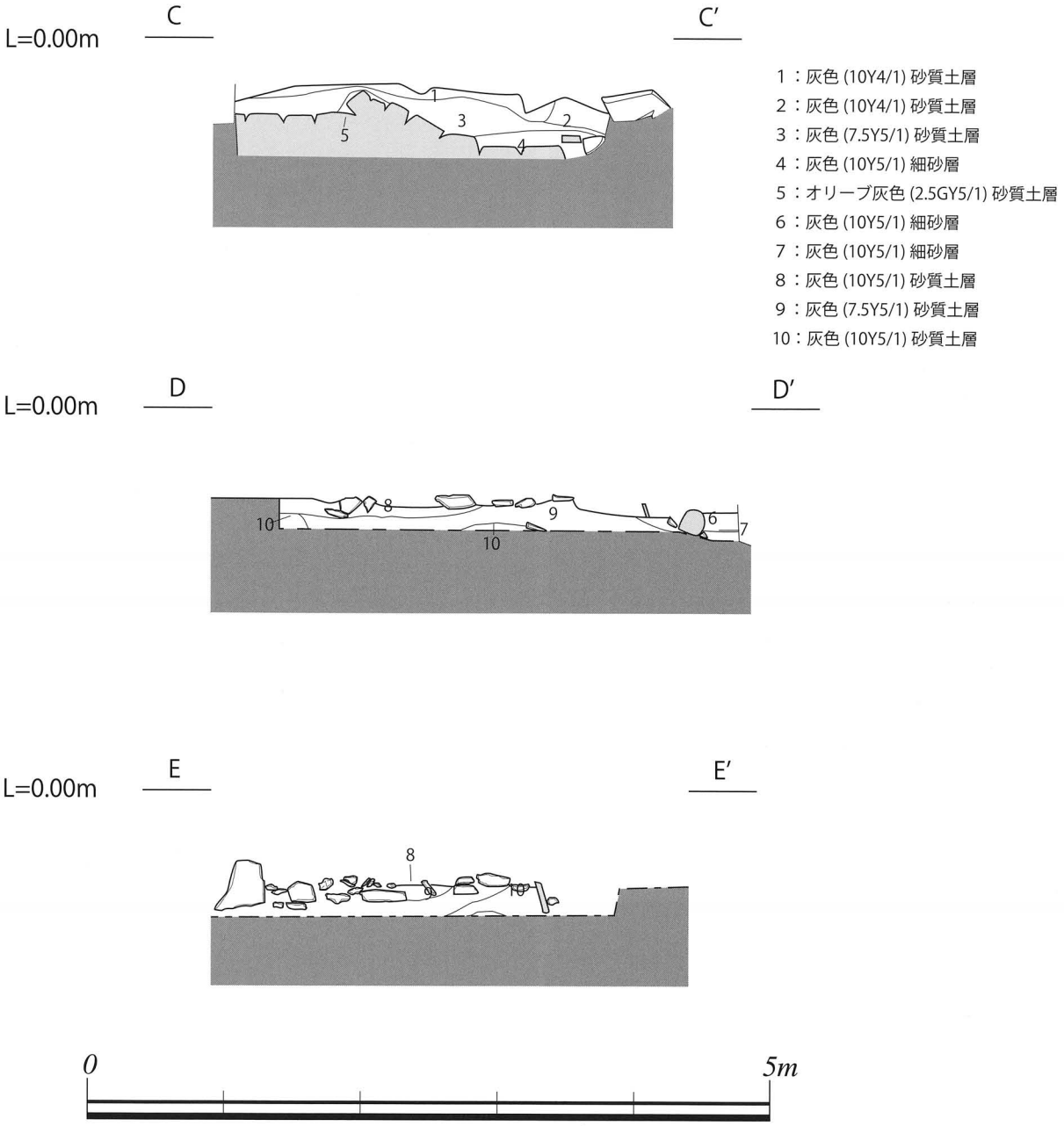
3 号石敷基礎遺構 SG1003（第 25 ～ 33 図）

1 区、i 15 ～ o 17 グリッド付近にて検出。南北長 32 m、東西長 5 mの範囲に「L」字状を呈する石敷である。本来一連の石敷基礎が連続していたが、複次に渡る調査年度により i 17 グリッド付近にて未検出となった。i 17 グリッド以北の北側石敷は、南北長 16 m、東西幅 2.3 mを測る。約 20 ～ 40㎝の結晶片岩割石を乱雑に積み上げている。東側縁の北東隅から約 6 mの範囲では、約 50㎝弱程度の結晶片岩割石を小口積みと平積みを併用して積み上げている。石敷基礎中央部には、直径 15㎝程度の胴木が埋設されている。



第 25 図　SG1003 遺構図（1）

第 26 図　SG1003 遺構図（2）



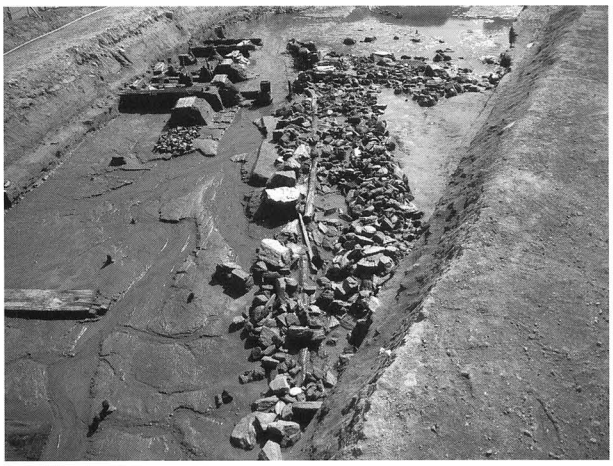
第 27 図　SG1003 遺構図（3）

この北東隅からほぼ直角に東方向に石敷が約 1.5 m延びることから、東西方向の石敷基礎は、御船屋の北側奥壁に該当する石敷と推定される。ただし、奥壁面を構成する石積みは遺存していない。

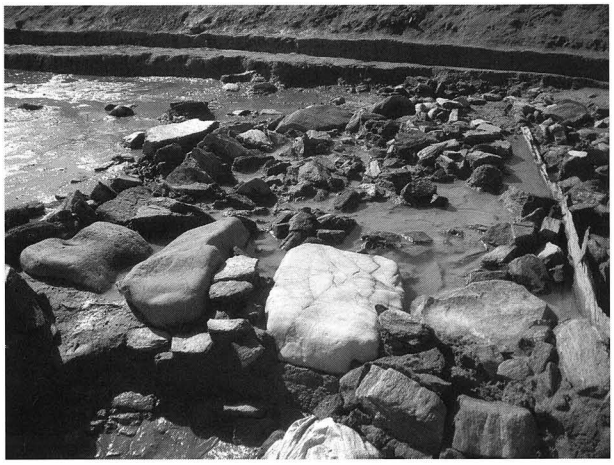
ｉ 17 以南の石敷基礎は、南北長 14.5 m、東西幅 2.5 mの範囲に「逆Ｌ」字状を呈する石敷である。東側縁にの一部には、約 60㎝程度の砂岩川原石が小口積みされており、御船屋の西側壁と推定される。東側縁から約 80㎝内側には直径約 20㎝の南北方向の胴木が埋設されている。この胴木ラインは西側壁に該当する砂岩石積みの背面直下に該当する。南北方向胴木から約 90㎝南の地点で、西方向へ直交する全長約３mを測る板材が埋設されている。厚さ約 10㎝弱の厚みのある板材であるが、土留め柵として埋設されたものと推定される。

この土留め柵板材から南には、約 80㎝程度の大形砂岩川原石が小口積みと平積みを併用して石積みされている。南北石列が御船屋西側壁、東西石列が大堀に面した石垣に該当する。隅角石は約 50㎝角のやや小型の砂岩川原石を用いているのが特徴である。南北石列にも東西石列にも組み込まれて居らず、独立している。

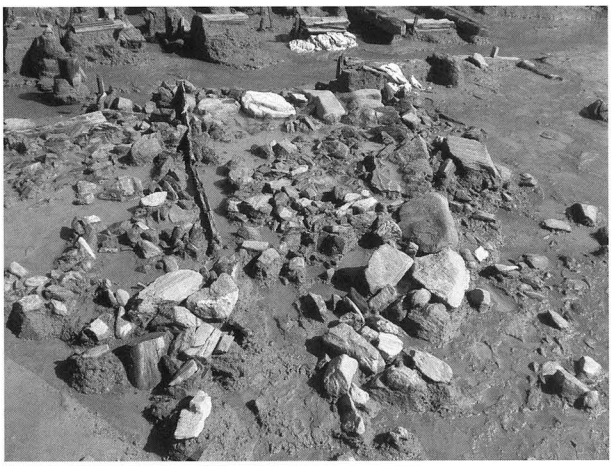
ＰＬ．35　SG1003 南端



ＰＬ．36　SG1003 完掘状況（北から）



ＰＬ．37　SG1003 南端部礎石１



ＰＬ．38　SG1003 南端礎石２（西から）

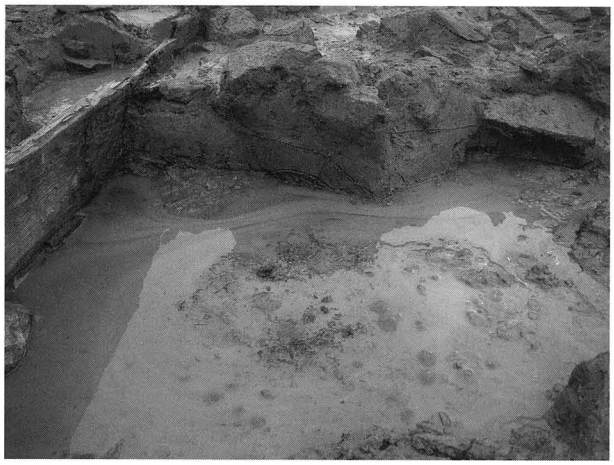
ＰＬ．39　SG1003 南端礎石３

ＰＬ．40　SG1003 土台木

ＰＬ．41　SG1003 集石断ち割り

ＰＬ．42　SG1003 土台木固定状況

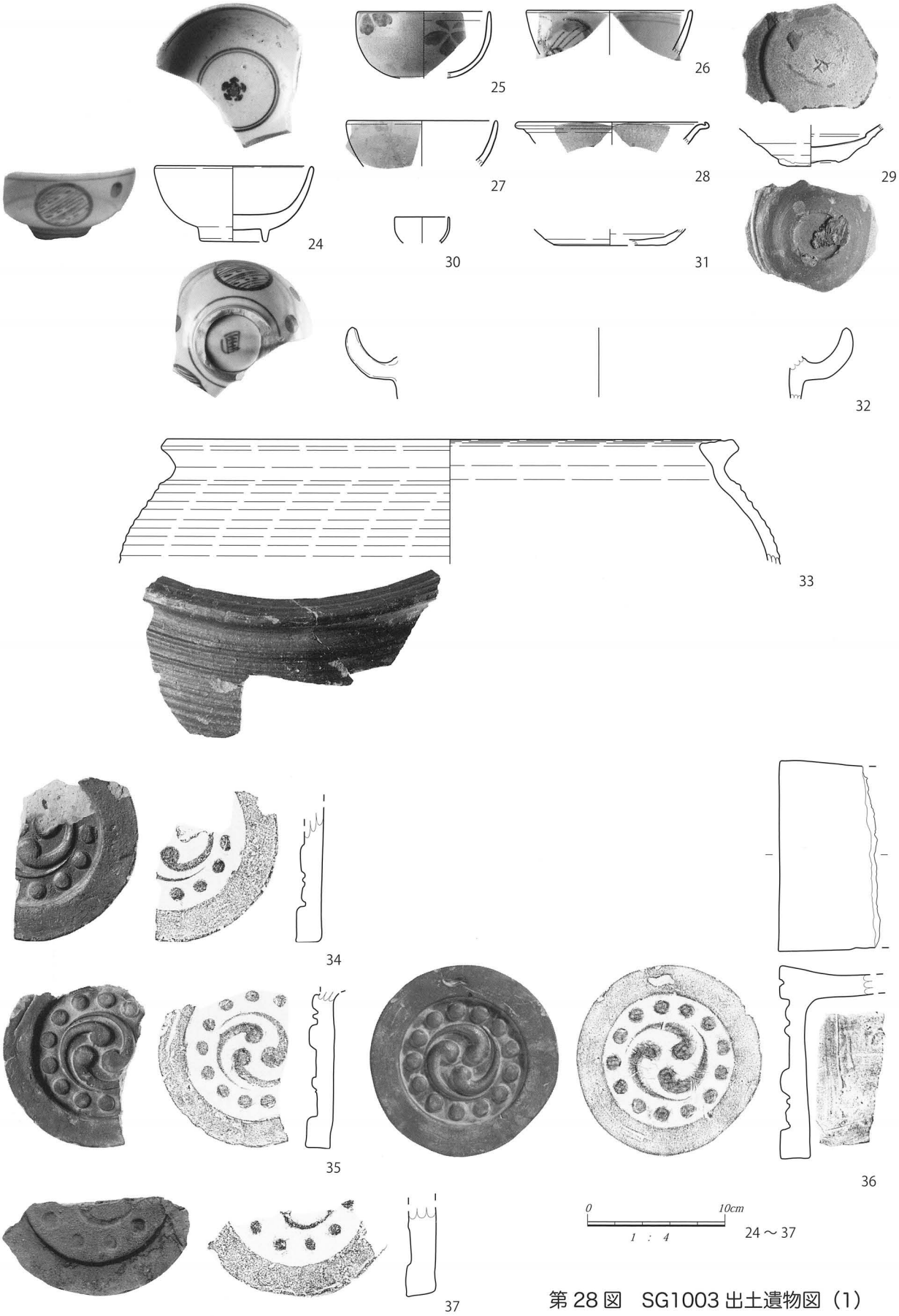
ＰＬ．43　SG1003 土留板検出状況



ＰＬ．44　SG1003 土留板土層堆積状況

ＰＬ．45　SG1003 集石内杭１

ＰＬ．46　SG1003 集石内杭２



第 28 図　SG1003 出土遺物図（1）

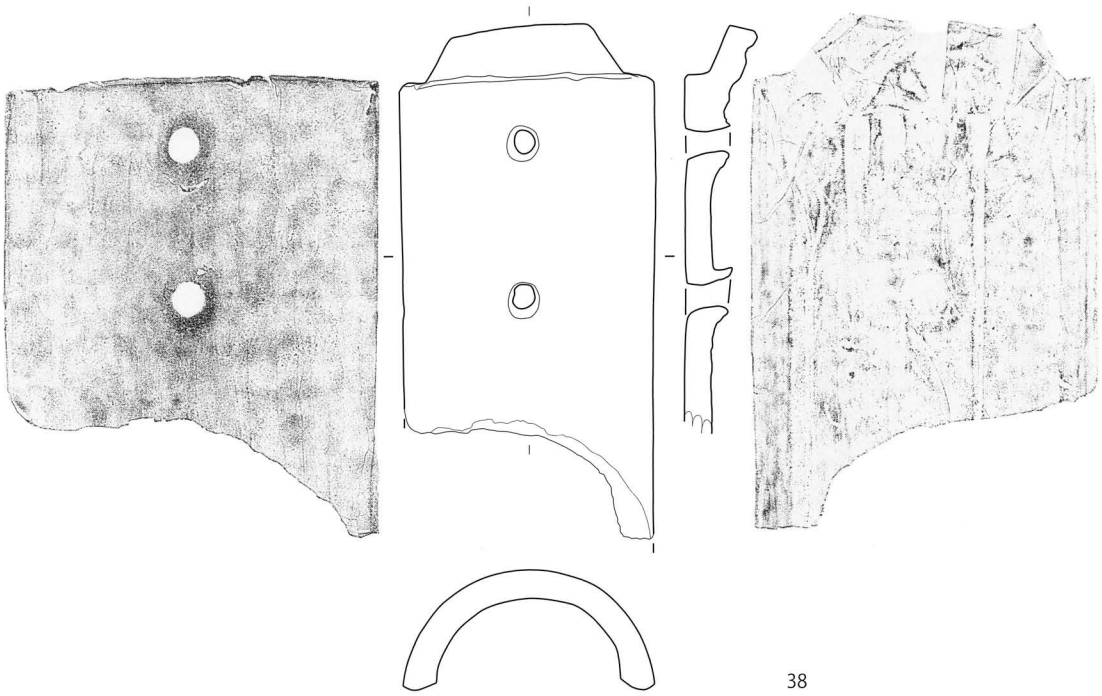
遺物番号	遺構	材質	器種	口径	器高	最大径	底径	胎土色	絵付・釉薬	外面文様	内面文様	印・銘等	製作地	備考	実測番号
24	SG1003	磁器	碗	11.2	5.5		4.7	内：10Y7/1 灰白 外：10Y7/1 灰白 断：N8/0 灰	染付、施釉	丸（みだれ横線）＋宝＋横線	横線＋梅花？	変形字銘	肥前系		84
25	SG1003	磁器	碗	(9.5)				内：5Y7/1 灰白 外：5Y7/1 灰白 断：2.5Y8/2 灰白	赤絵、施釉	桐＋赤絵生垣			瀬戸系		218
26	SG1003	陶器	碗	10.8				内：7.5Y7/1 灰白 外：7.5Y7/1 灰白 断：2.5YR7/4 淡赤橙	染付、施釉	宝＋風景（山？）			肥前系	胎土色に斑あり 釉薬は濁った感じ	6
27	SG1003	磁器	碗	(11.8)	(3.2)	(12.1)		内：5Y7/1 灰白 外：5Y7/1 灰白 断：10YR7/2 にぶい黄橙	絵付け、施釉	丸＋草	横線				220
28	SG1003	陶器	皿	(13.5)				内：2.5Y7/2 灰黄 外：2.5Y7/2 灰黄 断：7.5Y7/3 にぶい橙	施釉				唐津系？		216
29	SG1003	陶器	皿		3.0	(10.3)		内：2.5Y8/2 灰白 外：7.5YR5/6 明褐 断：7.5YR5/6 明褐	施釉				唐津？	外面 3 方向砂目	105
30	SG1003	磁器	碗	7.7				内：7.5Y7/1 灰白 外：7.5Y7/1 灰白 断：5Y8/1 灰白	施釉					白磁	5
31	SG1003	土師器	皿		(1.2)	(11.0)	(8.3)	内：2.5Y8/2 灰白 外：2.5Y8/2 灰白 断：2.5Y8/2 灰白		ヨコナデ	ヨコナデ			底部回転糸切り	219
32	SG1003	土師質土器	鍋		5.2	36.8		内：2.5Y7/2 灰黄 外：10YR7/3 にぶい黄橙 断：5Y3/1 オリーブ黒						石英、長石、結晶片岩含む	217
33	SG1003	陶器	甕	(41.0)	(9.0)			内：7.5YR4/3 褐 外：7.5YR4/3 褐 断：2.5YR5/1 黄灰	施釉	轆轤ナデ	轆轤ナデ		丹波		112

第 6 表　SG1003 出土陶磁器類観察表

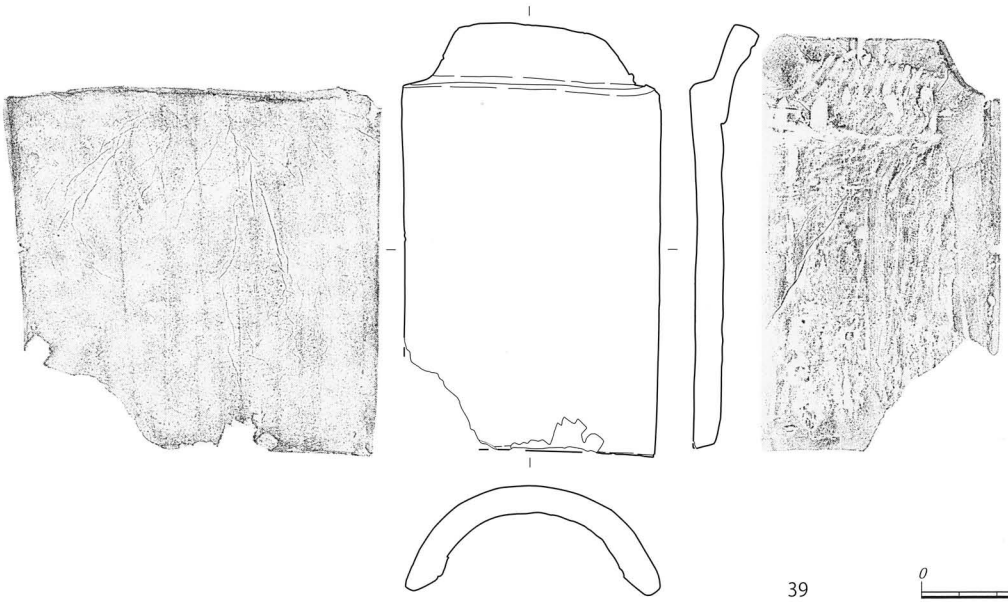
遺物番号	遺構	器種	長	瓦当直径	瓦当厚	文様径	縁高	丸瓦部厚	玉縁長	表器面色調	裏器面色調	断面色調	巴種	珠文数	コビキ痕	布目痕	焼成	雲母粉	備考	実測番号
34	SG1003	軒丸瓦			1.8		0.7			N4/0 灰	N5/0 灰	5Y7/1 灰白	左巻三巴	(4)			良	有		223
35	SG1003	軒丸瓦								N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	5Y7/1 灰白	左巻三巴	(9)			良	有		119
36	SG1003	軒丸瓦		14.0	2.2	11.0	0.7	1.5		N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	2.5Y6/1 黄灰	左巻三巴	13	無	無	良	有		82
37	SG1003	軒丸瓦			2.1		0.3			N5/0 灰	N6/0 灰	2.5Y5/1 黄灰	左巻	(4)			甘い	有		224
38	SG1003	丸瓦						1.5	2.5	N5/0 灰	N4/0 灰	5Y7/1 灰白							釘穴 2 穴あり	226
39	SG1003	丸瓦	22.9				4.3	1.5	2.8	N4/0 灰	N5/0 灰	N7/0 灰白				有	良	有		222
40	SG1003	丸瓦	23.1					2.0	3.0	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	5Y6/1 灰					良	有		225

第 7 表　SG1003 出土瓦類観察表（1）

24 は肥前系陶器の碗である。外面はみだれ模様の丸と宝と横線で、内面は横線と梅花で構成される。底部には変形字銘が施されている。25 は瀬戸系磁器の碗である。外面は赤江による桐と赤江生垣から構成される。26 は陶器の碗である。外面は宝と風景（山か？）で構成される。釉薬はやや濁っており、口縁の一部にはかかっていない。また、胎土色に斑があり黒色斑粒を含む。27 は磁器の碗である。外面は丸と草で、内面は横線で構成される。28 は陶器の皿である。唐津系か。29 は陶器の皿である。外面に 3 方向の砂目が残る。唐津系か。30 は磁器の碗である。絵付けは施されていない。31 は土師質土器の皿である。底部は回転糸切りである。32 は土師質土器の鍋である。胎土中には結晶片岩を含み、在地産と推定される。33 は陶器の甕である。丹波焼きである。



38



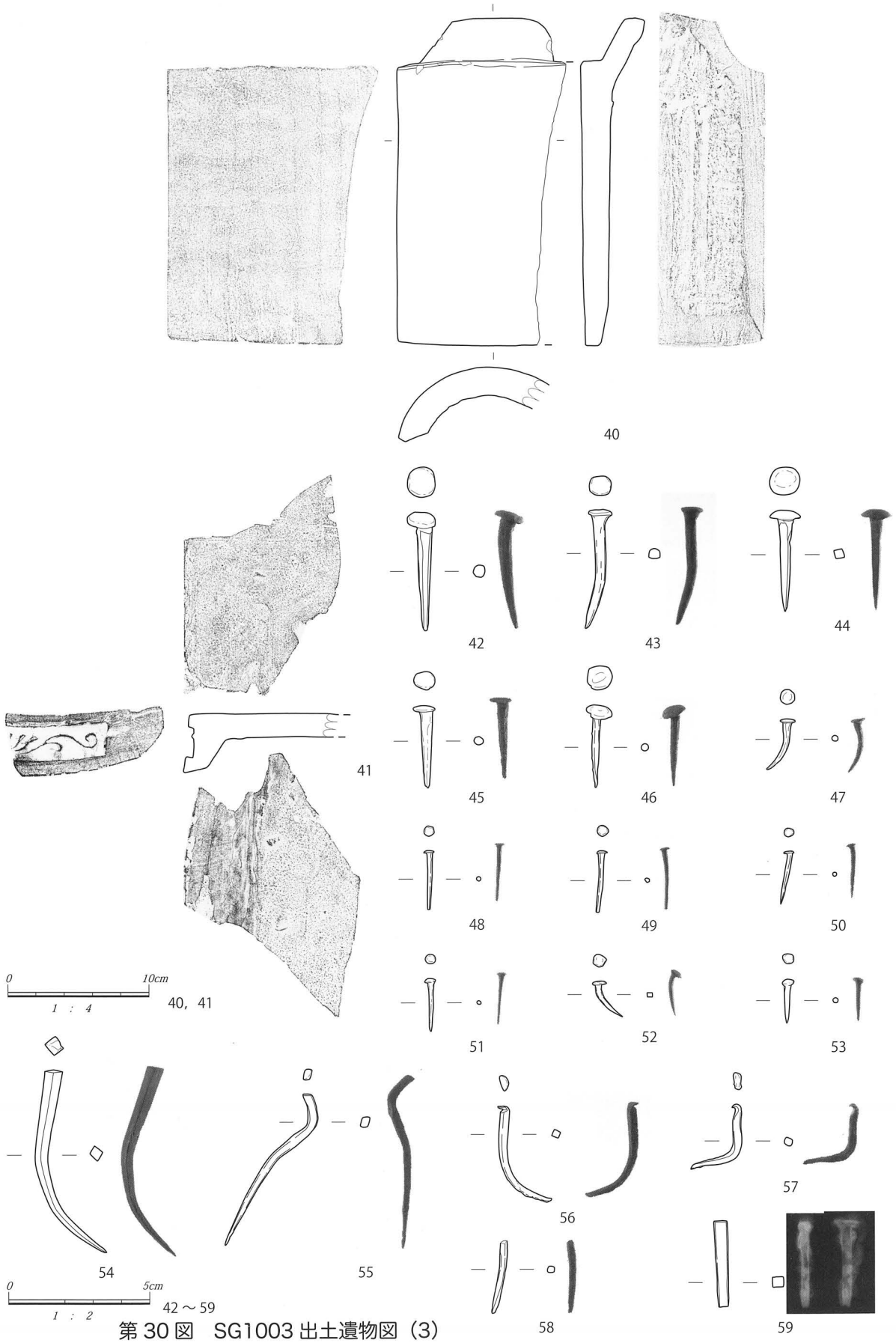
39

38, 39

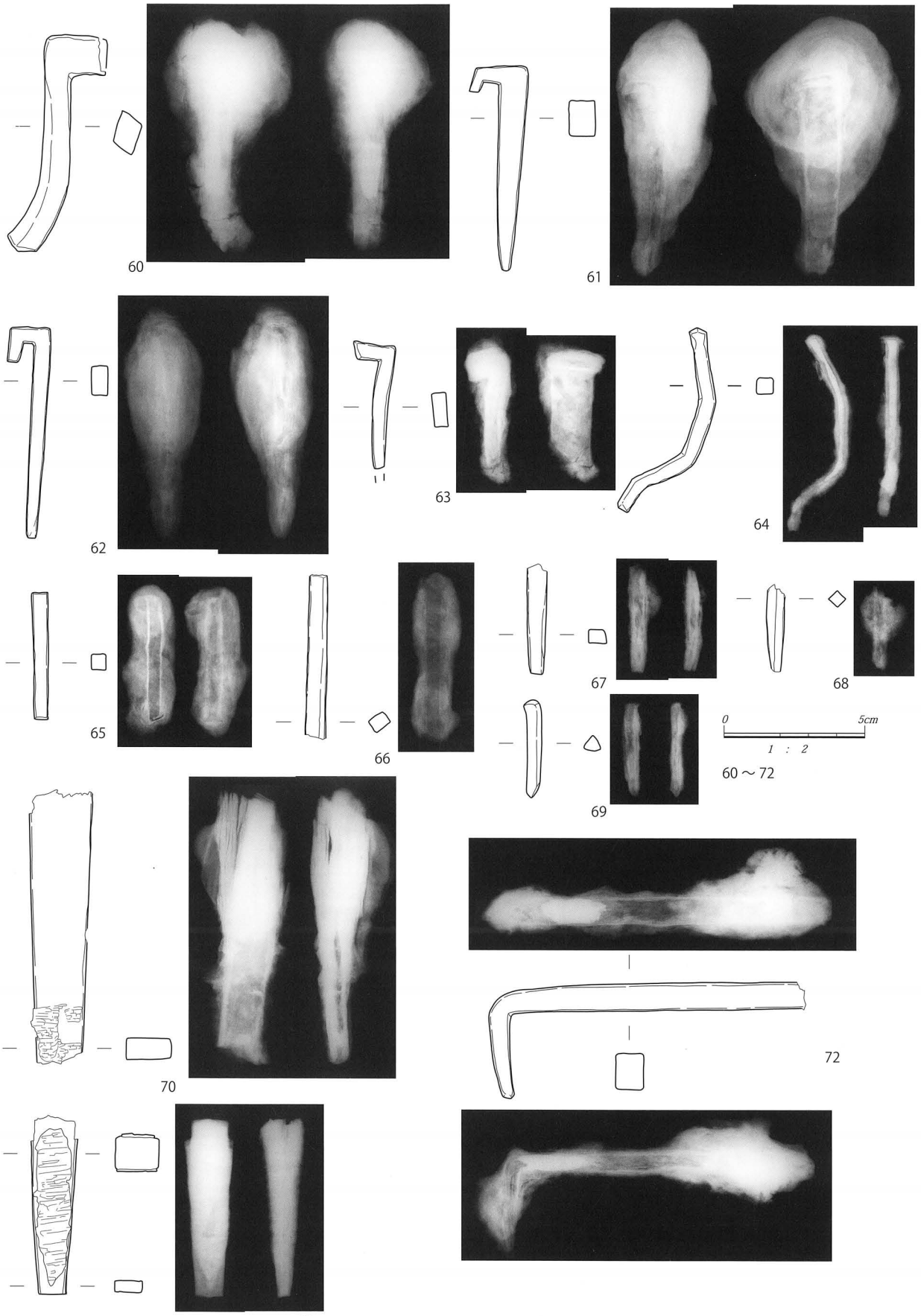
第 29 図　SG1003 出土遺物図（2）

実測番号	遺構	器種	長	上弦幅	弦深	垂れ長	文様区幅	文様区高	平瓦厚部	表器面色調	裏器面色調	断面色調	文様	焼成	雲母粉	備考	遺物番号
121	SG1003	軒平瓦				4.1		2.1	1.7	N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	N 5/0 灰	唐草文	良	有		41

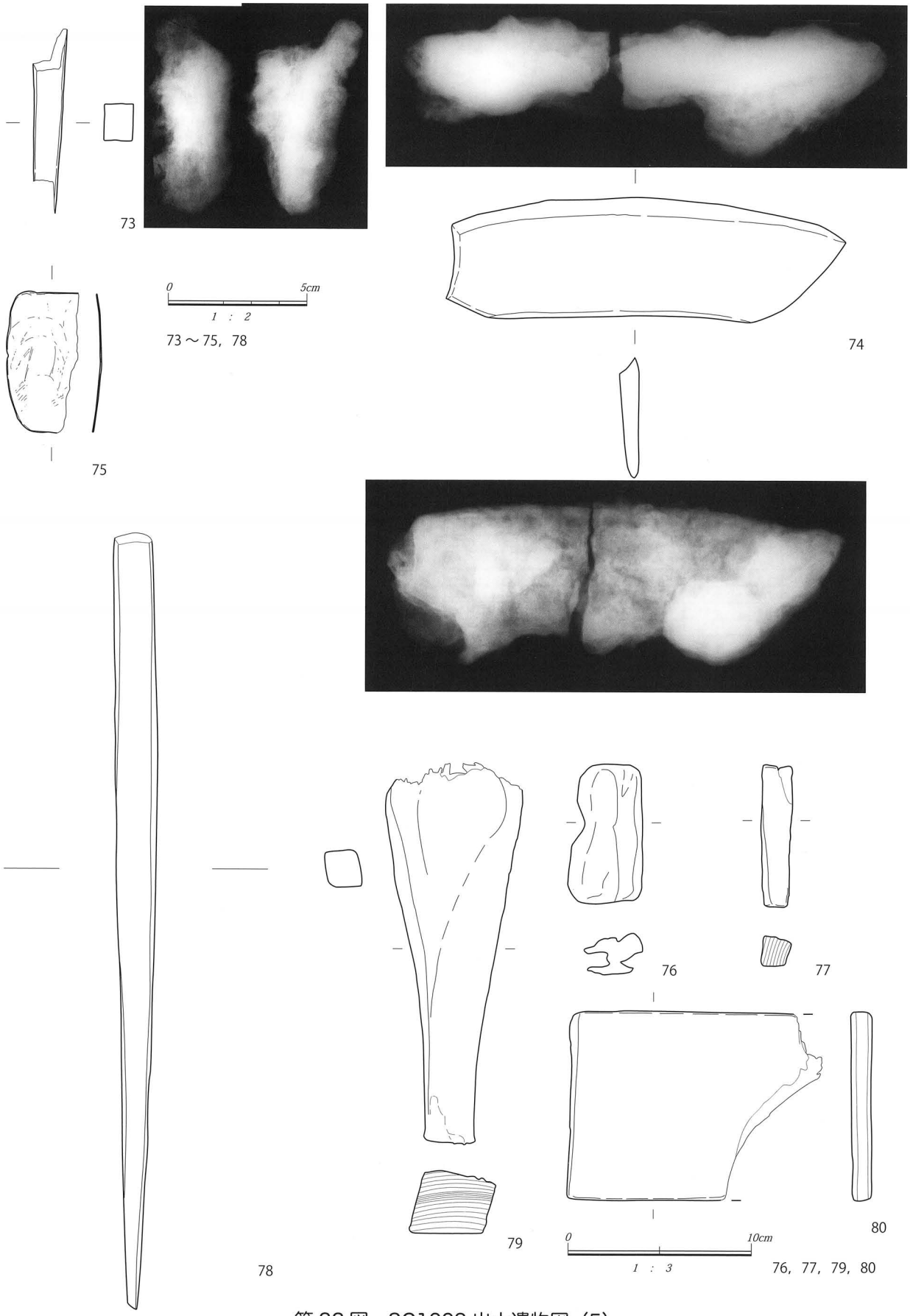
第 8 表　SG1003 出土瓦類観察表（2）



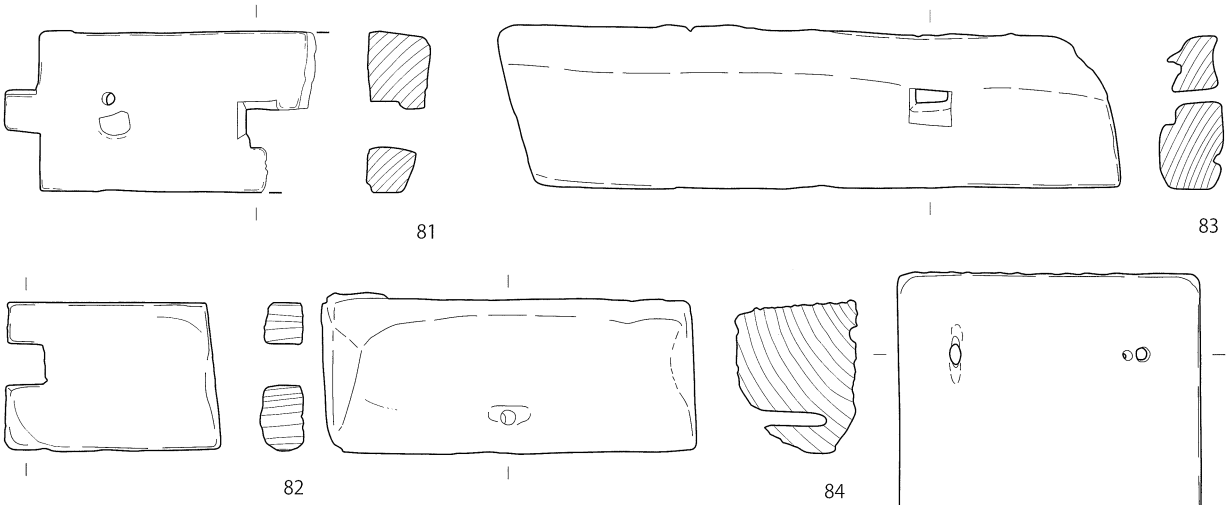
第30図　SG1003出土遺物図（3）



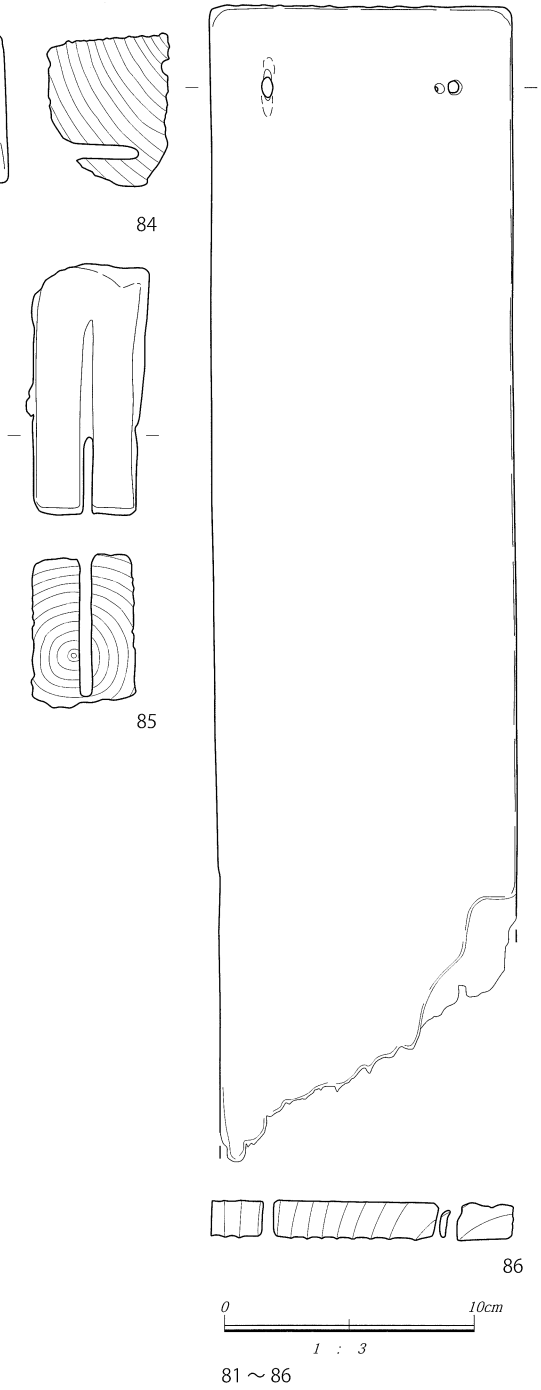
第 31 図　SG1003 出土遺物図（4）



第 32 図　SG1003 出土遺物図（5）



第 33 図　SG1003 出土遺物図（6）



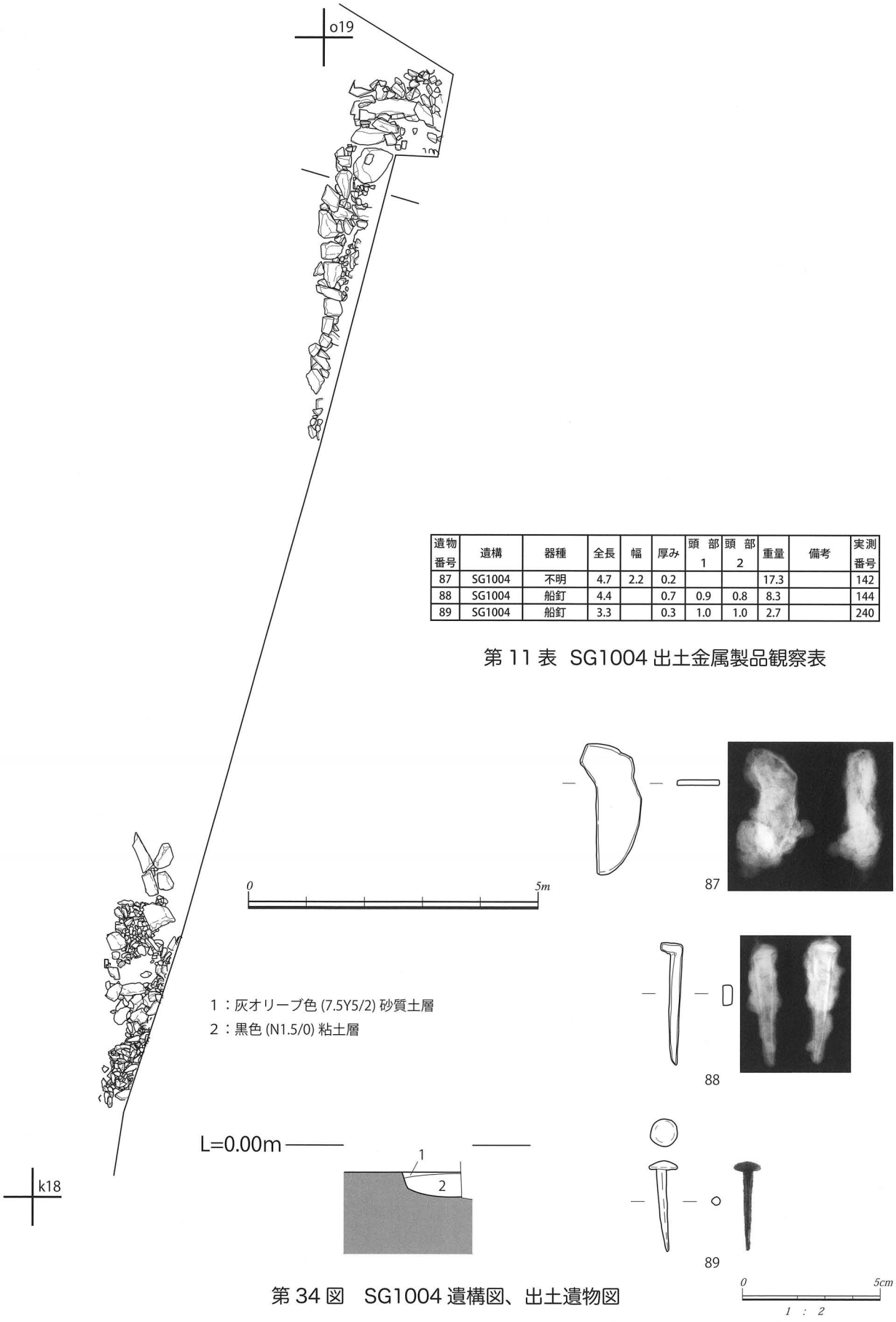
81 ～ 86

遺物番号	遺構	器種	全長	幅	厚み	頭部1	頭部2	重量	備考	実測番号
42	SG1003	船釘	4.2		0.5	1.1	1.0	5.8		246
43	SG1003	船釘	4.3		0.4	0.8	0.7	4.2		252
44	SG1003	船釘	3.6		0.4	1.1	1.0	3.4		258
45	SG1003	船釘	2.9		0.3	0.8	0.7	1.7		88
46	SG1003	船釘	2.9		0.2	0.9	0.9	1.6		247
47	SG1003	船釘	2.1		0.2	0.5	0.5	0.5		249
48	SG1003	船釘	2.1		0.2	0.4	0.4	0.3		257
49	SG1003	船釘	2.2		0.2	0.4	0.4	0.4		254
50	SG1003	船釘	1.9		0.2	0.4	0.3	0.3		255
51	SG1003	船釘	1.9		0.2	0.4	0.4	0.3		260
52	SG1003	船釘	2.2		0.2	0.5	0.5	0.3		256
53	SG1003	船釘	1.6		0.2	0.4	0.4	0.3		259
54	SG1003	船釘	7.6		0.4	0.6	0.5	6.9		250
55	SG1003	船釘	6.4		0.4	0.4	0.3	3.1		253
56	SG1003	船釘	4.2		0.3	0.6	0.3	2.0		251
57	SG1003	船釘	3.6		0.3	0.6	0.3	1.4		287
58	SG1003	船釘	2.7		0.3			0.7		248
59	SG1003	船釘	3.1	0.4	0.4			3.2		315
60	SG1003	鎹	8.0	2.2	1.1			93.7		330
61	SG1003	船釘	7.3	2.1	1.3			125.5		328
62	SG1003	船釘	9.2	0.6	1.1			61.9		336
63	SG1003	船釘	5.3	0.5	1.2			21.3		323
64	SG1003	不明	7.8	0.6	0.6			8.7		331
65	SG1003	船釘	4.5	0.5	0.6			24.0		316
66	SG1003	船釘	5.8	0.7	0.5			18.6		337
67	SG1003	船釘	(3.9)		0.5			4.4		314
68	SG1003	船釘	3.1	0.4	0.4			5.1		338
69	SG1003	船釘	(3.5)		0.6			2.7		313
70	SG1003	船釘	9.7	1.6	0.8			92.0		339
71	SG1003	船釘	6.4	1.6	1.1			26.4	木を含む厚さ 1.30	327
72	SG1003	鎹	10.7	1.0	1.3			79.6	足長　3.20	305
73	SG1003	船釘	6.7	1.2	1.3			71.5		329
74	SG1003	不明	14.1	4.3	0.7			344.0		335
75	SG1003	飾金具	5.1	2.6	0.5			6.3		334
78	SG1003	鑿	(7.0)		0.4			4.6		539

第 9 表　SG1003 出土金属製品観察表

遺物番号	遺構	器種	長さ	幅	厚み	備考	実測番号
76	SG1003	不明	4.1	7.6	2.2		563
77	SG1003	杭	7.7	1.6	1.6		561
79	SG1003	杭	20.7	7.4	3.4		552
80	SG1003	不明板材	10.3	13.5	1.1		553
81	SG1003	船部材	6.4	12.4	2.5		558
82	SG1003	船部材	5.9	8.6	1.7		560
83	SG1003	船部材	6.6	24.7	2.5		554
84	SG1003	船部材	6.4	14.9	4.9		557
85	SG1003	船部材	9.6	4.6	6.1		556
86	SG1003	船部材	45.9	12.0	1.4		555

第 10 表　SG1003 出土木製品観察表



遺物番号	遺構	器種	全長	幅	厚み	頭部1	頭部2	重量	備考	実測番号
87	SG1004	不明	4.7	2.2	0.2			17.3		142
88	SG1004	船釘	4.4		0.7	0.9	0.8	8.3		144
89	SG1004	船釘	3.3		0.3	1.0	1.0	2.7		240

第 11 表　SG1004 出土金属製品観察表

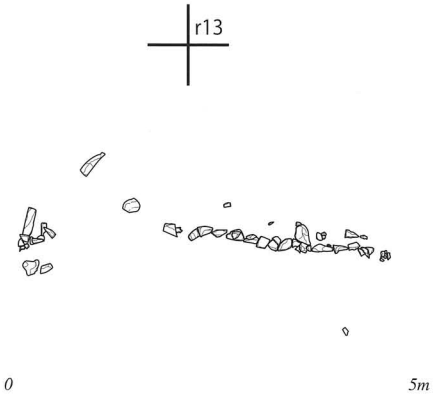
第 34 図　SG1004 遺構図、出土遺物図

ＰＬ．47　SG1004 完掘状況１

ＰＬ．48　SG1004 完掘状況２

42 ～ 71 は船釘である。72 は鎹である。73，78 は楔もしくは鑿、鏨である。74 は不明鉄器であるが、下端には刃部が形成されている。一方、左側片は原形を保っており、茎部の欠損は認められない。楔のように使用した可能性も想定される。75 は銅製の飾板である。

76 は不明木製品である。77，79 は杭である。80 は不明板材である。81 ～ 86 は船部材と推定されるが使用箇所は不明である。



第 35 図　SG1005 遺構図

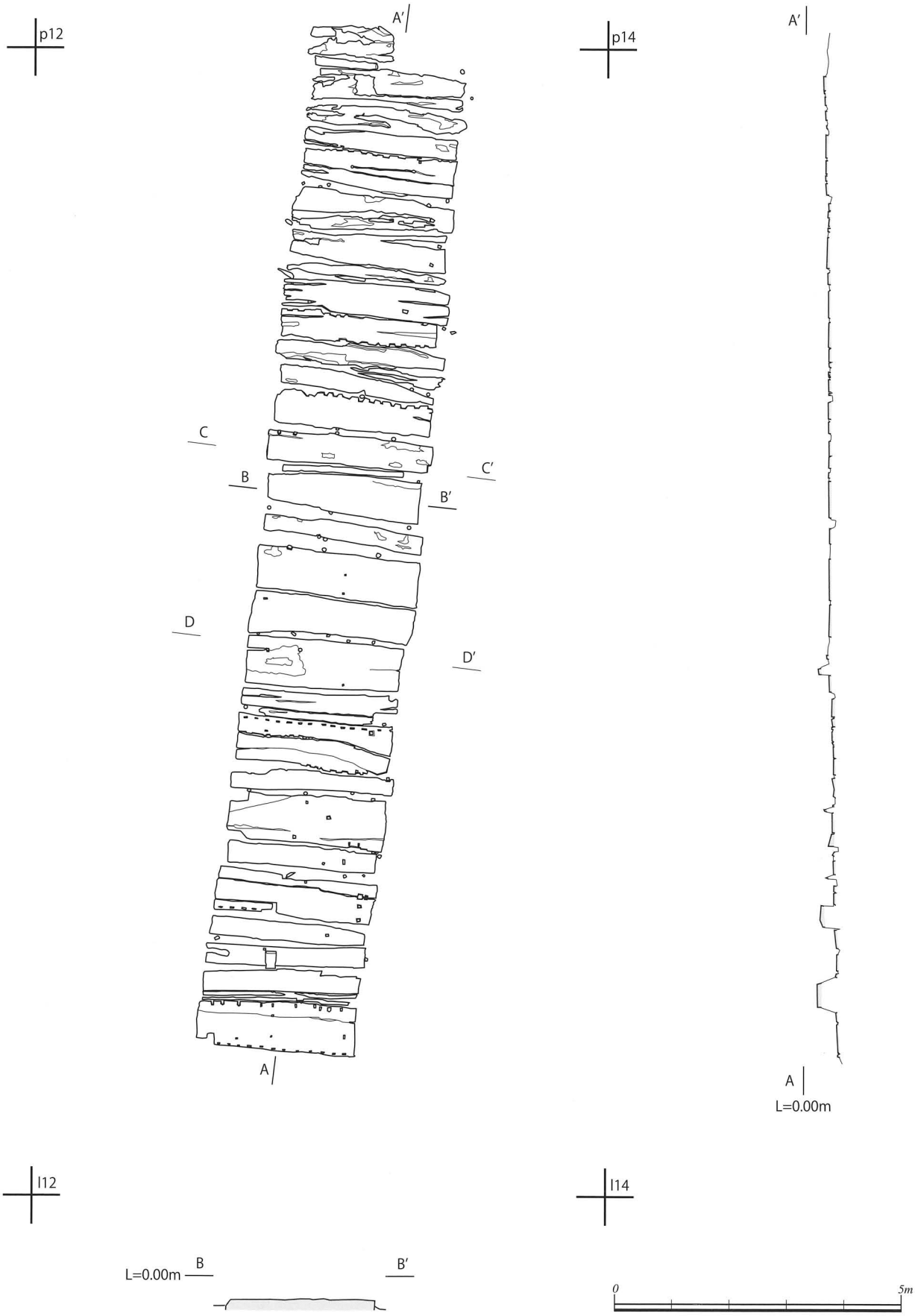
４号石敷基礎遺構 SG1004（第 34 図）

１区、ｋ 18 ～ｎ 19 グリッド付近にて検出。南北長 18 ｍの範囲に直線状に延びる石敷基礎である。ｎ 19 グリッド付近の石敷は、南北長約 5.5 ｍに渡って結晶片岩割石や砂岩川原石が小口積みや平積みを併用して石列を形成している。御船屋東側壁に該当する。ｋ 18 グリッド付近の石敷は、約 60㎝程度の砂岩川原石と 20㎝程度の結晶片岩割石が散乱する。砂岩川原石は石垣の一部であり、結晶片岩割石は裏込石であったものが崩落したものと推定される。

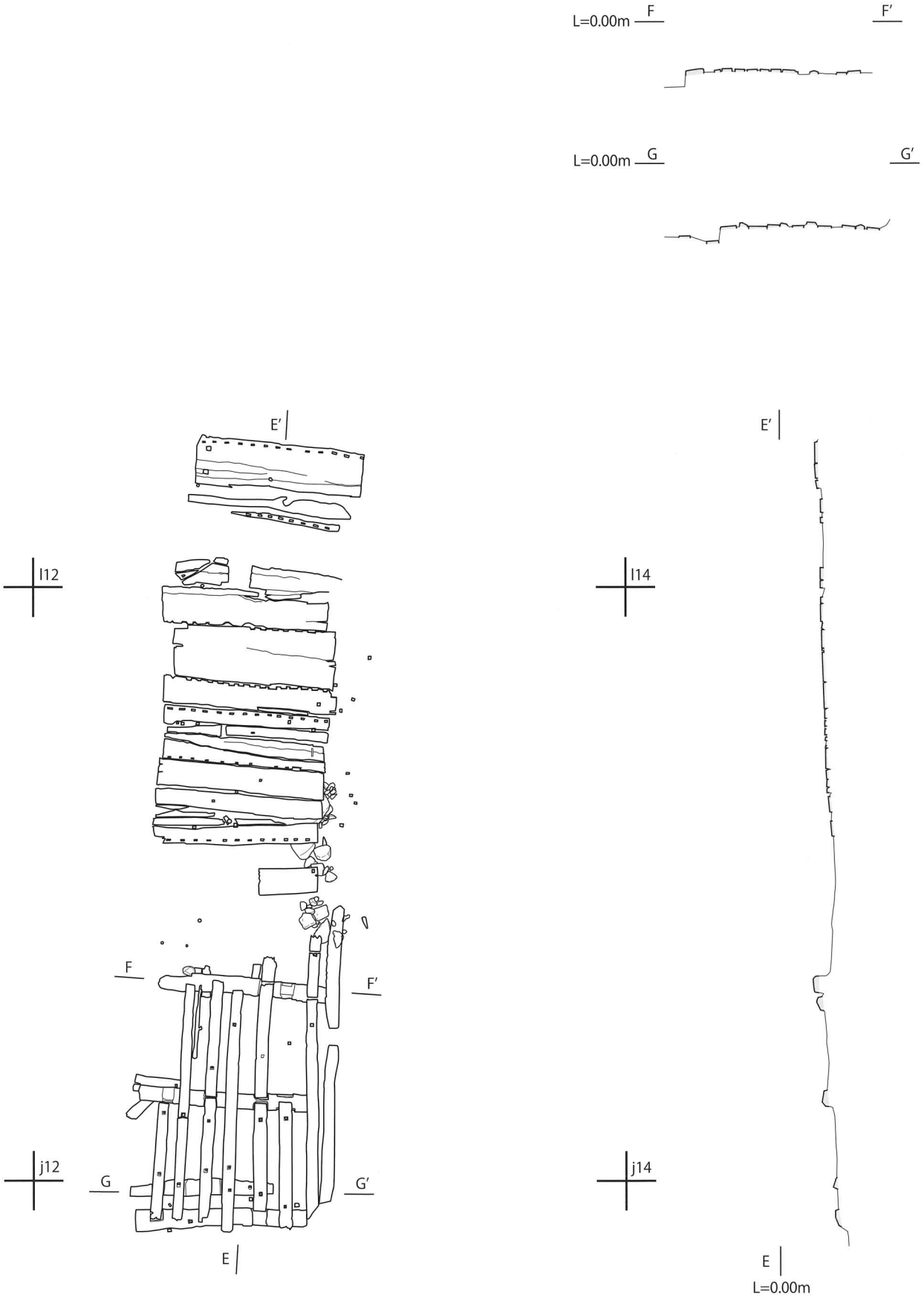
87 は不明鉄片である。切片の可能性がある。88，89 は船釘である。

ＰＬ．49　SJ1001 完掘状況（南東から）

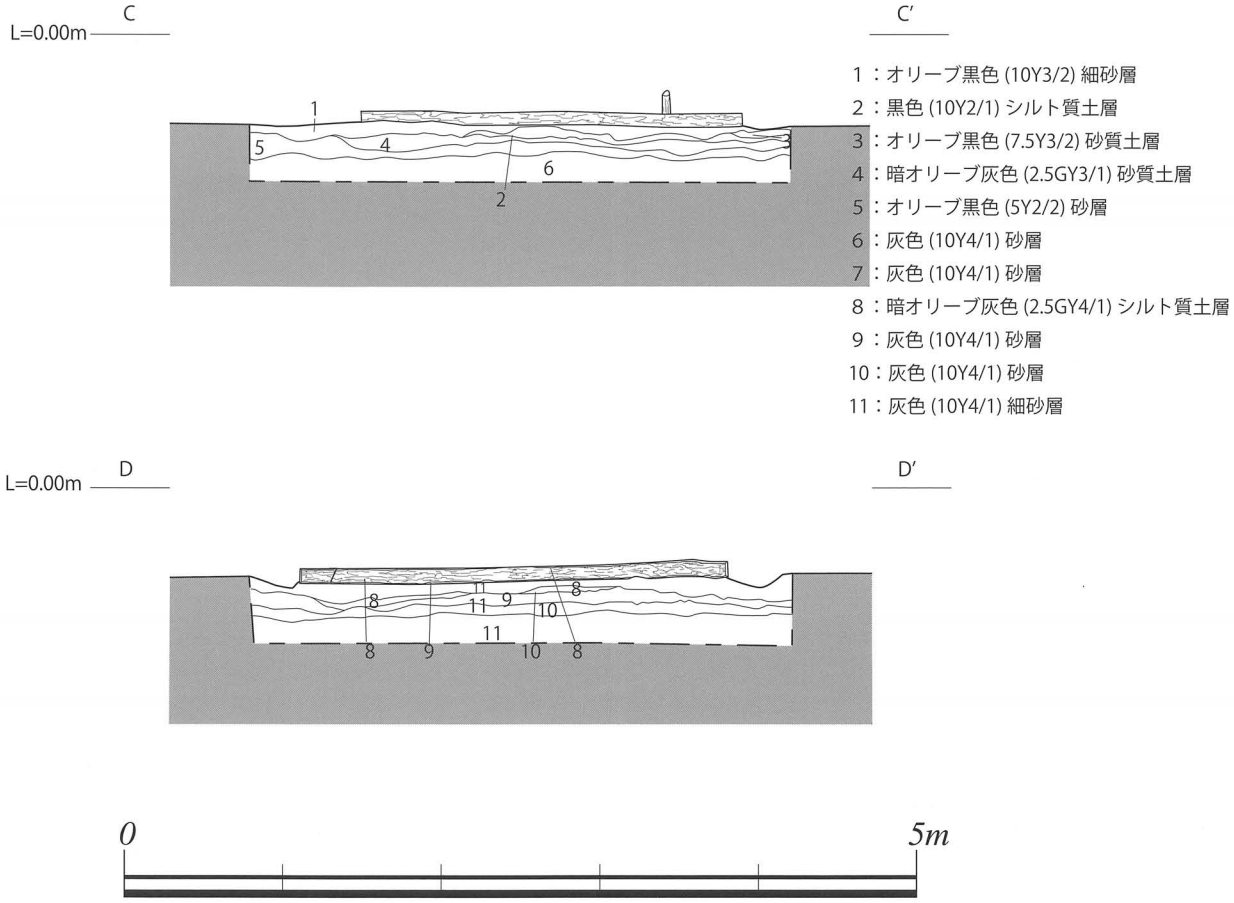
ＰＬ．50　SJ1001 完掘状況（東から）１



第36図　SJ1001 遺構図（1）



第 37 図　SJ1001 遺構図（2）　0　5m



第 38 図　SJ1001 遺構図（3）

ＰＬ．51　SG1001，SJ1001 完掘状況（南から）

ＰＬ．52　SJ1001 完掘状況（東から）2

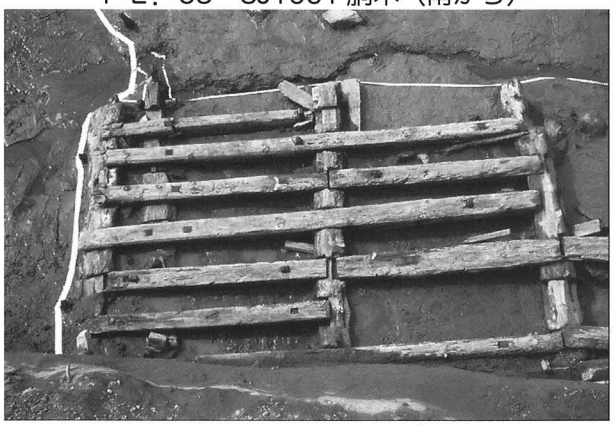
5 号石敷基礎遺構 SG1005（第 35 図）

1 区、q 12，13 グリッド付近にて検出。東西長 3 mの石列である。約 20 ～ 30㎝の結晶片岩割石が一列に並んだ状態で検出された。御船屋奥壁部分に該当する石垣の裏込石の一部と推定される。

1 号板敷き遺構 SJ1001（第 36 ～ 39 図）

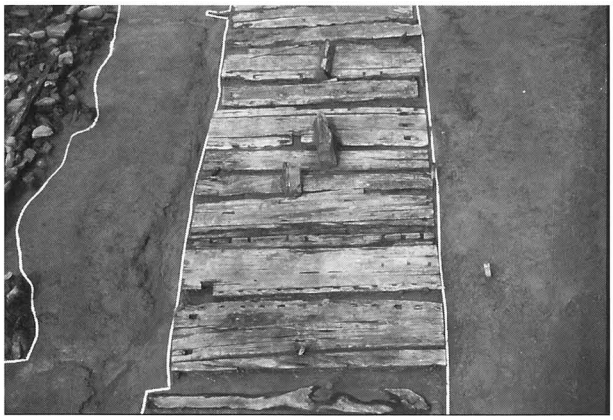
1 区、j 12 ～ o13 グリッド付近にて検出。南北長約 32 mを測る板敷遺構である。船の引き上げ施設の基

ＰＬ．53　SJ1001 胴木（南から）



ＰＬ．54　SJ1001 胴木（東から）

ＰＬ．55　SJ1001 敷板拡大１

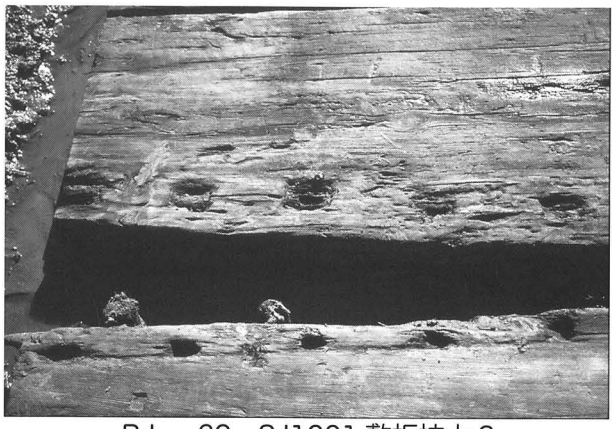


ＰＬ．56　SJ1001 敷板及び杭１

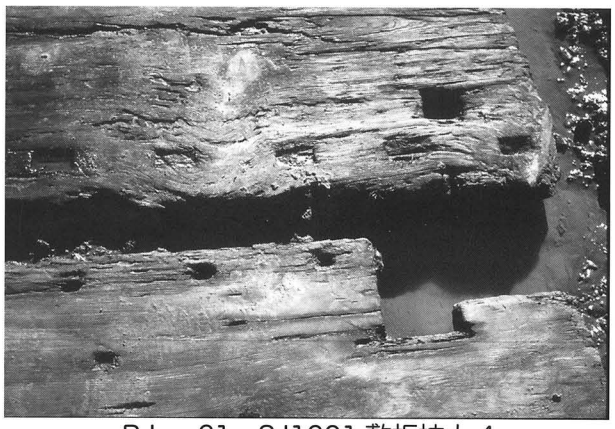
ＰＬ．57　SJ1001 敷板及び杭２

ＰＬ．58　SJ1001 敷板及び杭３

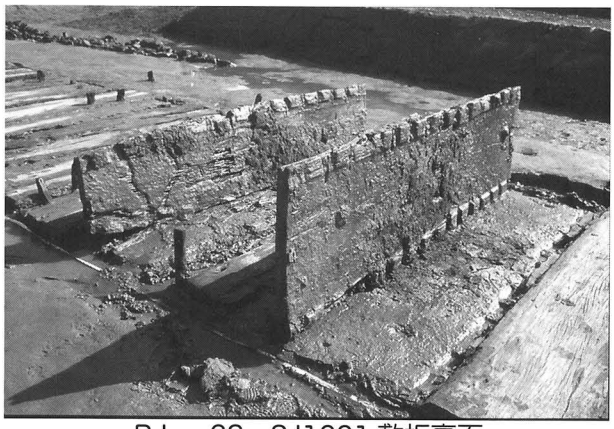
ＰＬ．59　SJ1001 敷板拡大２



ＰＬ．60　SJ1001 敷板拡大３



ＰＬ．61　SJ1001 敷板拡大４



ＰＬ．62　SJ1001 敷板裏面

ＰＬ．63　SJ1001 敷板下部土層堆積状況

ＰＬ．64　SJ1001 胴木下部構造１

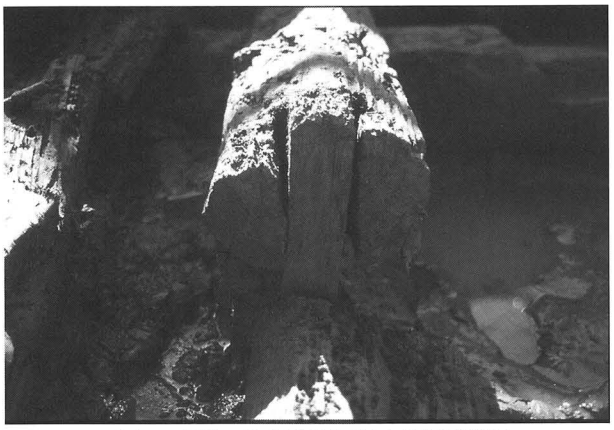
ＰＬ．65　SJ1001 胴木下部構造２

ＰＬ．66　SJ1001 胴木組合せ１

ＰＬ．67　SJ1001 胴木組合せ２

ＰＬ．68　SJ1001 胴木組合せ３

ＰＬ．69　SJ1001 胴木組合せ４



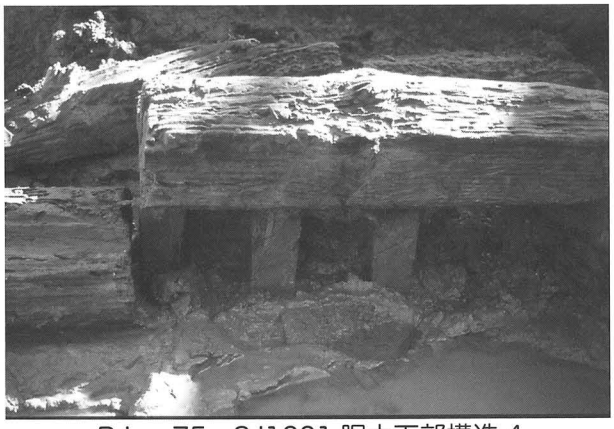
ＰＬ．70　SJ1001 胴木固定状況

ＰＬ．71　SJ1001 胴木臍

ＰＬ．72　SJ1001 胴木下部構造１

ＰＬ．73　SJ1001 胴木下部構造２

ＰＬ．74　SJ1001 胴木下部構造３



ＰＬ．75　SJ1001 胴木下部構造４